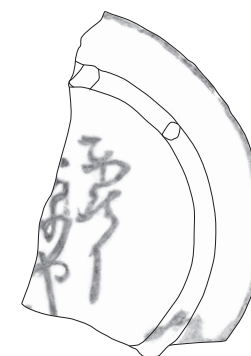


大友府内 21

中世大友府内町跡第 108 次調査

集合住宅建設に伴う発掘調査報告書



2015

大分市教育委員会

大友府内 21

中世大友府内町跡第 108 次調査

集合住宅建設に伴う発掘調査報告書

2015

大分市教育委員会

序 文

本書は、集合住宅建設に伴い実施しました中世大友府内町跡第108次発掘調査の報告書です。

中世大友府内町跡は、大友氏館跡を中心とした大分川の左岸地域に展開する豊後国守護大友氏の拠点であり、政治・経済・文化の中心として栄えた豊後国の中心的な都市でした。

今回の調査地点は、戦国時代の府内の様子を描いた「府内古図」に見える「下町」と、その後、江戸時代に新たにつくられた府内城・城下町の「東新町」に相当します。

調査の結果、「東新町」と考えられる江戸時代の町屋跡や、戦国時代の「下町」の一角に造られた井戸跡などが見つかった他、江戸時代の日向道及び戦国時代の南北道路が確認されました。

これらの道路は、調査地西側の都市計画道路六坊・新中島線に重複しており、戦国時代から続く歴史の道が現在も道路として継承されていることがわかりました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様に利用され、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となり、郷土史研究に幅広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご配慮とご協力を賜りました株式会社作州商事ならびに関係者各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成27年3月27日

大分市教育委員会

教育長

足立 一馬

例 言

- 1 本書は、大分市金池町 5 丁目において集合住宅建設工事に伴う発掘調査として平成 26 年度に実施した中世大友府内町跡第 108 次調査の発掘調査報告である。
- 2 調査は、株式会社作州商事の依頼を受け、平成 26 年 10 月から大分市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査に伴う遺跡の掘削・埋戻作業、調査記録作成、遺物整理は、大分市教育委員会（監督員 塩地潤一）の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者 豊崎晃史）が行った。
- 4 発掘調査は平成 26 年 10 月 8 日から平成 26 年 11 月 30 日の期間で実施し、資料整理及び報告書の作成は平成 27 年 2 月 16 日から平成 27 年 3 月 27 日の期間で行った。
- 5 報告書の作成については、大分市教育委員会（監督員 塩地潤一）の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者 堀井泰樹）が行った。
- 6 本書に掲載した遺物の実測・拓影・製図作業は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者 堀井泰樹）が行った。
- 7 本書の執筆は塩地が行った。
- 8 本書の編集は、大分市教育委員会の企画に基づき、編集作業を有限会社九州文化財リサーチが行った。
- 9 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原 337 番地の 5）に収蔵・保管している。
- 10 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。

小野正敏（元人間文化研究機構理事）、玉井哲雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）、後藤宗俊（別府大学名誉教授）、渋谷忠章（元大分県立歴史博物館館長）

凡 例

- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SE：井戸跡、② SK：貯蔵穴・定形の土坑、③ SD：溝状遺構、④ SF：道路状遺構、④ SX：性格不明遺構・不定形の土坑
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、旧日本測地系の平面直角座標 2 系を基点として表記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線、以下一点鎖線、二点鎖線の順で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位はメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
 1. 遺物断面が黒塗りのもの……………須恵器・須恵質土器・陶器
 2. 遺物断面が灰色のもの……………瓦質土器・瓦器・瓦
 3. 遺物平面の稜線と調整の変換点……………実線
 4. 調整が同じでその単位が分かるもの……………長破線
 5. 釉と付着物、黒班等その範囲を示す必要があるもの……………一点破線
- 6 本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊 X V—陶磁器分類編—』
小野正敏 1982「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
乗岡 実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』
中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
長 直信 2012「大友氏館跡出土土器の編年的検討」『大分市市内遺跡確認調査概報— 2010・2011 年度』大分市教育委員会

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第II章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 調査の成果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 主要遺構	9
第4節 出土遺物の概要	22
第IV章 総括	28
第1節 自然堤防上に展開する遺構の時代別様相	28
第2節 近世日向道と「東新町」推定地における遺構分布について（第32図）	45
第3節 中世大友府内町跡第4南北街路と「下町」推定地における遺構分布について（第33図）	46

図版目次

第1図 調査地点位置図	2	第18図 SK001遺構実測図(1/40)	17
第2図 調査区周辺の地形と遺跡分布図	3	第19図 SK115遺構実測図(1/40)	18
第3図 土層模式図	5	第20図 SK200遺構実測図(1/40)	19
第4図 遺構配置図(第1面)(1/200)	6	第21図 SF210遺構実測図(1/40)	20
第5図 遺構配置図(第2面)(1/200)	6	第22図 SF210遺構実測図(完掘時)(1/40)	21
第6図 全体遺構図(第1面)(1/200)	7	第23図 SK065出土遺物実測図 1 (1/4)	22
第7図 全体遺構図(第2面)(1/200)	7	第24図 SK138出土遺物実測図 2 (1/4)	23
第8図 調査区南壁(C-D間)土層断面図(1/40)	8	第25図 SK152出土遺物実測図 3 (1/4)	24
第9図 調査区西壁(D-E間)土層断面図(1/40)	8	第26図 SD145出土遺物実測図 4 (1/4)	25
第10図 SK065遺構実測図(1/40)	9	第27図 SD146出土遺物実測図 5 (1/4)	26
第11図 SK076土層断面図(1/40)	10	第28図 SF099・SE066出土遺物実測図 6 (1/4)	27
第12図 SK138遺構実測図(1/40)	11	第29図 SK001・SK115出土遺物実測図 7 (1/4)	28
第13図 SK152遺構実測図(1/40)	12	第30図 SK200出土遺物実測図 8 (1/4)	29
第14図 SD145遺構実測図(1/40)	13	第31図 カクラン・SK092・SF100・SD132・SK157 出土遺物実測図 9 (1/4)	30
第15図 SD146遺構実測図(1/40)	14	第32図 「東新町」推定地と検出された近世の道路	45
第16図 SF099遺構実測図(1/40)	15	第33図 「下町」推定地と検出された第4南北街路	47
第17図 SE066遺構実測図(1/40)	16		

表 目 次

第1表 遺構出土遺物一覧表 ①	31	第8表 遺構出土遺物一覧表 ⑧	38
第2表 遺構出土遺物一覧表 ②	32	第9表 遺構出土遺物一覧表 ⑨	39
第3表 遺構出土遺物一覧表 ③	33	第10表 遺構出土遺物一覧表 ⑩	40
第4表 遺構出土遺物一覧表 ④	34	第11表 遺構出土遺物一覧表 ⑪	41
第5表 遺構出土遺物一覧表 ⑤	35	第12表 遺構出土遺物一覧表 ⑫	42
第6表 遺構出土遺物一覧表 ⑥	36	第13表 遺物観察表 ①	43
第7表 遺構出土遺物一覧表 ⑦	37	第14表 遺物観察表 ②	44

写真図版目次

写真図版 1

108次-1区第1面遺構掘削完了(西より)……………	49
108次-1区第2面遺構完掘状況(西より)……………	49

写真図版 2

108次-2-2区第2面遺構掘削完了(西より)……………	50
調査区西壁土層断面(東より) ……………	50

写真図版 3

調査区南壁土層断面(北より) ……………	51
調査区西壁土層断面(東より) ……………	51
SK065遺構完掘状況(南より) ……………	51
SK076遺構検出状況(北より) ……………	51
SK152遺構完掘状況(北より) ……………	51
SD145遺構完掘状況(北より) ……………	51
SD145遺構南壁土層断面(北より) ……………	51
SD146遺構完掘状況(北より) ……………	51

写真図版 4

SD146遺構南壁土層断面(北より) ……………	52
SF100・210調査区南壁土層断面(北より) ……	52
SD110・111・112遺構完掘状況(北より) ……	52
SE066遺構完掘状況(東より) ……………	52
SE066遺構土層断面(南より) ……………	52
SE066井戸粹立ち上がり(東より) ……………	52
SK001遺構検出状況(北より) ……………	52
SK001遺構完掘状況(北より) ……………	52

写真図版 5

SK115遺構完掘状況(南より) ……………	53
SK115遺構土層断面(東より) ……………	53
SK200遺構完掘状況(北より) ……………	53
SK200遺構土層断面(北より) ……………	53
SK200遺構東壁土層断面(西より) ……………	53
SF210遺構完掘状況(北より) ……………	53
SD110・111・112遺構検出状況(東より) ……	53
SD112遺構土層断面(北より) ……………	53

写真図版 6

第2面2-1区遺構完掘状況(西より) ……………	54
SD110遺構完掘状況(東より) ……………	54
SD113土層断面(東より) ……………	54
SD110遺構掘削状況(東より) ……………	54
SD110遺構土層西壁断面(東より) ……………	54
道路状遺構(SF210)路盤掘削状況(北より) ……	54
SF210に付帯する溝状遺構(SD110) 掘削状況(東より) ……………	54
調査区南壁土層断面図作成状況(北より) ……	54

写真図版 7

主要出土遺物写真 ① ……………	55
------------------	----

写真図版 8

主要出土遺物写真 ② ……………	56
------------------	----

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査経過

中世大友府内町跡は大分県大分市の市街中心部に所在する埋蔵文化財包蔵地で、中世大友城下町跡として平成 5 (1993) 年 3 月に大分県教育委員会が範囲を決定した遺跡である。その後、平成 20(2008) 年 3 月に名称変更が行われ、中世大友府内町跡として周知されている。

本遺跡の範囲には中世の地割が良好に遺存し、現代の道路下から中世の道路跡が検出される。また、遺跡の北西部は近世の府内城・城下町と重複し、土塁など江戸時代の遺構の下層から中世の遺構が確認される区域である。

この一角において、集合住宅建設を前提とした開発が計画され、平成 25 年 12 月には株式会社作州商事が当該地で集合住宅建設を行うことになり、建設計画上必要とみられる埋蔵文化財発掘調査について文化財課と協議を行い、平成 26 年 3 月 31 日付けで文化財保護法第 93 条の届出と調査費用の積算依頼がなされた。これを受けて遺跡の有無と発掘調査費用を積算するため、確認調査と既存建物解体時の立会を行うことになった。平成 26 年 4 月 4 日に行った確認調査では、一部で整地層をはさみ近世～中世の複数の遺構面が確認された。5 月 8 日に既存建物の解体時の立会調査を経て 6 月 16 日には再度の確認調査を行うなかで調査範囲を絞り込み、6 月 18 日付けで調査費用の積算結果を提示した。遺跡の取り扱いについては、平成 26 年 6 月 27 日付けで大分県教育委員会教育長野中信孝より発掘調査の実施について指示が行われた。また、工事計画と発掘調査の円滑な調整を図るため実施計画を作成し、開発者の同意が得られたため、平成 26 年 7 月 18 日付けで埋蔵文化財発掘調査業務等の協定ならびに埋蔵文化財発掘調査委託契約を開発者と締結した。

発掘調査は中世大友府内町跡第 108 次調査として平成 26 年 10 月 8 日に着手し、同年 11 月 30 日に調査区の埋め戻しを行い完了した。調査面積は 512㎡である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後引き続き行い、報告書の作成を平成 27 年 3 月 27 日まで行った。

第 2 節 調査組織

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

調査体制 (平成 26 年度)

大分市教育委員会教育部文化財課

文化財課長	塔鼻 光司
参事	神田 洋
	坪根 伸也
	栗田 博之
歴史資料館館長	武富 雅宣
副館長	久多羅木明
特別顧問	玉永 光洋
	讃岐 和夫

埋蔵文化財担当班
参事補 (グループリーダー) 池邊千太郎
専門員 (調査・整理担当) 塩地 潤一
主 査 佐藤 道文
管理庶務担当班
参事補 (グループリーダー) 利根貴美代
主 事 朝川 貴俊

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

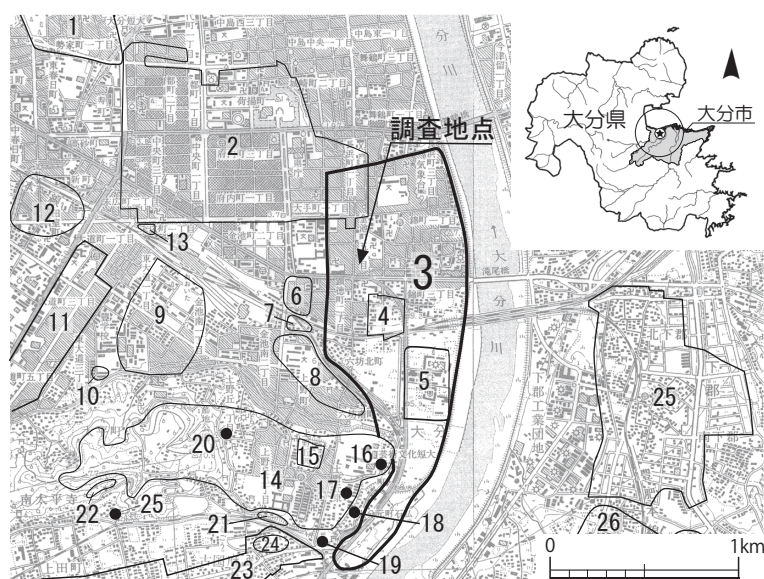
第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置し、北側を瀬戸内海西端の別府湾に面している。別府湾に面する一帯は大分平野が広がり、平野の東部には由布山系を祖流とする大分川が流れる。大分川は大分平野西半部の形成にかかる主要河川で、この河口部の左岸に形成された標高4～6m前後の沖積地に遺跡は立地する。このため、遺跡の東側には大分川が北流して北側に別府湾を臨み、南側には標高約30～40mの上野台地が東西方向に延び、その西側にある標高628mの高崎山へ向けて庄ノ原丘陵が続く環境下に位置している。

中世大友府内町跡が形成された沖積地には、旧河道や自然堤防、後背湿地など古地形が復元され、中世大友府内町跡の東西にそれぞれ存在する南北方向の自然堤防上には、中世都市「府内」の形成に先行して古代～中世前半期にかけての遺構分布が認められる（第2図）。

第2節 歴史的環境

調査区は中世大友府内町跡の下町と近世の府内城・城下町の東新町にあたり、「府内古図」に記された第4南北街路と近世日向道推定地の東側隣接地に位置する。中世府内町の第4南北街路と近世日向道の推定地は長浜（塩九升）通りと呼ばれている市街地の主要幹線道路で、13世紀以前からすでに存在していた可能性が指摘されているものである（註1）。また、古代官道の豊後道と日向道推定ルートの交差点と結節し、海岸部へと向かう道路として位置づけられており、近年では中世大友府内町の基軸となった道路の1つと評価されているものである（註2）。



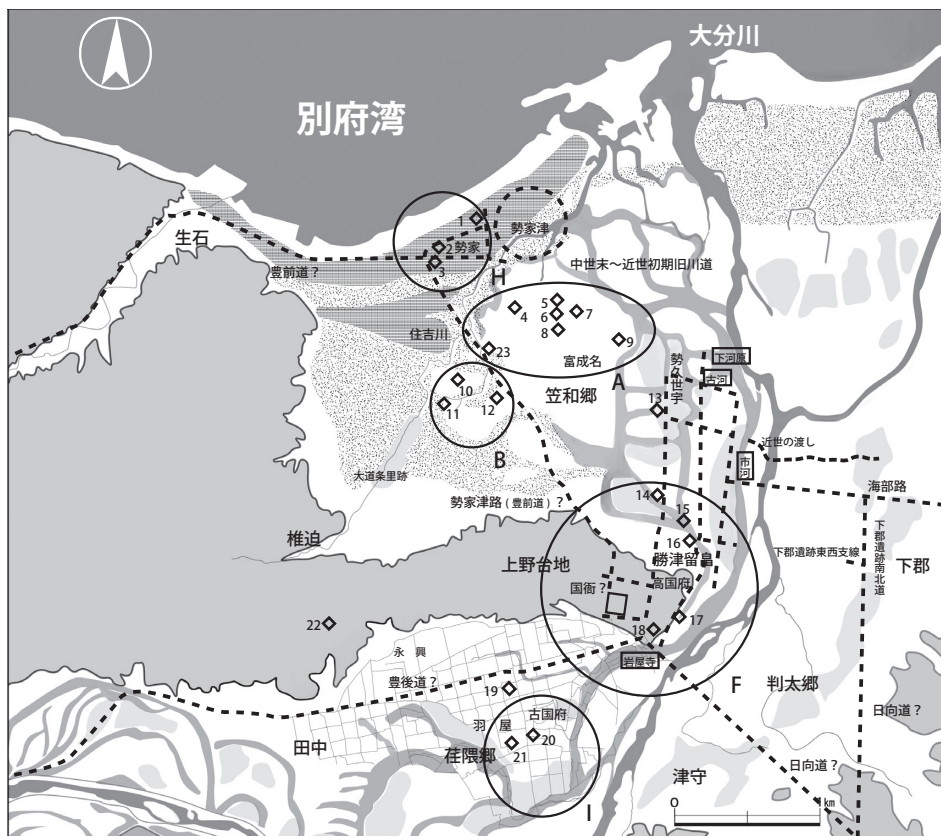
- | | | |
|------------|-----------------|-------------|
| 1 勢家遺跡 | 11 大道条里跡 | 21 岩屋寺横穴墓群 |
| 2 府内城・城下町 | 12 東田室遺跡 | 22 南太平寺横穴墓群 |
| 3 中世大友府内町跡 | 13 末広遺跡 | 23 古国府遺跡群 |
| 4 大友氏館跡 | 14 上野遺跡群 | 24 岩屋寺遺跡 |
| 5 蔭山万寿寺跡 | 15 上野大友館跡(上原館跡) | 25 下郡遺跡群 |
| 6 南金池遺跡 | 16 大臣塚古墳 | 26 羽田遺跡 |
| 7 上野町遺跡 | 17 上野竜王畑遺跡 | |
| 8 若宮八幡宮遺跡 | 18 大分元町石仏 | |
| 9 大道遺跡群 | 19 岩屋寺石仏 | |
| 10 東大道遺跡 | 20 上野廃寺 | |

1. 大分市遺跡地図 (1/4000)



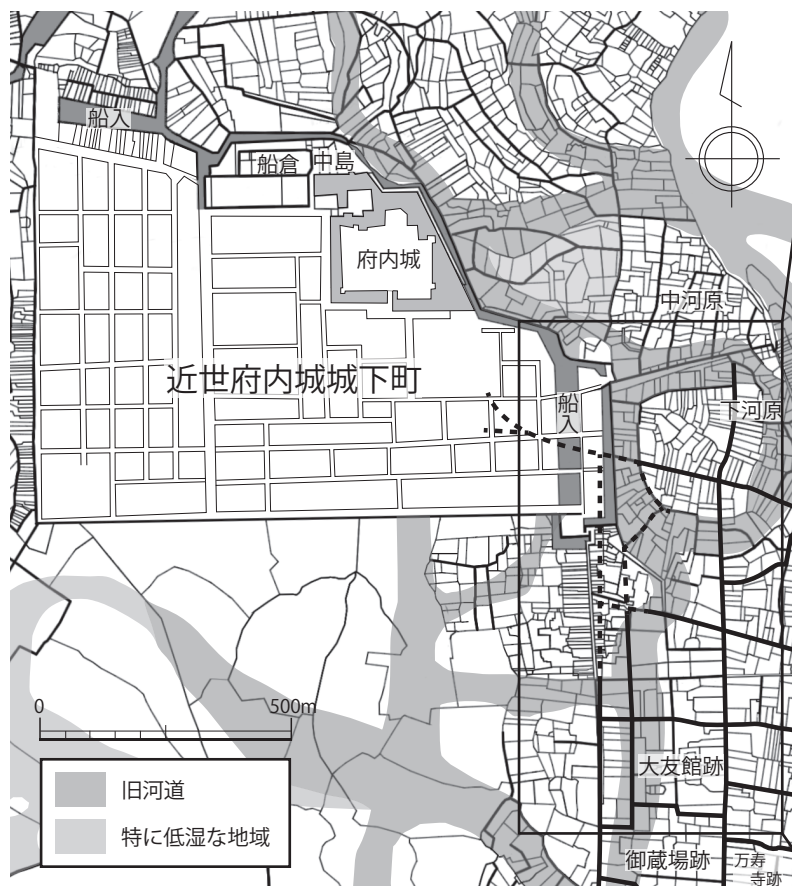
2. 中世大友府内町跡調査地点(部分) (1/10000)

第1図 調査地点位置図

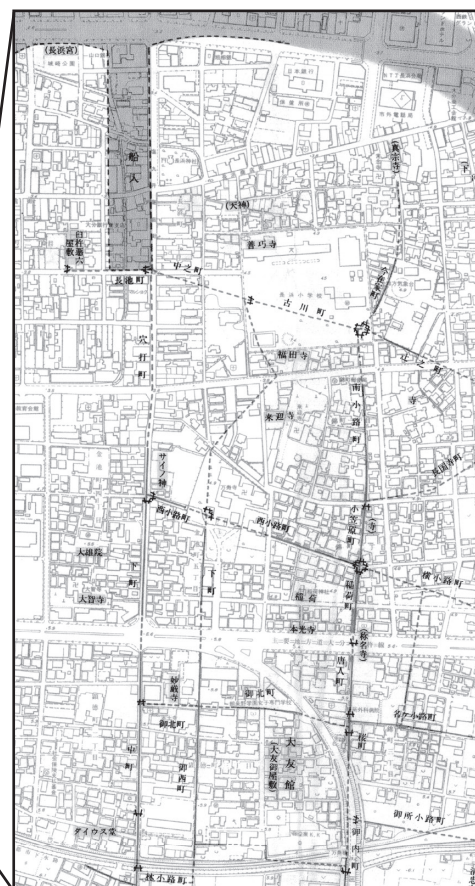


1. 11世紀後半～13世紀を中心とする遺跡

1. 勢家3次 (土坑：13世紀後半～14世紀)
2. 勢家2次 (南北溝：12世紀中頃～後半)
3. 勢家1次 (石列：12世紀中頃～後半)
4. 府7次 (井戸・土坑：11世紀後)
5. 府2次 (土器出土：古代)
6. 府19次 (土坑：13世紀)
7. 府17次 (土器出土：12～13世紀)
8. 府11次 (区画溝：12世紀中頃)
9. 府1次 (土坑：12世紀後半)
10. 東田室3次 (土坑：12～13世紀)
11. 東田室1次 (墓：12世紀末)
12. 府21次 (土坑：中世)
13. 町74次 (土坑：12世紀中頃)
14. 宮ノ前a (旧河道12～13世紀埋没)
15. 町36次 (南北溝・土坑：13世紀)
16. 町31次 (東西溝：13世紀～14世紀初 瑞光寺か)
17. 元町石仏参道跡 (陶磁器出土：12世紀中頃～後半)
18. 古国府4次 (上野) (掘込地業：12世紀前半)
19. 古国府1次 (銅給) (陶磁器出土：13世紀)
20. 古国府2次 (石明)
- (区画溝・池・井戸・掘立柱建物跡：11世紀末～13世紀)
21. 八幡前 (掘立柱建物跡・溝：11～13世紀)
22. 城南3次 (木棺墓：12世紀)
23. 府9次 (土坑：12～13世紀)



2. 地形図及び明治時代の地籍図 (1/5000)



3. 戦国時代の府内町復元図 (部分) (1/10000)

* 本図は、明治初期に作成された字切り図をもとに、古絵図や字名、地割り痕跡などから諸施設や道路の位置・範囲を、地籍図(左図)、現在の地図(右図)に復元しているが、発掘調査によって諸施設の範囲の変更(大友館跡・御蔵場跡・万寿寺跡等)や施設域に、後に他の施設が造られる(寺域の一部に町が建設される等)ことなどがわかってきた。地割り痕跡はその最終段階を残しており、本来の諸施設の範囲を示していない。

第2図 調査区周辺の地形と遺跡分布図

【勢九世宇塩浜】

鎌倉時代の歴史資料から笠和郷富成名の勢九世宇に塩浜の存在が示唆され、その比定地は府内城・城下町の塩九升町付近と考えられている（註3）。「勢九世宇」という地名が「塩九升」の語源であることは想像が付き、近世の塩九升町がこの道路推定ルート上にあたることから、鎌倉時代の塩浜は本調査区の北側周辺部に位置することになる。

関連する遺構として、中世大友府内町跡の南西部に位置する若宮八幡宮遺跡と南金池遺跡では、製塩土器がまとまって出土しており、古墳時代と平安時代に周辺地域で製塩が行われていたことが推定されている。先述した鎌倉時代の勢九世宇塩浜の存在と併せ、沖積地化の進行に連動して製塩遺跡が海岸部に向けて南側から北側へ変遷したことが指摘されており（註4）、当該地の歴史的特性と位置づけることが可能である。

【中世大友府内町第4 南北街路】

この街路に比定される道路状遺構は複数地点で確認されており、15世紀末～16世紀初頭頃には敷設され、16世紀後半～末頃まで存続する。これらの街路下からは14世紀末～15世紀前半頃に比定される南北方向の溝状遺構や柱穴列が検出されており、このような区画性の強い遺構が遺跡の広範囲に分布することから、当該期には府内町の基軸線がすでに成立していたものと考えられている（註5）。

第2-1図は既往の研究成果を基に、地籍図と遺構分布を分析して作成された古代～中世前半期の道路の推定ルート図である（註6）。大分平野の11世紀後半～13世紀頃の遺構分布は、大きく5地点で確認され、これらを道路が連絡する構図となっている。

これまでの発掘調査では第1節で触れた中世大友府内町跡西側に認められる自然堤防上に中世前半期まで遡る道路状遺構は発見されていないものの、古代～中世前半期の遺構が点在する。海岸部付近には鎌倉時代の塩浜の存在が示唆され、自然堤防の最高位に道路の推定ルートが復元されていることを踏まえれば、府内町の形成に先駆けて道路が存在した可能性は十分に想定される（註7）。

【推定下町の発掘調査事例】

平成18年度に実施した第74次調査が相当する（註8）。第4 南北街路西側の町の裏手にあたり、大雄院や大智寺などの北側に位置する。検出された遺構は16世紀代と12世紀代に比定されるもので、時期ごとの遺構密度は低いものの、その構成は注目される。16世紀代の遺構には井戸跡や溝状遺構などがあり、詳細な時期は不明ながら掘立柱建物が併存する可能性が高い。遺構密度の低さや掘立柱建物跡の存在から、町屋の裏手とするには違和感がある。この町は近世の府内城・城下町には移転していない町の1つであり（註9）、その位置づけについては慎重を期す必要がある。

また、12世紀代には土取りが行われており、安定した地盤であることが認識されていたものと判断される。

（近世の東新町）

府内城・城下町の塩九升口から南下する日向道沿いに形成された新町で、府内城絵図の中で最も古く、一番詳細で精巧な絵図とされる豊後府内城之絵図（正保城絵図）から17世紀中頃にはすでに存在した町屋である（註10・11）。府内城・城下町は侍屋敷と町屋が完全に分離され、総構堀に囲まれた近世都市で、平面形状は方形を基本とし、大陸的な城郭都市の様相を呈する全国でも極めて稀な城下町であることが知られる（註12）。

このため、堀の外に町が発展することはなく、若干の例外がこの東新町をはじめ、笠和口門外の西新町から勢家・春日町などがあるものの、基本的には中世大友時代から町が存在していた場所である（註13）。

明治初頭の地籍図には東新町推定地に短冊地割が認められ、現在も明瞭に地割が残されている。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は大分市金池町5丁目に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である中世大友府内町跡の北西部に位置する。今回の調査は、集合住宅建設に伴い、中世大友府内町跡第108次調査として平成26年10月8日から同年11月30日の期間に実施したものである。調査範囲は、遺跡に影響を及ぼす建物建設予定地とし、確認調査において検出された既存建物による攪乱部分を除外する形で調査区を設定した。また、整地層を挟み複数の遺構検出面が確認され、近世陶磁器が多量に出土したことから、標高約4.0m地点の暗灰褐色粘質土層の上層から検出される遺構とその下層遺構を調査対象とした。調査面積は512㎡である。

調査の結果、調査区の西端部で近世の道路状遺構が確認され、その東側一帯に近世・近代の遺構が夥しく重複して発見された。中世の遺構群も認められ、道路状遺構をはじめ、井戸跡や土坑などが検出された。今回検出された遺構の時期は16世紀と18世紀～19世紀に限定され、17世紀代の遺構は確認されていない。また、掘立柱や礎石などの建物遺構も認められなかった。

第2節 基本層序

第3図は調査区南壁を基本に作成した土層模式図である。本調査区の地盤標高は約4.6mで、表土下には暗茶褐色砂質土(1)・暗灰褐色粘質土(2)・明黄褐色シルト質土(3)の順で土層が認められる。

(1) 暗茶褐色砂質土

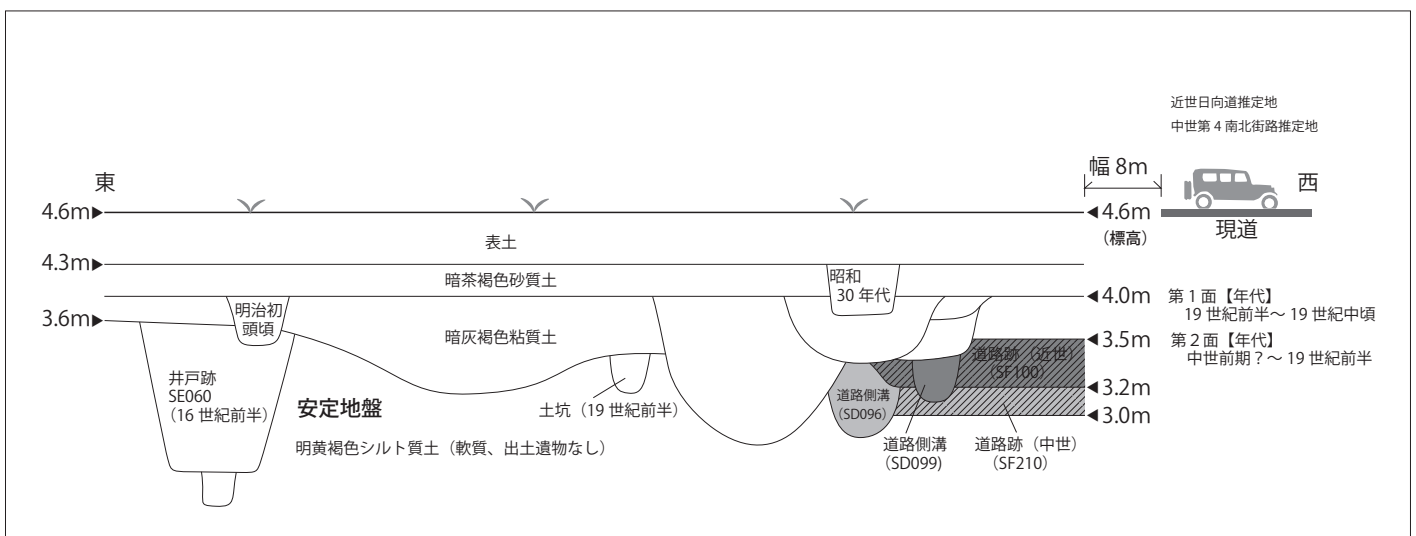
堆積厚は約0.3mで、上層(標高：約4.3m)からは大正後半～昭和前半期に掘削された穴が一定量検出される。

(2) 暗灰褐色粘質土(整地層)

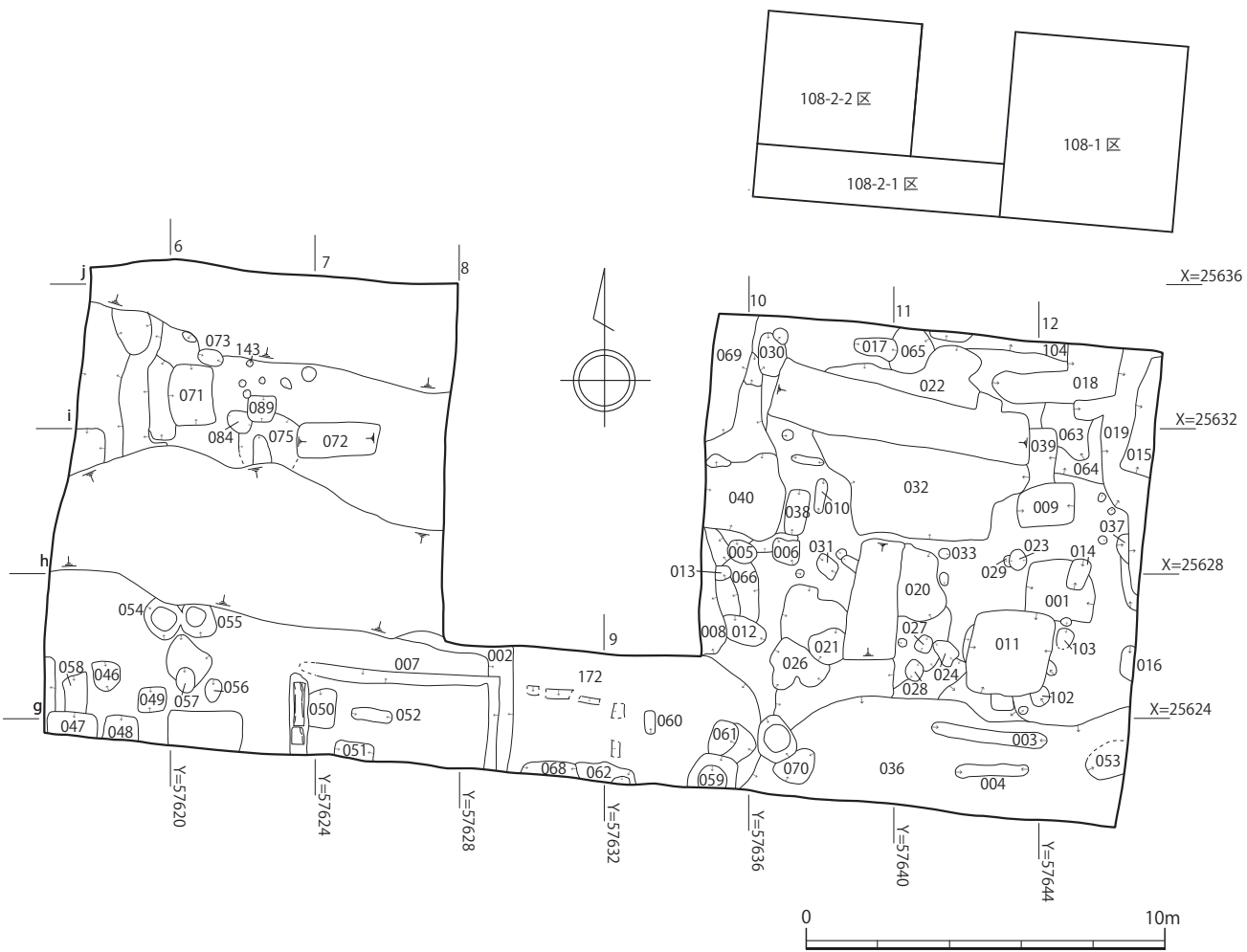
堆積厚は約0.5mで、上層(標高：約4.0m)からは明治初頭頃の土坑群が確認され、これらを第1面の遺構として発掘調査を行っている。暗灰褐色粘質土の形成時期は出土遺物の帰属年代から19世紀前半～中頃と判断される。

(3) 明黄褐色シルト質土

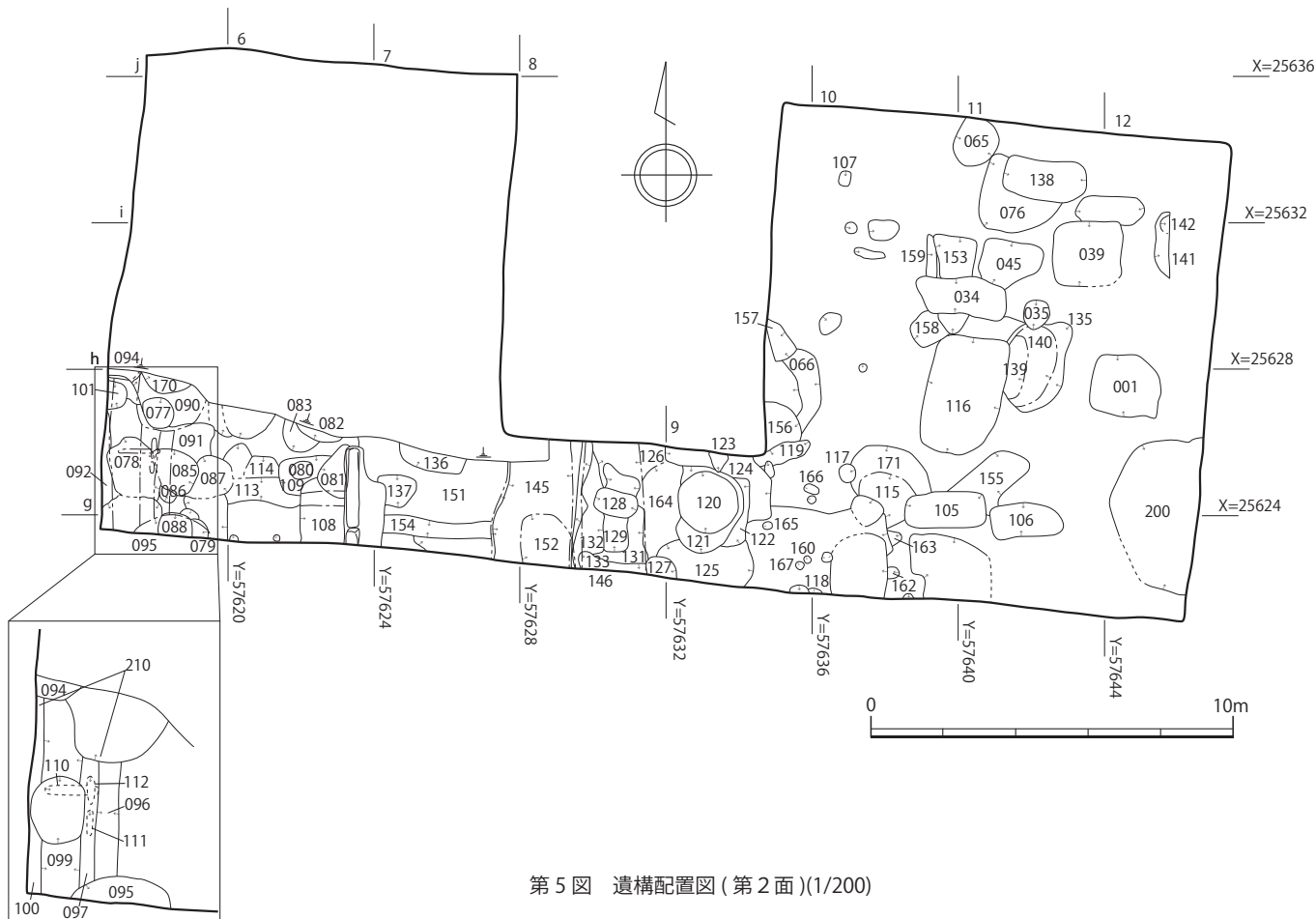
堆積厚は1.7m以上で、硬く安定した地盤と考えられる。出土遺物は皆無であり、当該地周辺に推定されている自然堤防を構成する地層と判断されるものである。上層(標高：約3.6m)からは江戸時代や中世の遺構群が確認され、これらを第2面の遺構として発掘調査を行っている。



第3図 土層模式図



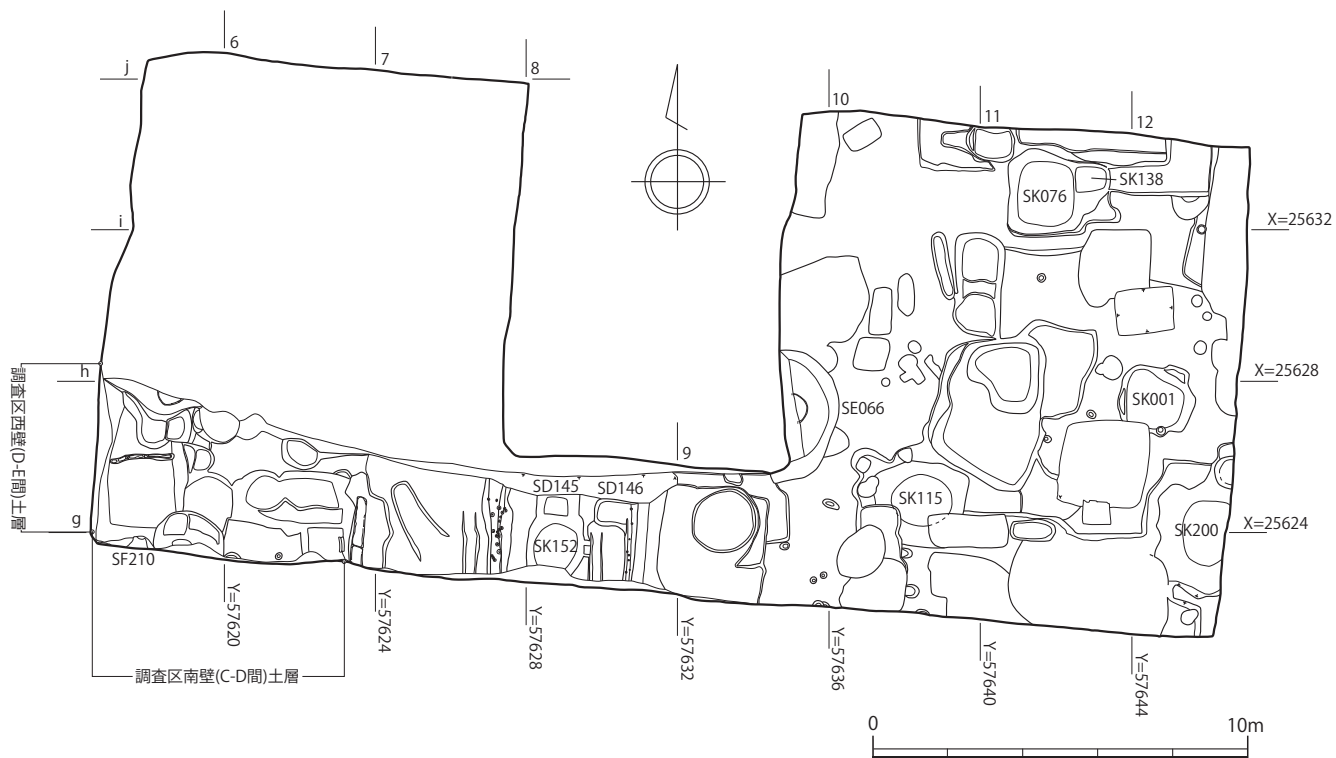
第4図 遺構配置図(第1面)(1/200)



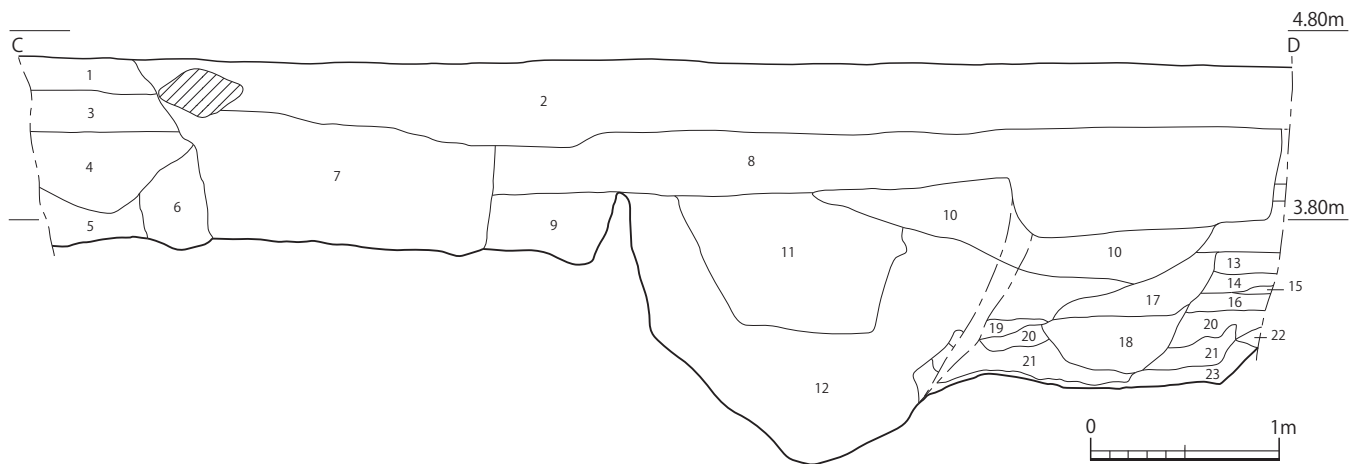
第5図 遺構配置図(第2面)(1/200)



第6図 全体遺構図(第1面)(1/200)

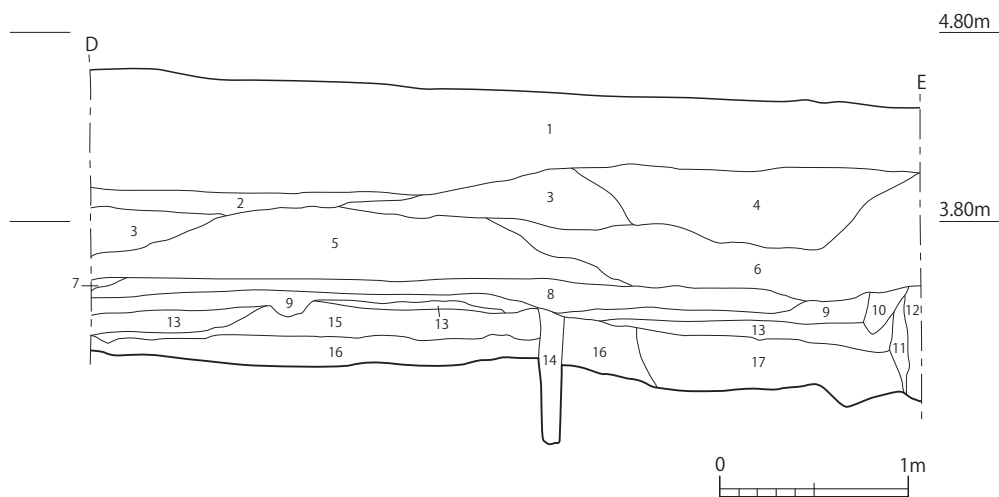


第7図 全体遺構図(第2面)(1/200)



- 1.暗褐色粘質土(近代瓦片やモルタルが入る。近代整地層)
- 2.暗灰褐色粘質土(灰白ブロック土を少量含む。しまりは強い。表土層)
- 3.明灰褐色砂質土(1～3mm程の砂利を少量含む。淡黄褐色土をブロック状に少量含む。しまりは強い。シルト層)
- 4.暗灰褐色粘質土(炭化物を少量含む。砂粒を一定量含む。しまりはやや強い)
- 5.暗茶褐色粘質土(淡黄褐色土をブロック状に一定量含む。しまりは強い)
- 6.暗茶褐色粘質土(5層と比較してブロック状の淡黄褐色土は含まない。炭化物を少量含む。下部に瓦片を含む。しまりは強い)
- 7.暗褐色粘質土(10～20cm程の礫を一定量含む。炭化物を少量含む。陶磁器類を含む。しまりはやや強い)
- 8.暗茶褐色砂質土(礫片を一定量含む。細かな砂利を一定量含む。粘性がやや強く、しまりもやや強い)
- 9.暗茶褐色砂質土(8層とほぼ同じだが、8層よりも粘性が強く、しまりも強い)
- 10.暗茶褐色粘質土(明黄褐色土の地山土をブロック状に含む。粘性はかなり強い)
- 11.淡黄褐色粘質土(明黄褐色土の地山土をブロック状に少量含む。砂質を一定量含む。粘質はやや強く、しまりもやや強い)
- 12.暗茶褐色粘質土(11層とほぼ同じだが、明黄褐色土の地山土をブロック状に含む。量は11層より多い。粘性も11層より多い。炭化物を含む。SK095の埋土)
- 13.暗茶褐色粘質土(10層とほぼ同じだが、明黄褐色土の地山土は含まない)
- 14.暗茶褐色粘質土(13層とほぼ同じだが、炭化物を少量含む。13層よりやや粘性が強い)
- 15.暗茶褐色粘質土(14層とほぼ同じだが、13層よりしまりが強い。SF100の埋土)
- 16.明茶褐色砂質土(明黄褐色土の地山土をブロック状に含む。粘性は弱く、砂質が強い。SF100の埋土)
- 17.暗灰褐色粘質土(10層とほぼ同じだが、明黄褐色土の地山土は含まず、10層より粘性が強い)
- 18.暗灰褐色粘質土(17層とほぼ同じだが、明黄褐色土の地山土をブロック状に含む。粘性は17層よりやや強い。近世の道路側溝。SD099の埋土)
- 19.暗茶褐色砂質土(16層とほぼ同じだが、16層よりも粘性が弱く、砂質が強い)
- 20.暗褐色砂質土(若干鉄分が沈着している。粘性は弱く、しまりも若干弱い)
- 21.にぶい黄褐色砂質土(礫・炭化物などはほとんど含まない。粘性はほとんどなく、しまりは強い。中世。SF210の埋土)
- 22.暗黄褐色砂質土(21層とほぼ同じ。中世。SF210の埋土)
- 23.明黄褐色砂質土(礫・炭化物などはほとんど含まない。粘性は弱い、しまりは強い。いわゆる地山層)

第 8 図 調査区南壁 (C-D 間) 土層断面図 (1/40)



- 1.暗褐色粘質土(近代瓦片やモルタルが入る。近代整地層)
- 2.暗赤褐色粘質土(焼土ブロックや、炭化物を多量に含む)
- 3.明灰褐色砂質土(焼土ブロックを少量含む。粘性はやや弱い)
- 4.暗灰褐色粘質土(磁器類・礫を少量含む)
- 5.暗灰褐色粘質土(3層とほぼ同じだが、3層と比較して粘性がやや強い)
- 6.暗茶褐色砂質土(5層とほぼ同じだが、5層と比較して砂質がやや強い)
- 7.明灰褐色砂質土(粘性は弱い、しまりはやや強い。シルト土)
- 8.明灰褐色砂質土(7層とほぼ同じだが、7層と比較してしまりがやや強い)
- 9.明茶褐色砂質土(明黄褐色土の地山土をブロック状に含む。粘性は弱い、砂質が強い)
- 10.明茶褐色砂質土(9層とほぼ同じ)
- 11.明茶褐色砂質土(近代埋土の掘方)
- 12.暗褐色粘質土(11層と同じく近代埋土の掘方)
- 13.暗褐色砂質土(鉄分が少量沈着。粘性は弱く、しまりも若干弱い。SK101の遺構埋土)
- 14.灰褐色砂質土(粘性・しまりともない。砂質の単層。SD110の掘方埋土)
- 15.暗黄褐色砂質土(礫・炭化物などはほとんど含まない。粘性はない、しまりはやや強い。中世)
- 16.明黄褐色砂質土(15層とほぼ同じ。中世)
- 17.明黄褐色砂質土(礫・炭化物などはほとんど含まない。粘性は弱い、しまりは強い。いわゆる地山土)

第 9 図 調査区西壁 (D-E 間) 土層断面図 (1/40)

第3節 主要遺構

調査区内の遺構密度が攪乱等の影響により異なることから、設計上調査区を3箇所（1区・2-1区・2-2区）に分けて発掘調査を実施した。調査区の北半部には整地層が認められず、東側を1区、西側を2-1区とし、整地層が存在する南半部を2-2区と設定した。

（1）第1面（第4・6図）

整地層（暗灰褐色粘質土）の上層で検出された遺構（2-2区）および、攪乱等の影響で整地層が確認されなかった部分の遺構（1区・2-1区）が相当する。

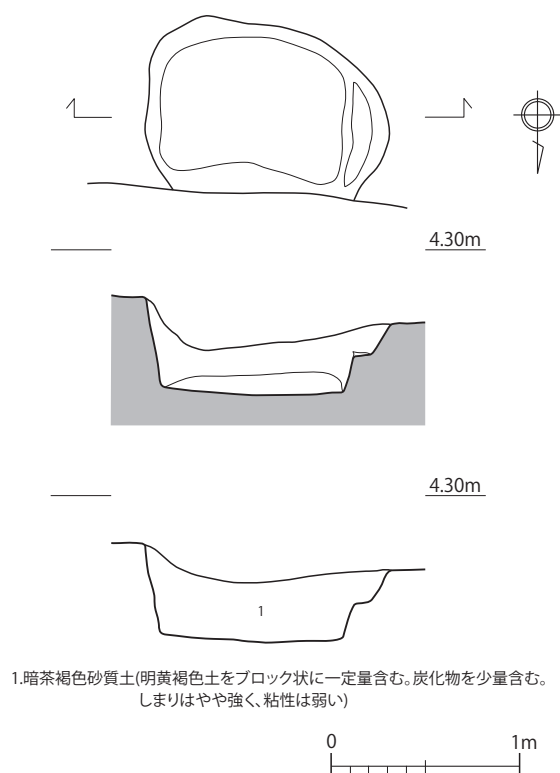
調査の結果、検出された大半の土坑は、明治初頭頃～昭和前半期に埋没したものであった。明治初頭頃の土坑からは大量の近世陶磁器が出土したものの、型紙刷りの肥前磁器碗が共伴することから、近代の以降と判断し、記録作成については遺構配置図及全体遺構図そして、全体遺構写真撮影のみとした。

引き続き、整地層（暗灰褐色粘質土）の掘削を行ったところ、出土遺物の帰属年代から明治初頭頃に比定されるものであることが判明した。このため、整地層の掘削については大型のスコップを使用して行い、迅速化を図った。

また、1区及び2-1区については、攪乱等の影響により整地層（暗灰褐色粘質土）が確認されず、中世～近代の遺構が複合して検出された。しかしながら、その大半は型紙刷りや銅版転写の肥前磁器などが出土し明治初頭頃～昭和前半期に埋没した土坑であり、1区及び2-1区で確認された中世～近世の遺構については僅少であることから、次の第2面の遺構で報告する。

（2）第2面（第5・7図）

安定地盤である明黄褐色シルト質土において検出した遺構群で、大半は明治初頭頃に比定される整地層（暗灰褐色粘質土）の下層から確認されたものである。検出された遺構は道路状遺構をはじめ、土坑や井戸跡、



第10図 SK065 遺構実測図 (1/40)

溝状遺構などである。遺構密度は撈乱の影響を考慮する必要はあるものの、調査区西側が高く、夥しく土坑が重複する。調査区西端に道路状遺構が確認されており、道路に面して遺構が高密度に分布している状況がある。中世～近世にかけての遺構が検出されている。

(近 世)

道路状遺構をはじめ、土坑や溝状遺構などが認められる。詳細な時期は不明ながらも遺構の切り合い関係から当該期に比定される炉跡(SX084)も検出されている。遺構の大半は19世紀前半～中頃に埋没したもので、僅かに18世紀後半頃まで遡る可能性がある土坑(SK139・164など)が認められる。遺構群の主軸方向は座標北から10°、もしくは90°前後振れたものが多く、規格性が一定程度認められる。なお、17世紀代の遺構は皆無である。

土坑

SK065 (第10図)

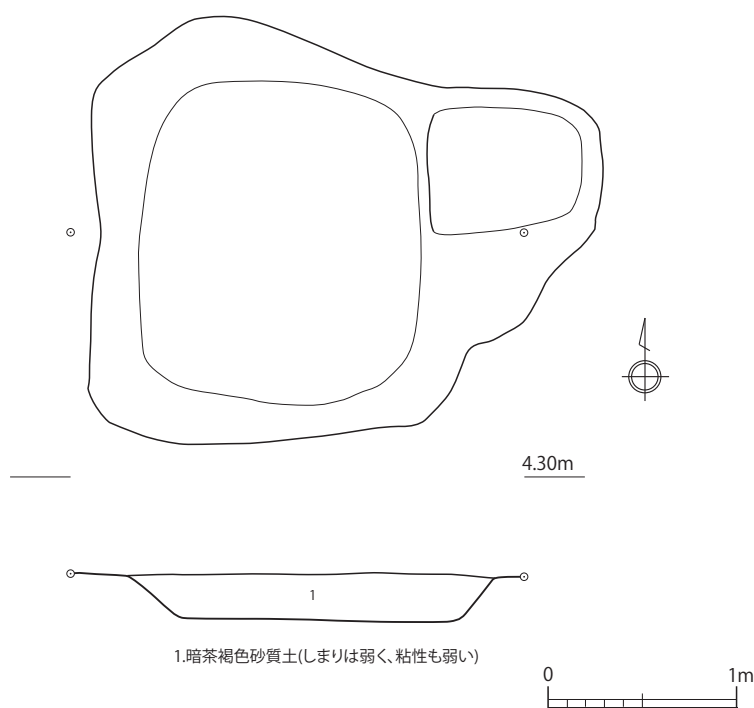
1区北側のM-7-i-11グリッドで検出された土坑である。長軸が1.28 m、短軸が0.90 mの平面形状が楕円形を呈し、断面形状は逆台形で底面は平坦をなす。主軸方向はN - 88° - Wで、検出面からの最大深度は0.47 mである。

埋土は暗茶褐色砂質土の単一層である。明黄褐色土をブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物が大量に出土しており、廃棄されたものと判断される。

出土遺物の帰属年代から、19世紀前半～中頃に埋没したものである。

SK076 (第11図)

1区北側のM-7-i-11グリッドで検出された土坑である。長軸が2.20 m、短軸が2.00 mの平面形状が楕円形を呈し、断面形状は逆台形で底面は平坦をなす。検出面からの最大深度は0.26 mである。



第11図 SK076 土層断面図 (1/40)

埋土は暗茶褐色砂質土の単一層である。粘性は弱く、礫を少量含む。出土遺物は皆無であり、年代は決定できないものの、後述する S K 138 に切られるため、19 世紀前半以前の遺構であることは間違いない。

SK138 (第 12 図)

1 区北側の M-7-i-11 グリッドで検出された土坑である。長軸が 1.85 m、短軸が 0.85 m の平面形状が長方形を呈し、断面形状は逆台形で底面は平坦をなす。主軸方向は N - 92° - W で、検出面からの最大深度は 0.24 m である。

埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。淡黄褐色土をブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物が大量に出土しており、廃棄されたものと判断される。

出土遺物の帰属年代から、19 世紀前半～中頃に埋没したものである。

SK152 (第 13 図)

2 - 2 区南側の M-7-f-11 グリッドで検出された土坑である。長軸が 1.51 m、短軸が 1.43 m の平面形状が円形を呈し、断面形状は逆台形で底面は上げ底状をなす。主軸方向は N - 7° - E で、検出面からの最大深度は 0.53 m である。

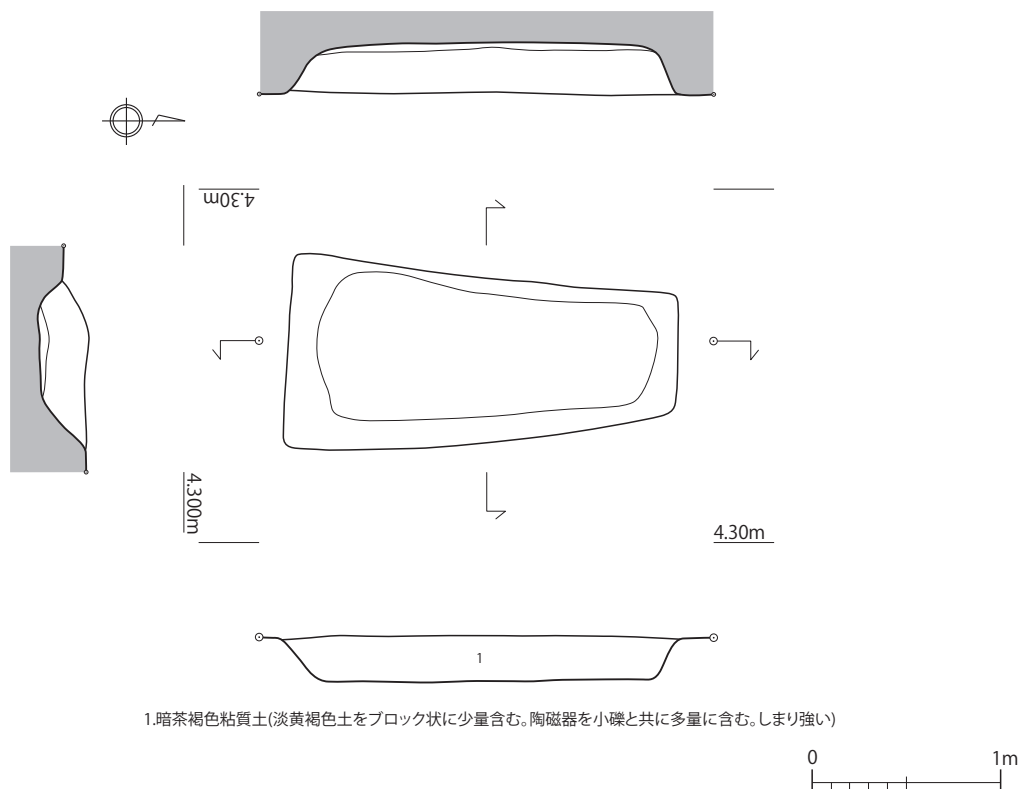
埋土は明茶褐色砂質土の単一層である。暗黄褐色土をブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物が大量に出土しており、廃棄されたものと判断される。

出土遺物の帰属年代から、19 世紀前半～中頃に埋没したものである。

溝状遺構

SD145 (第 14 図)

2 - 2 区南側の M-7-f-8 グリッドで検出された溝状遺構である。幅 2.46 m、検出面からの最大深度は 0.3 m、主軸方向は N - 8° - W である。底面の標高は 3.2 m である。



第 12 図 SK138 遺構実測図 (1/40)

断面は緩い台形状で、西側の立ち上がりは東側に比べ緩やかである。また、西側には杭跡が帯状に認められる。埋土は、暗灰褐色粘質土の単一層で、鉄分が下部に沈着する。水成作用によるものであるが、滞水していたものと推測される。遺物が大量に出土しており廃棄されたものと判断される。

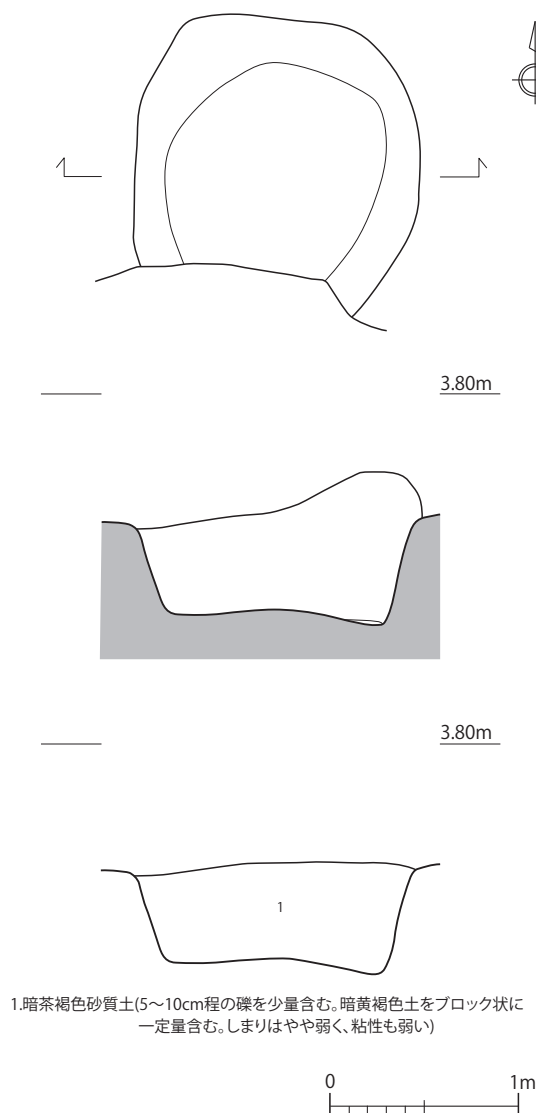
出土遺物の帰属年代から、19 世紀前半～中頃に埋没したものである。

SD146 (第 15 図)

2－2 区南側の M-7- g -8 グリッドで検出された南北方向の溝状遺構である。幅 2.61 m、検出面からの最大深度は 0.46 m、主軸方向 N - 6° - E である。底面の標高は最深部で 3.1 m である。

断面凹状を呈し、両側に小溝を伴う。断面の立ち上がりは現状で東側に比べ西側が急になっているものの、土層観察から東側の立ち上がりも急角度であった可能性がある。また、西側の小溝には配石が認められ、東側には杭跡が並ぶ。埋土は 2 層に区分され、第 1 層の暗灰褐色砂質土は廃絶時の埋土、第 2 層は第 1 層と不整合な堆積状況が認められ、明黄褐色土がブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。杭跡の存在を踏まえれば、裏込め土と判断される。第 1 層には流水痕跡は確認できていない。第 1 層からは遺物が大量に出土しており、廃棄されたものと判断される。

出土遺物の帰属年代から、19 世紀前半～中頃に埋没したものである。



第 13 図 SK152 遺構実測図 (1/40)

道路状遺構

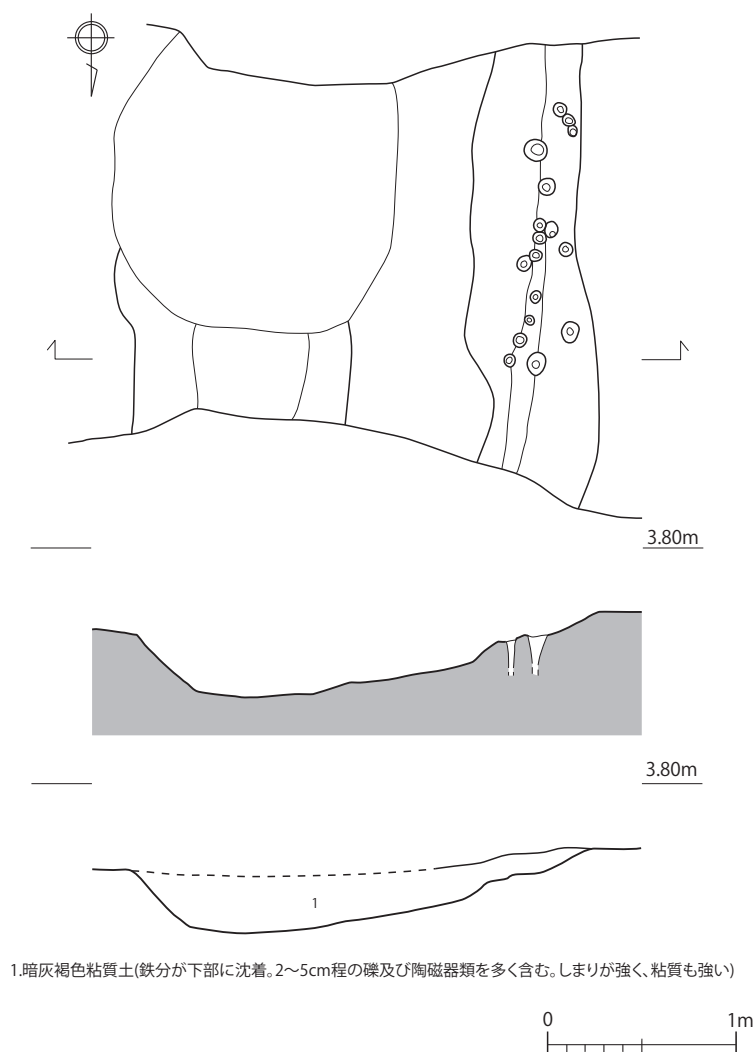
SF100（第 16・9・10 図）

2－2 区西端部の M-7- g - 5 グリッド、日向道推定地付近で検出された南北方向の道路状遺構である。検出長は 4.4 m で、掘り込み地業とこれに伴う側溝の可能性のある 1 条の溝状遺構（SD099）が確認できる。主軸方向は溝状遺構から N - 1 1° - W と判断される。幅は 1.56 m 以上で、調査区外に広がる。掘り込み地業の検出面からの最大深度は 0.24 m で、路盤となる粘質土と砂質土を敷き均し、その後地業内に側溝の可能性のある溝状遺構（SD099）が掘削される。

縦断面の土層観察からは（第 10 図）、掘り込み地業の底面には凹凸があり、砂質土を入れて平坦にしたものと判断される。SD099 は幅 0.87 m 前後、深さ 0.32 m 前後で、断面形状は U 字形をなす。埋土は暗灰褐色粘質土の単一層で、明黄褐色土をブロック状に少量含むものの埋没要因は断定できない。遺物が大量に出土しており、SD099 が埋没した時期は 19 世紀前半頃に比定される。

また、掘り込み地業からも近世陶磁器が一定量認められ、その帰属年代から道路状遺構が構築された年代は 18 世紀代まで遡る可能性がある。近世日向道の推定地は調査区に隣接する現道であり、当該遺構が現道から約 8 m 東側の近接地点で確認されたことから、近世の日向道の一部と判断される。

なお、道路状遺構を切る形で明治初頭以降の土坑群が重複して検出されており、明治時代には道路が廃絶もしくは調査区外の西側に造り替えられたものと判断される。



第 14 図 SD145 遺構実測図 (1/40)

(中 世)

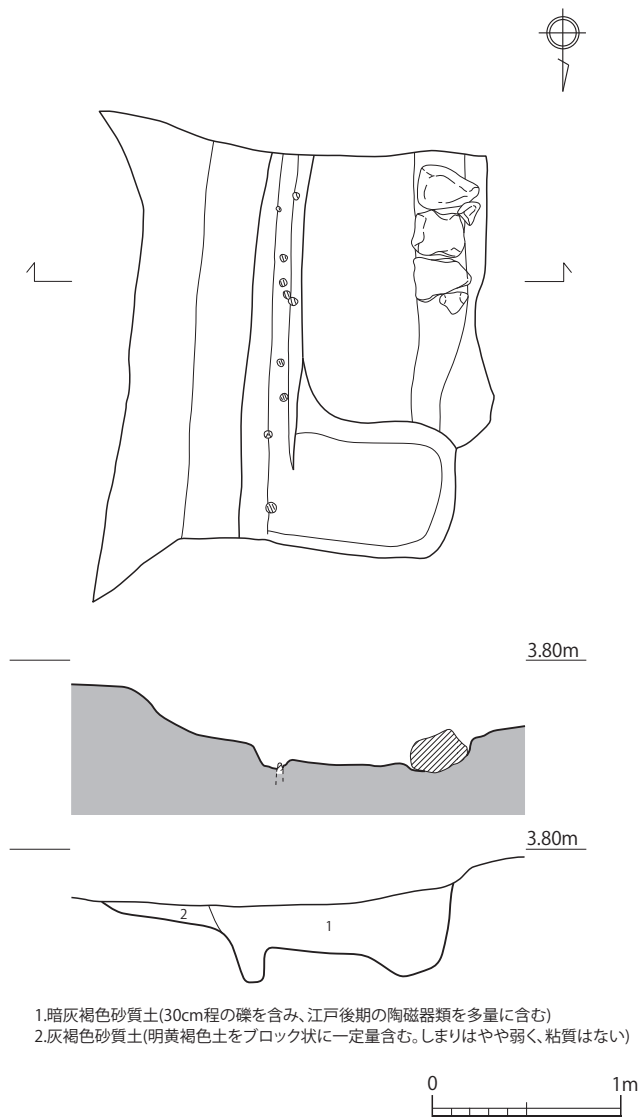
道路状遺構をはじめ、井戸跡と土坑が認められる。遺構密度は低く、攪乱等の影響を考慮する必要があるものの、大型遺構のみが点在する。すべて 16 世紀代に埋没したものである。

井戸跡

SE 066 (第 17 図)

1 区西側の M-7- g -9 グリッドで検出された井戸跡である。掘方は長径 3.42m の円形と判断され、中央に直径約 0.8m の円形を呈する井筒部が確認された。井筒は木製の桶で良好に残存する。埋土は、井筒内の埋土 1 層と井筒裏込め土各 3 層に区分され、裏込め土には淡黄褐色土がブロック状に一定量含まれる。井戸の大半が調査区外に延びることから、底部までの掘削は断念した。安全を確保するために、桶が残存する深さまで掘り方の埋土を掘削し、以後は井筒内部を掘削した。桶の検出標高は約 1.7 m、掘削を断念した最深部の標高は約 0.7 m で、最深部には調査時にも僅かに湧水が認められた。掘り方側面の土層観察から、標高約 1.7 m の深さまでは安定地盤が形成されていることが判明した。

遺物は、井筒内と井筒裏込め土から出土しており、裏込め土から出土した土師器坏・小皿及び備前焼播鉢の帰属年代から 16 世紀前半頃に廃絶したものと考えられる。



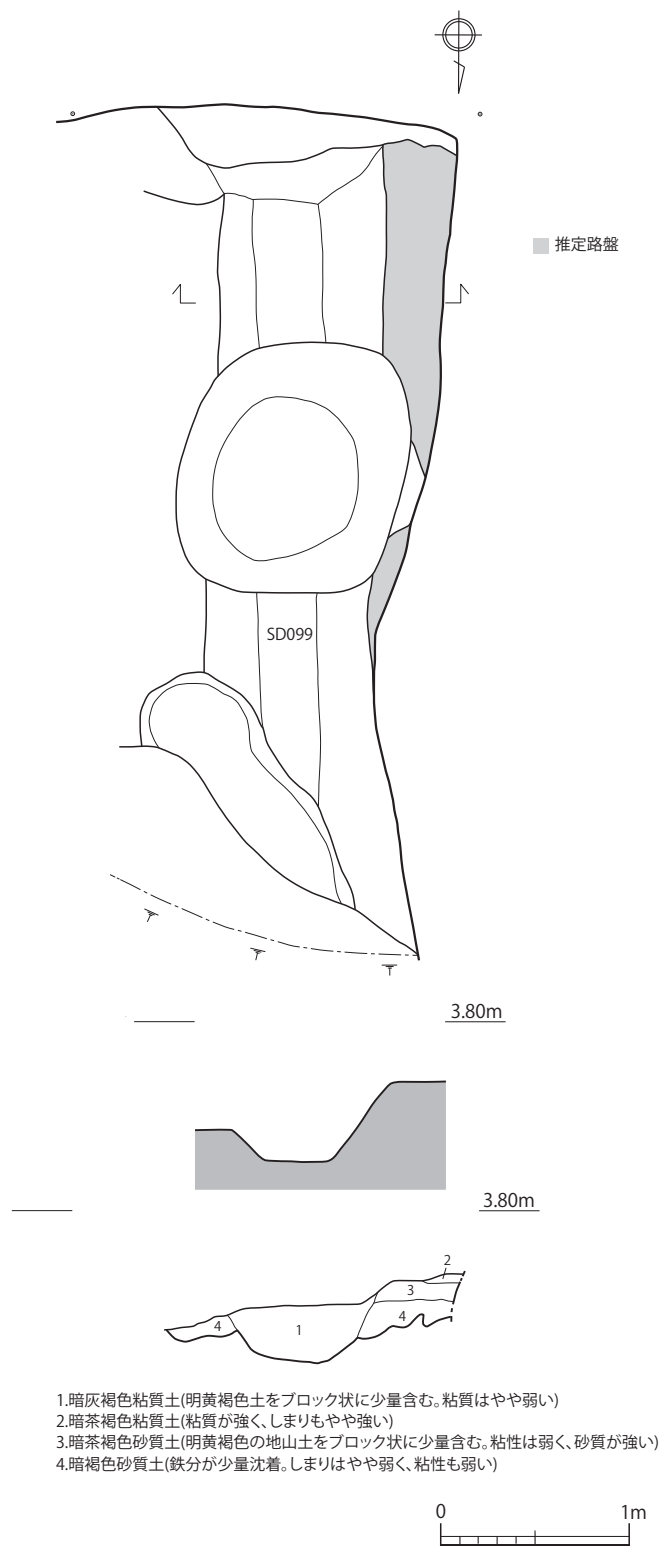
第 15 図 SD146 遺構実測図 (1/40)

土坑

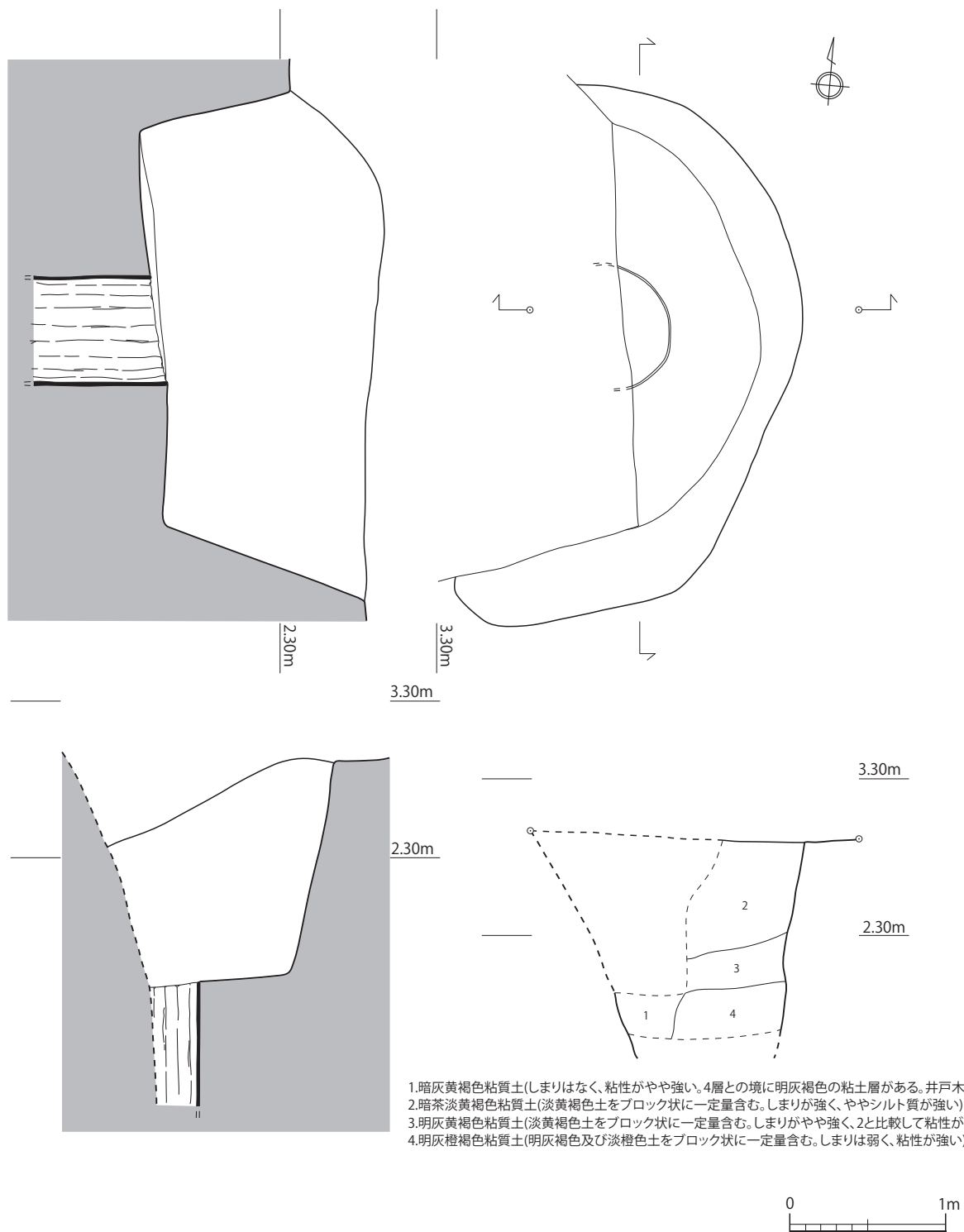
SK001 (第 18 図)

1 区東側の M-7- g -12 グリッドで検出された土坑である。長軸が 2.04 m、短軸が 1.82 m の平面形状が方形を呈し、断面形状は緩やかな逆台形をなす。検出面からの最大深度は 0.14 m である。

埋土は暗茶褐色砂質土の単一層で、明黄褐色土をブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第 16 図 SF099 遺構実測図 (1/40)



第 17 図 SE066 遺構実測図 (1/40)

出土遺物の帰属年代から、16 世紀後半頃に埋没したものである。

SK115 (第 19 図)

1 区南側の M-7- g -10 グリッドで検出された土坑である。長軸が 2.44 m、短軸が 1.96 m の平面形状が長方形を呈し、断面形状は緩やかな逆台形をなす。主軸方向は N - 91° - W で、検出面からの最大深度は 0.19 m である。

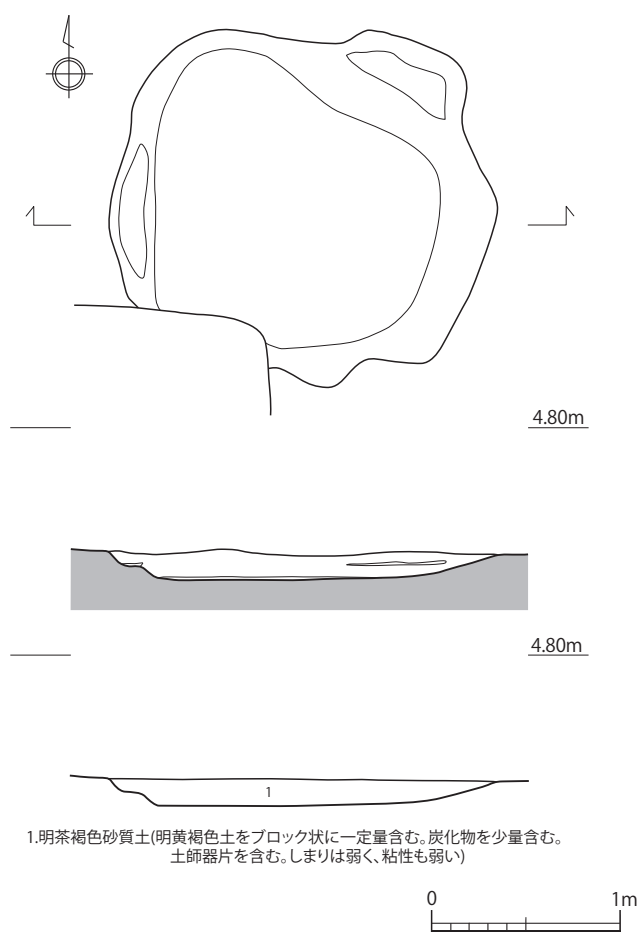
埋土は暗茶褐色砂質土の単一層で、焼土をブロック状に一定量含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。炭化物は含まない。

出土遺物には土師器坏や備前焼擂鉢をはじめ、瓦質土器擂鉢や捏鉢、軒平瓦などがあり、その帰属年代から、16 世紀前半頃に埋没したものである。なお、近世陶磁器の小破片が 2 点出土しているものの、調査時の混入と判断される。

SK200 (第 20 図)

1 区東側の M-7- g -12 グリッドで検出された土坑である。長軸が 3.43 m、短軸が 2.2 m の平面形状が不整形円形を呈し、断面形状は緩やかな逆台形をなす。主軸方向は N - 9° - E で、検出面からの最大深度は 0.99 m である。

埋土は暗茶褐色粘質土を基調とし、堆積状況に不整合が認められ粘土ブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は土師器坏・小皿をはじめ龍泉窯系青磁鉢や備前焼擂鉢、小型の軒丸瓦など破片資料ばかり一定量認められ、獣骨など有機質遺物も含まれることから、廃棄土坑として機能したもの



第 18 図 SK001 遺構実測図 (1/40)

と判断される。

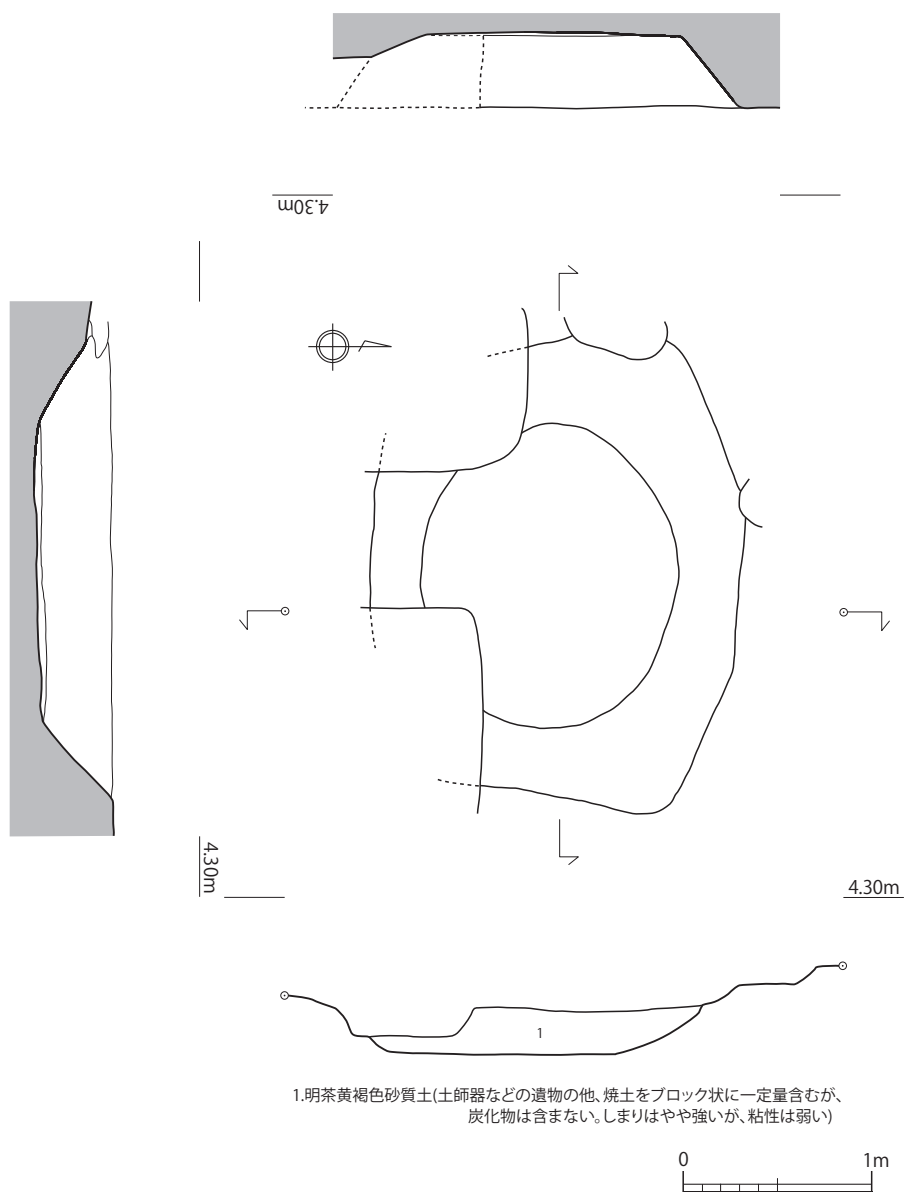
出土遺物の帰属年代から、16 世紀前半頃に埋没したものである。出土土師器坏には、内底部に焼成後に穿孔されたものや列点状の加工が施されたものがあり、注目される。

道路状遺構

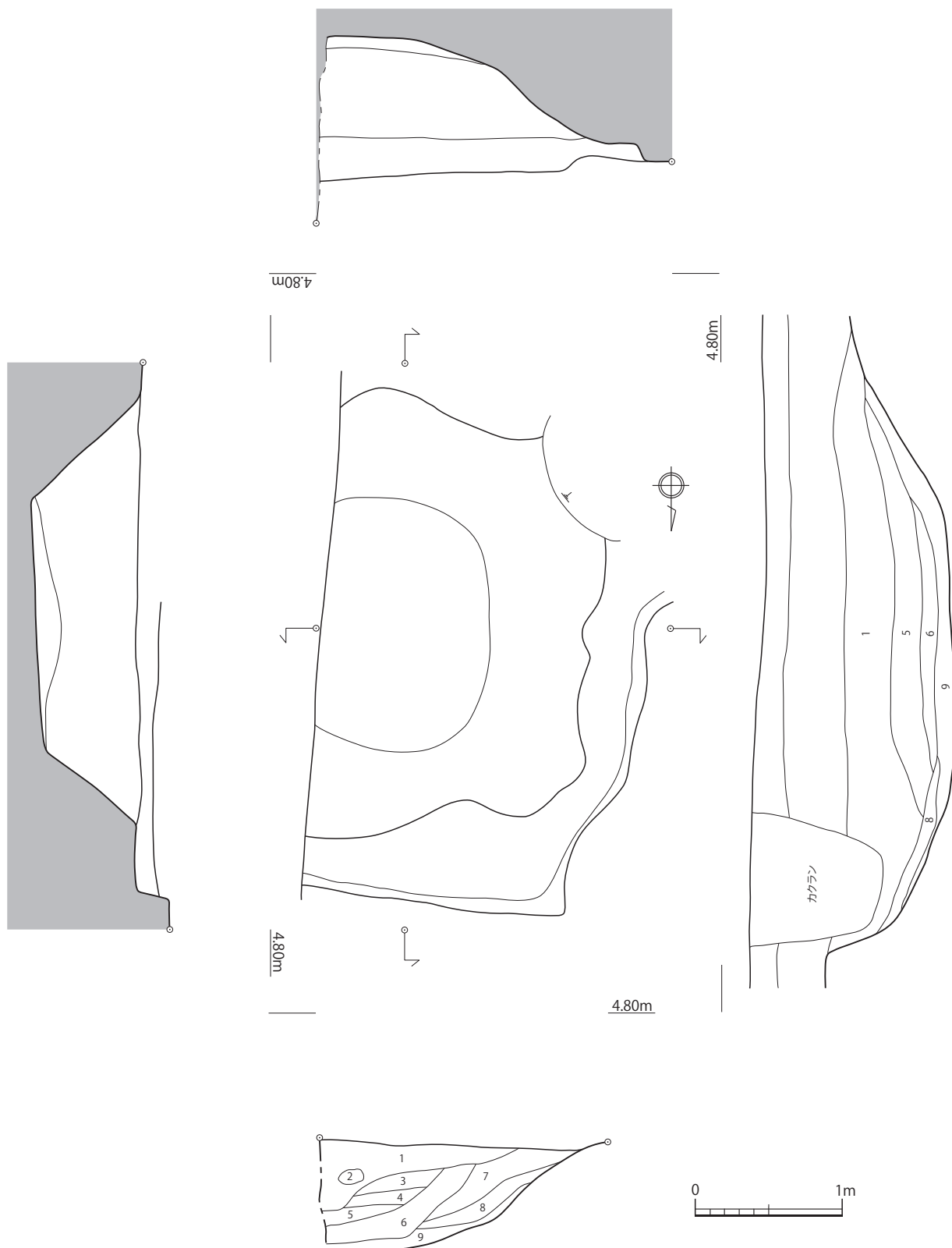
SF210（第 21・22・9・10 図）

2－2 区西端部の M-7- g - 5 グリッド、近世日向道及び中世大友府内町跡の第 4 南北街路推定地付近で検出された南北方向の道路状遺構である。検出長は 3.0 m で、掘り込み地業に側溝の可能性のある 1 条の溝状遺構（SD096）とそれに直行する小溝（SD110）、この小溝（SD110）を切り、溝状遺構（SD096）と並行する小溝 2 条（SD111・112）が伴う。主軸方向は溝状遺構から N - 6° - W と判断される。幅は 2.34 m 以上で、調査区外に広がる。近世日向道の一部と判断される道路状遺構（SF100）に切られ、ほぼ同じ位置に敷設されていたことが分かる。

掘り込み地業の検出面からの最大深度は 0.28 m で、路盤となる砂質土を敷き均し、その後地業内に側溝の可



第 19 図 SK115 遺構実測図 (1/40)



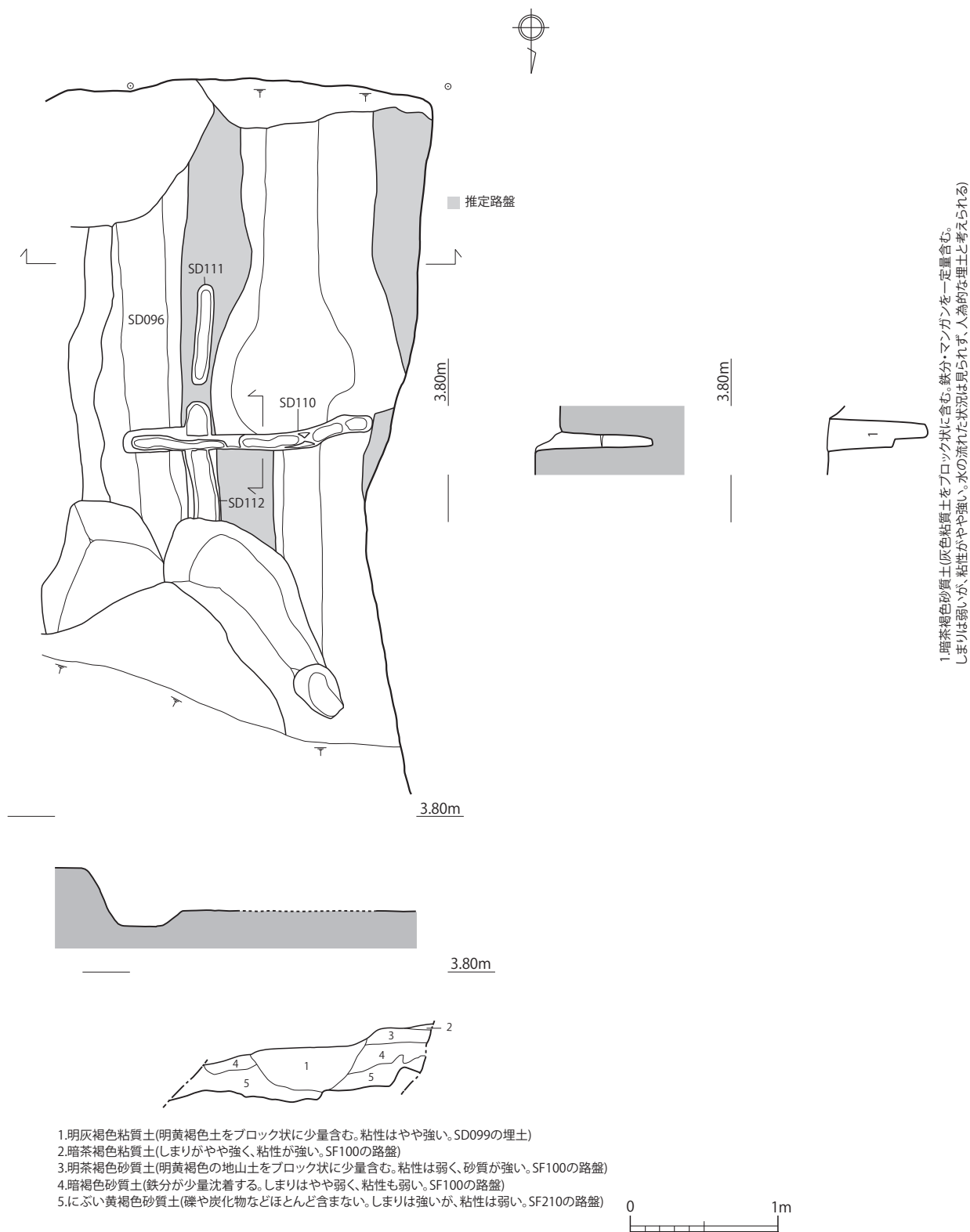
- 1.暗茶褐色砂質土(淡黄褐色土をブロック状に少量含む、炭化物を少量含む。しまりは強く、ほぼシルト土)
- 2.明灰褐色砂質土(暗茶褐色土をブロック状に一定量含む。しまりは強く、ほぼシルト土)
- 3.暗茶黄褐色粘質土(淡黄褐色土をブロック状に一定量含む。しまりはやや強く、粘性もやや強い)
- 4.暗茶褐色粘質土(炭化物を少量含む。しまりは弱い、粘性がやや強い)
- 5.暗茶褐色粘質土(淡橙色土をブロック状に少量含む。しまりはなく、粘質がやや強い)
- 6.明灰褐色粘質土(明灰褐色土をブロック状に多量に含む。しまりは強く、粘性も強い)
- 7.暗茶褐色砂質土(明灰褐色土をブロック状に少量含む。しまりはやや強い、粘性はない)
- 8.茶褐色砂質土(明茶褐色土をブロック状に一定量含む。しまりが強く、粘性も強い)
- 9.暗茶褐色粘質土(淡橙色土をブロック状に一定量含む。炭化物を少量含む。しまりはやや弱い、粘性がやや強い。獣骨骨片などを含む)

第 20 図 SK200 遺構実測図 (1/40)

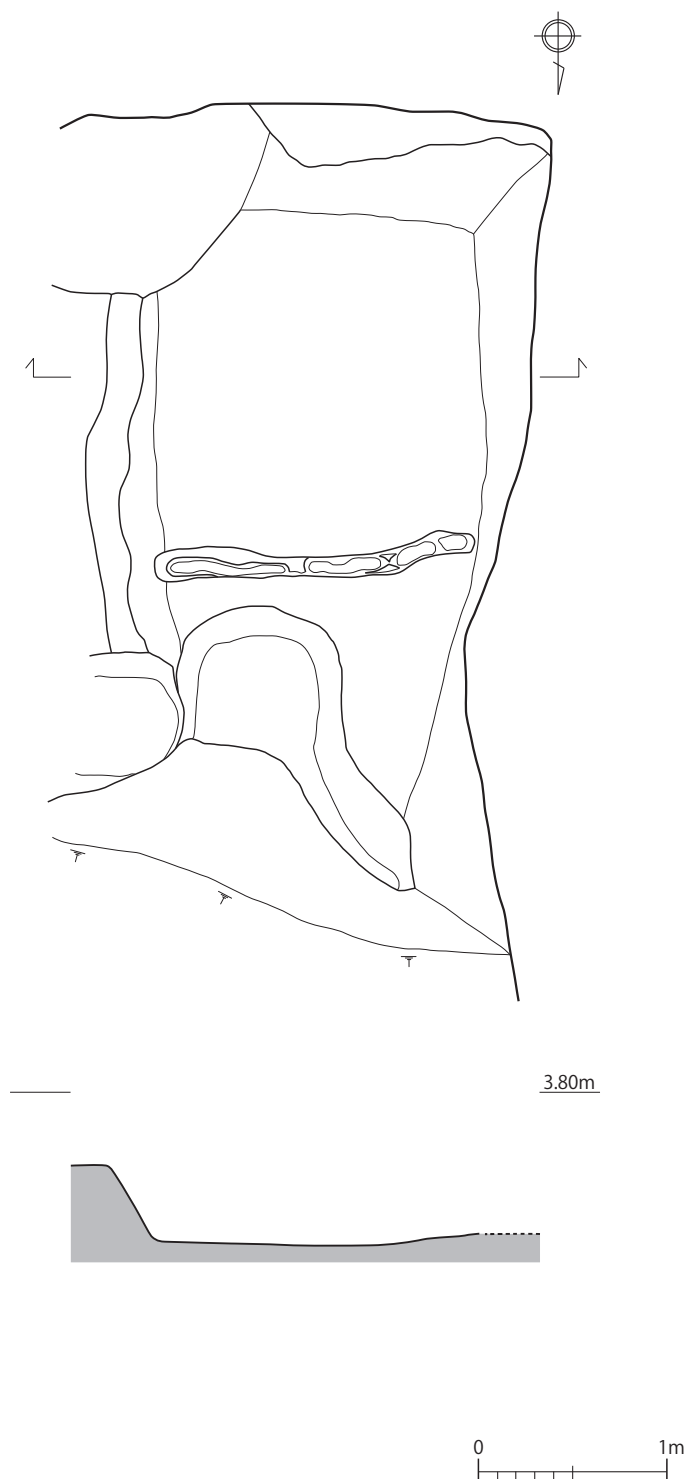
能性がある溝状遺構（SD096）が掘削される。

SD096 は幅 0.57 m 前後、深さ 0.40 m 前後で、断面形状はU字形をなす。埋土は暗茶褐色砂質土の単一層で、暗黄褐色土をブロック状に少量含む。流水痕跡は認められない。遺物が一定量出土しており、交差摺目のある備前焼播鉢（乗岡編年の近世Ⅰb期）や甕をはじめ、土師器坏や平瓦、赤間硯などが認められる。これらの帰属年代から、SD096 が埋没した時期は 16 世紀末頃に比定される。

また、溝状遺構（SD096）に直行する形で掘り込み地業を切る形で検出された小溝（SD110）は掘り込み地業



の西側底面で収まる。幅 0.10 m 前後、深さ 0.68 m で、長さは調査区外に延びるため不明ながら 1.70 m 以上である。断面形状は U 字形で、一部に段をなす。底部には杭状の痕跡が認められる。埋土は暗茶褐色砂質土の単一層で、灰色粘質土をブロック状に一定量含むことから、人為的に埋め戻されたものである。また、側溝と位置づけられる南北溝 (SD096) の下層から検出され、道路の路盤を切り、先述の近世日向道に比定される道路状遺構 (SF100) の路盤の下層から検出されることから、当該道路 (SF210) に伴うものと判断される。



第 22 図 SF210 遺構実測図 (完掘時) (1/40)

道路の路盤はSD110の南側と北側にそれぞれ分布するものの、縦断面の土層観察(第10図)からは、堆積土の単位が異なることが指摘される。敷き均しの工法に差異が認められる可能性があり、小溝(SD110)は路盤施工時の土留めなど仕切り溝として機能したものと想定される。

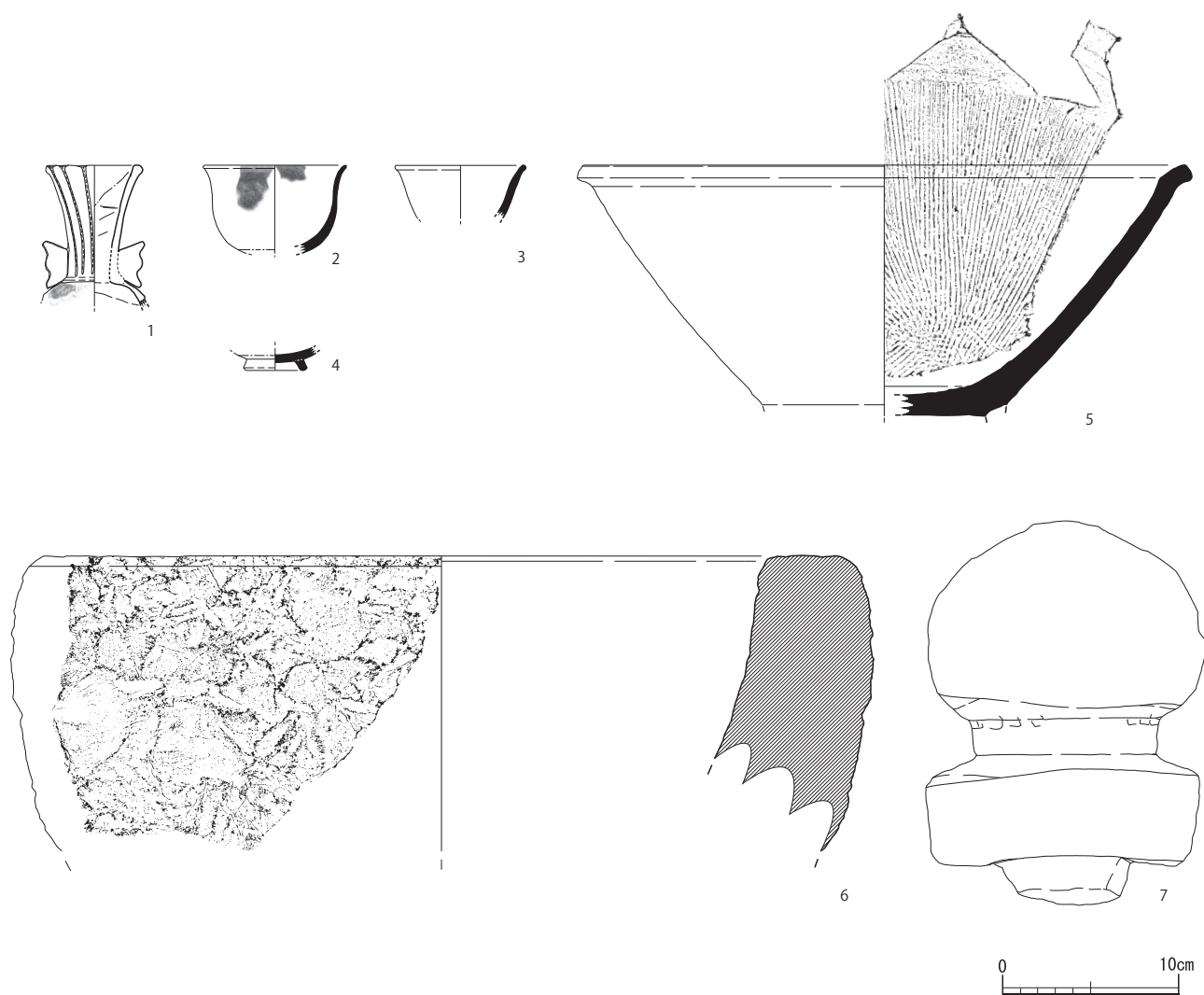
次に、小溝(SD111・112)は側溝と考えられる溝状遺構(SD096)にほぼ並行し、小溝(SD110)を切る形で形成されたものである。SD111は幅0.10 m前後、深さ0.14 m前後で、断面形状は逆台形をなす。埋土は灰茶褐色砂質土の単一層で、灰色粘質土をブロック状に多く含むことから、これも人為的に埋め戻されたものである。両者は並列するもので、道路状遺構に関わる遺構と考えられる。機能としては轍など道路機能時の痕跡が想定されるものである。

当該遺構は現道から約8 m東側の近接地点で近世の道路状遺構に重複する形で確認されたことから、中世大友府内町跡の第4南北街路の一部と判断される。

掘り込み地業からの出土遺物は皆無で、側溝と判断される溝状遺構(SD096)出土遺物の帰属年代から、16世紀末頃に埋没もしくは調査区外の西側に造り替えられたものと判断される。

第4節 出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナ23箱分の遺物が出土した。その大半は、18世紀～19世紀にかけての陶磁器類で、17世紀の遺物は僅少である。中世以前では16世紀代の遺物が一定量認められるものの、弥生時代中期と中世



第23図 SK065 出土遺物実測図1 (1/4)

前半期のものが数点認められる程度である。また、16世紀代の遺構からは獣骨が数点出土している。これらの種別については、遺構出土遺物一覧表（第1～12表）にて掲載し、組成が分かるように報告している。

ここでは、主要遺構の時期を示すものを中心に報告する。なお、実測図掲載遺物については、出土遺物観察表（第13～14表）にて図版番号と整理登録番号（R番号）を併記しており、資料の照会には参考にされたい。

S K 065 出土遺物（第23図）

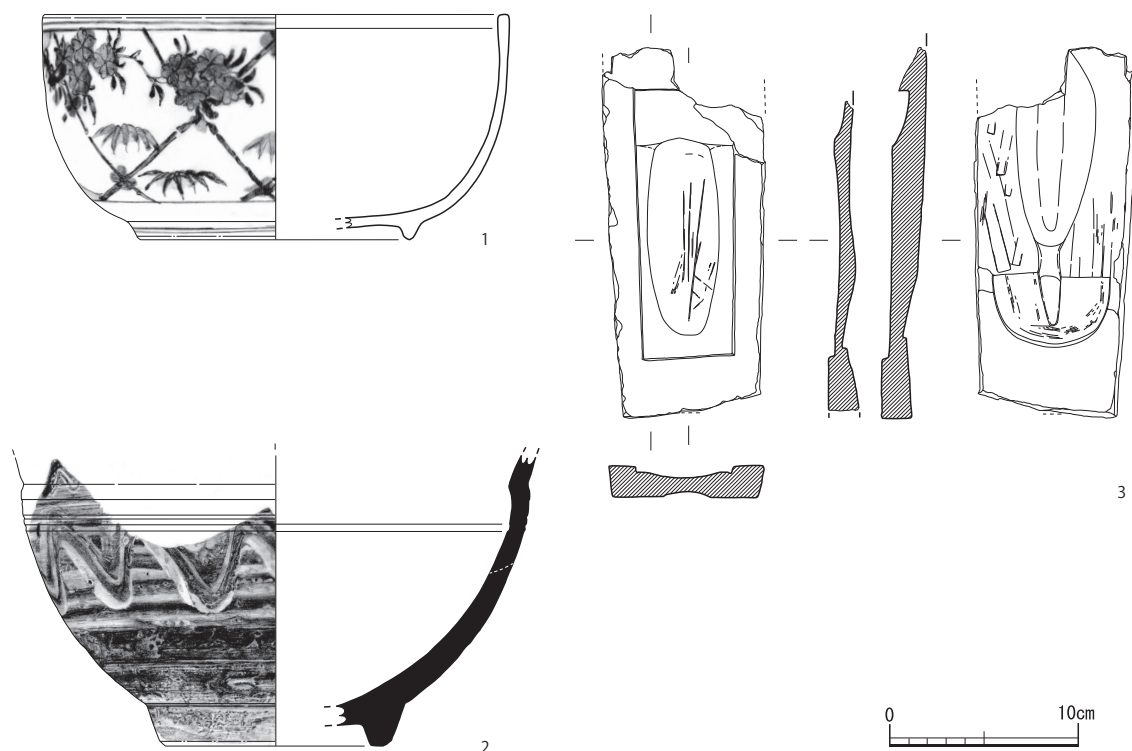
1は瀬戸焼の花瓶である。型成形で頸部内面に絞り痕が認められる。2は萩焼の陶器小坏である。口縁部に銅緑釉が掛けられ、胴部外面は露胎となる。3・4は関西系陶器の碗である。4は胴部外面～外底部まで露胎となる。5は唐津焼の播鉢である。口縁部は外反し、底部には高台が付くものの接合部で剥離している。6・7は凝灰岩製石製品で、6は手水鉢、7は五輪塔の空風輪である。6の外面には荒く鑿痕が残る。

SK138 出土遺物（第24図）

1は肥前系染付の鉢で、口縁端部から内面にかけては露胎である。2は刷毛目唐津の鉢である。3は結晶片岩製の硯で、両面ともに使用されている。裏面は砥石と転用されたものと判断される。

SK152 出土遺物（第25図）

1は肥前系染付の蓋物の蓋である。口縁部内面の受け部は露胎となる。2は刷毛目唐津の碗、3は福岡産陶器の壺である。4は肥前系の青磁鉢で、内面にへら書き模様が施される。施釉は薄く、発色もあまり良くない。内外面ともに貫入が認められる。5は巴文の軒丸瓦である。外面の一部から内面のほぼ全域に煤が付着する。



第24図 SK138 出土遺物実測図2(1/4)

SK001 出土遺物（第 29 図）

1 は中国龍泉窯系青磁碗 1 類である。12 世紀中頃～後半頃に比定されるものである。2 は C 類系の土師器皿で京都系土師器皿である。3 は土師器坏である。

SK015 出土遺物（第 29 図）

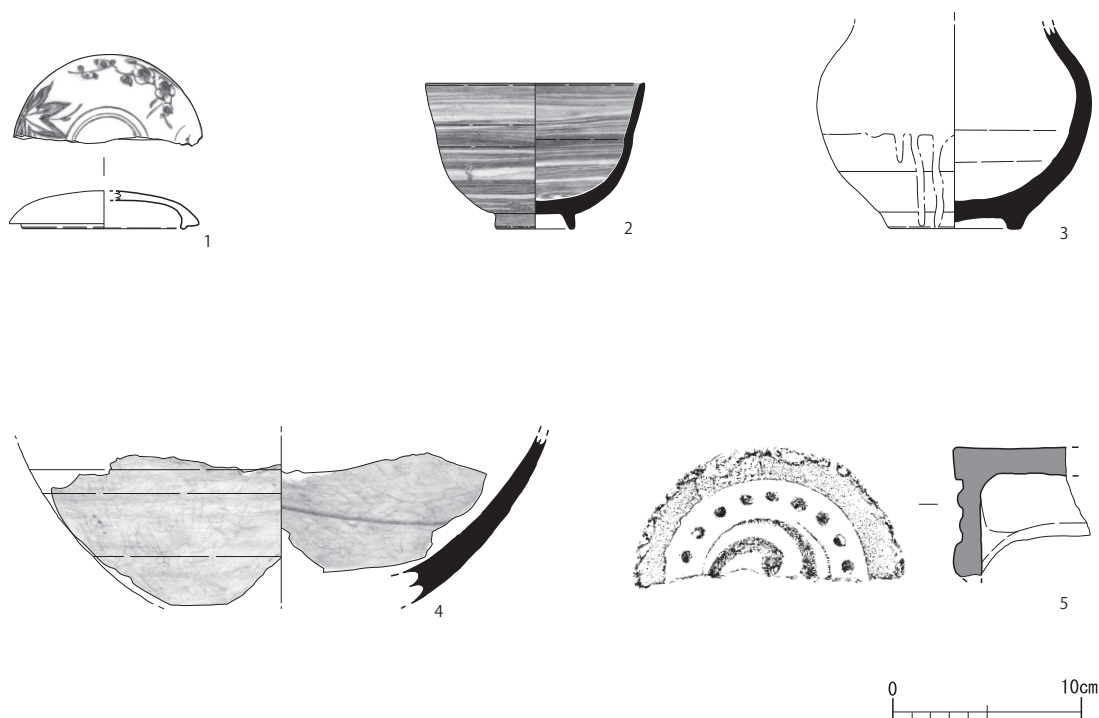
4・5 は肥前系染付碗で調査時に混入したものと判断される。7 は B 類系の土師器坏、8 は備前焼の播鉢である。9・10 は瓦質土器で 9 は播鉢、10 は捏鉢である。11 は鬼瓦の側底部付近の一部である可能性が想定されるものである。

SK200 出土遺物（第 30 図）

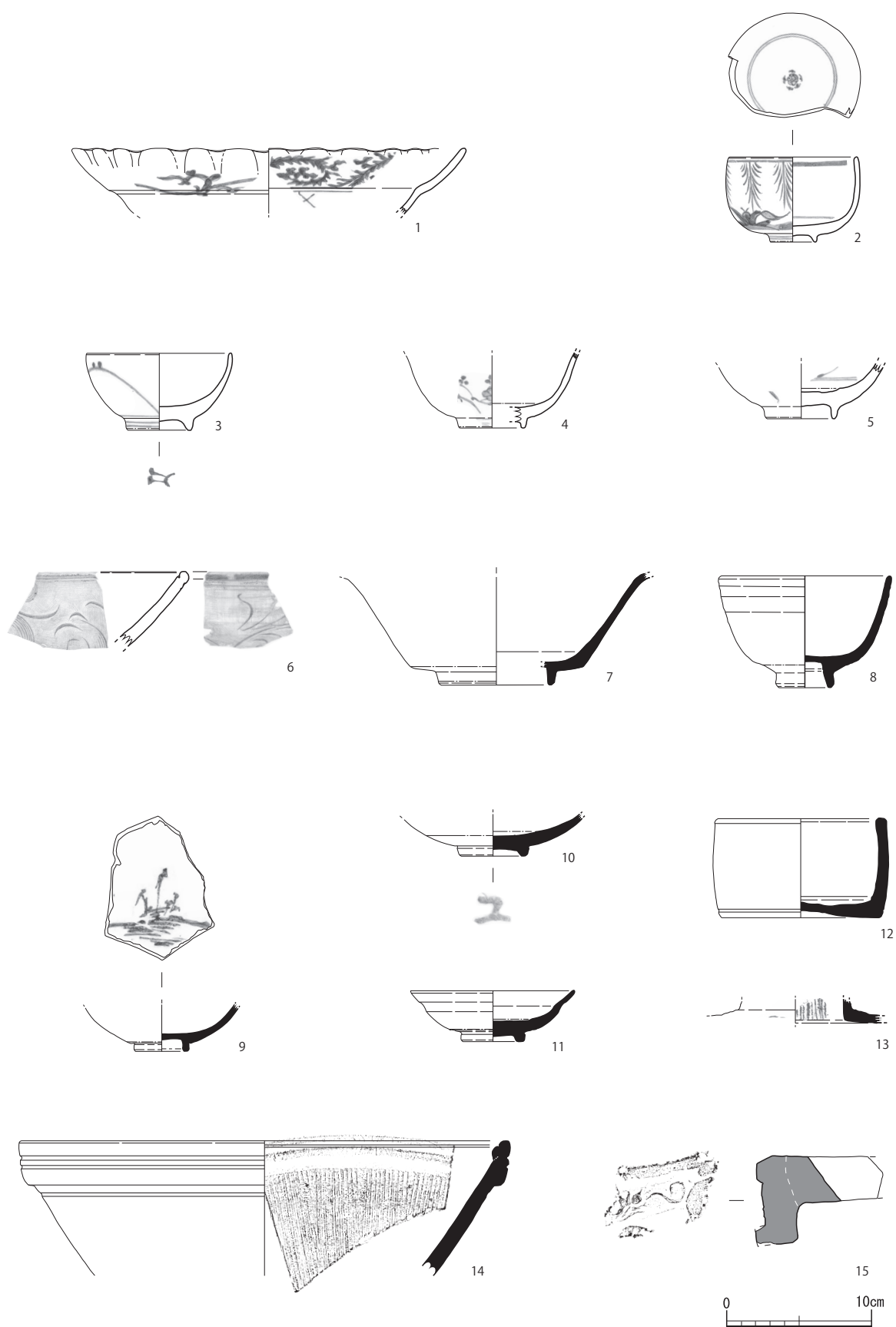
1 は龍泉窯青磁の鉢である。釉は厚く施されガラス質で発色は良好である。内面にはへら書き模様、外面には線描き模様が認められる。2 は備前焼の播鉢である。乗岡編年の中世 5 期に相当するもので須恵質である。内面の摺目は浅く、使用痕が認められる。3 は瓦器の高台付き碗である。内面見込み部分に暗文が微かに認められることから和泉型瓦器碗と判断される。中世前半期の遺物である。4 は瓦質土器の深鉢形火鉢である。口縁部外面にスタンプ文が施される。5 は小型の巴文軒丸瓦で、直径は 12.5cm である。朱文は 32 個前後に復元され、巴文は小さな右巻きで、その周りに圈線が廻る。軒ではなく棟を飾る葺瓦の可能性がある。6～10 は B 系統の土師器の坏で、6 の内面見込み部分には焼成前に施された列点文が 11 ケ所程度認められる。配列は弧を描くように 5 個の列点が認められ、その内側に 6 個不規則に施される。列点の形状は径 0.5～1.0cm の円形で、施文具の先端は乳房状のものと想定される。10 は底部中央に穿孔が 1 つ認められ、焼成前に施されたものと判断される。12 は玉砂利で、石材は蛇紋岩と判断される。

カクラン出土遺物（第 31 図）

1 はタイノイ川窯産焼締陶器四耳壺の頸部破片で耳は欠損する。外面には化粧土が施される。内面には粘土紐接合痕が認められ、製作者の指紋が良好に残されている。



第 25 図 SK152 出土遺物実測図 3 (1/4)



第 26 図 SD145 出土遺物実測図 4 (1/4)

SK092 出土遺物（第 31 図）

3～7 は唐津系陶器で、3 は碗、4～6 は皿である。4 は絵唐津の皿で灰釉が施される。内外面に貫入が認められる。5 は藁灰釉が施された薄手の皿である。7 はメンコ状加工品で、内面見込み部分の釉が渦巻状に掻き取られた碗の底部を打ち欠いたものである。これらは、17 世紀前半代に比定されるものである。

SF100 出土遺物（第 31 図）

8 は肥前系染付碗の丸碗である。9 は肥前系の磁器で口縁端部は内外面ともに露胎となる。

SX101 出土遺物（第 31 図）

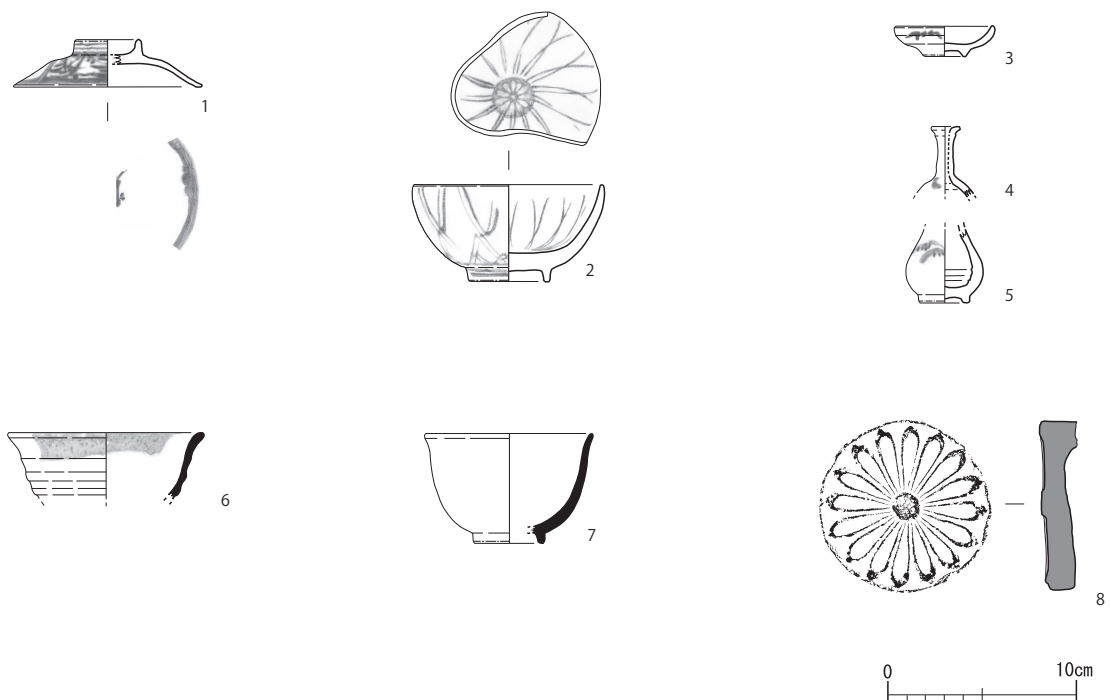
10 は中国龍泉窯系青磁の鉢である。鎬の連弁文が施される。

SD132 出土遺物（第 31 図）

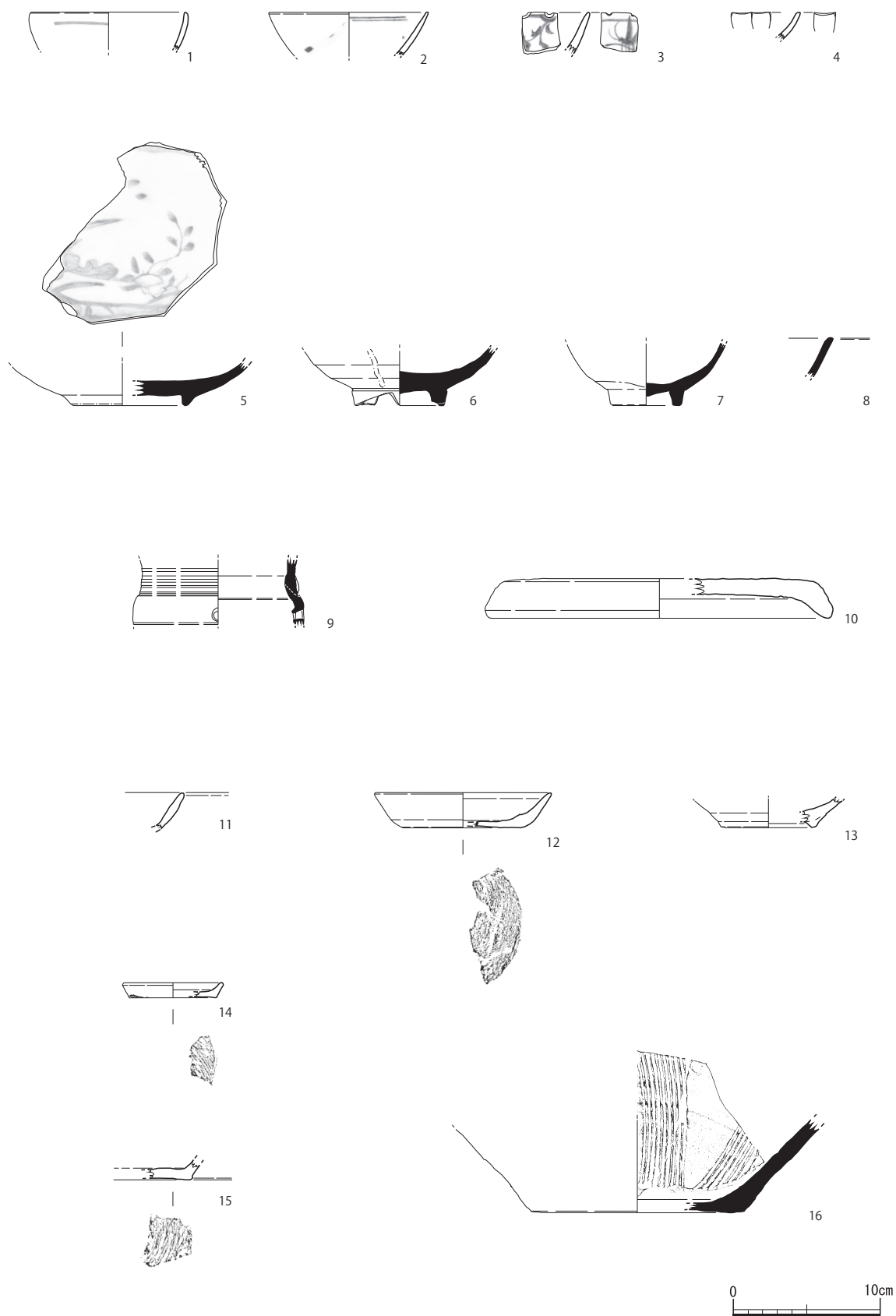
11 は肥前系染付碗で焼継ぎが施されたものである。底部外面には、朱書きで「東新町〇〇や」と判読される文字が認められる。当該資料の所有者を示すものと考えられ、今回の調査地点が江戸時代の東新町であったことを示唆するものである。

SK157 出土遺物（第 31 図）

12 は肥前系染付皿である。鏝皿と呼ばれるもので、丸く内湾する胴部から口縁部は大きく外反する。外底部にハリ支えの痕跡が認められる。17 世紀後半～末頃に比定されるものである。



第 27 図 SD146 出土遺物実測図 5 (1/4)



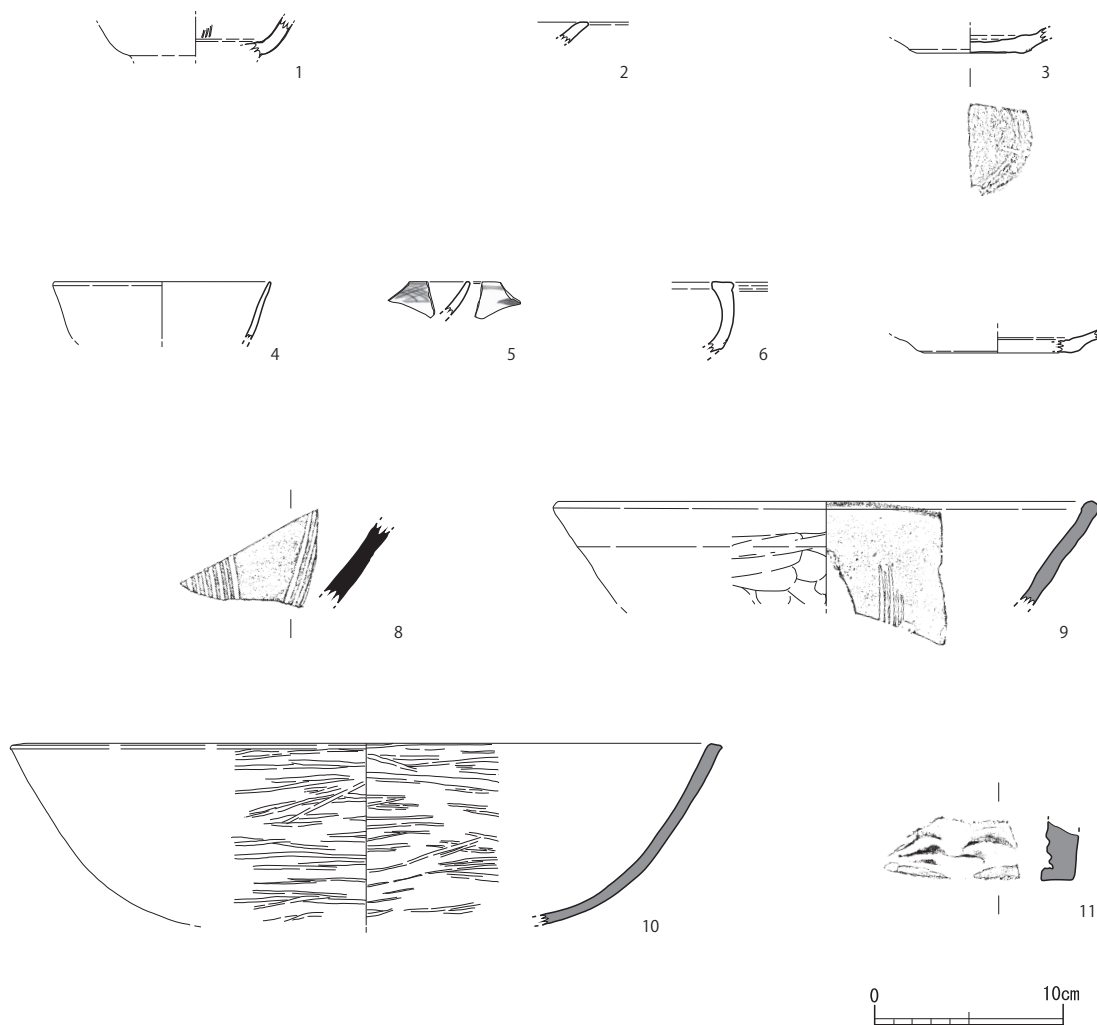
第 28 図 SF099・SE066 出土遺物実測図 6 (1/4)

第IV章 総括

本調査の報告を終えるにあたり、中世大友府内町跡第 108 次調査の成果を以下に列記し、検出された遺構群について時代毎にまとめる。また、今回発見された遺構・遺物から導き出される当該地一帯の歴史的地域特性について検討を行い、今後の調査課題として提示し、本報告の総括としたい。

第 1 節 自然堤防上に展開する遺構の時代別様相

当該地は大分川河口部の左岸に形成された標高 4～6 m 前後の沖積地に立地し、南北方向に復元される自然堤防上に位置する。調査の結果、第 2 図のとおり標高約 3.6 m 地点で安定地盤（明黄褐色シルト質土）が検出され、自然堤防の存在が追認された。検出された遺構は 16 世紀前半～19 世紀中頃に比定されるもので、16 世紀以前の遺構は皆無である。しかしながら、遺物はその他の時代のものが一定量認められ、弥生時代中期前半頃の下城式甕形土器をはじめ、12 世紀代の瓦器碗や白色研磨土師器、14 世紀前半頃の土師器坏や 17 世紀前半～後半頃の唐津焼・志野焼・肥前系磁器などが出土していることから、各時代の遺構が周辺に存在している可能性は高い。



第 29 図 SK001・SK115 出土遺物実測図 7 (1/4)

(1) 中世

1. 16 世紀前半頃

井戸跡 1 基 (SE066) と土坑 3 基 (SK103・115・200) が該当する。これらは近接して分布している。
土坑 (SK115・200) からは軒丸瓦と軒平瓦がそれぞれ 1 点ずつ出土している。

2. 16 世紀後半頃

土坑 1 基 (SK001) が該当する。出土遺物は僅少で 16 世紀代に比定されるものの、厳密な時期を特定できない土坑 (SK141) もこの段階のものである可能性がある。



第 30 図 SK200 出土遺物実測図 8 (1/4)

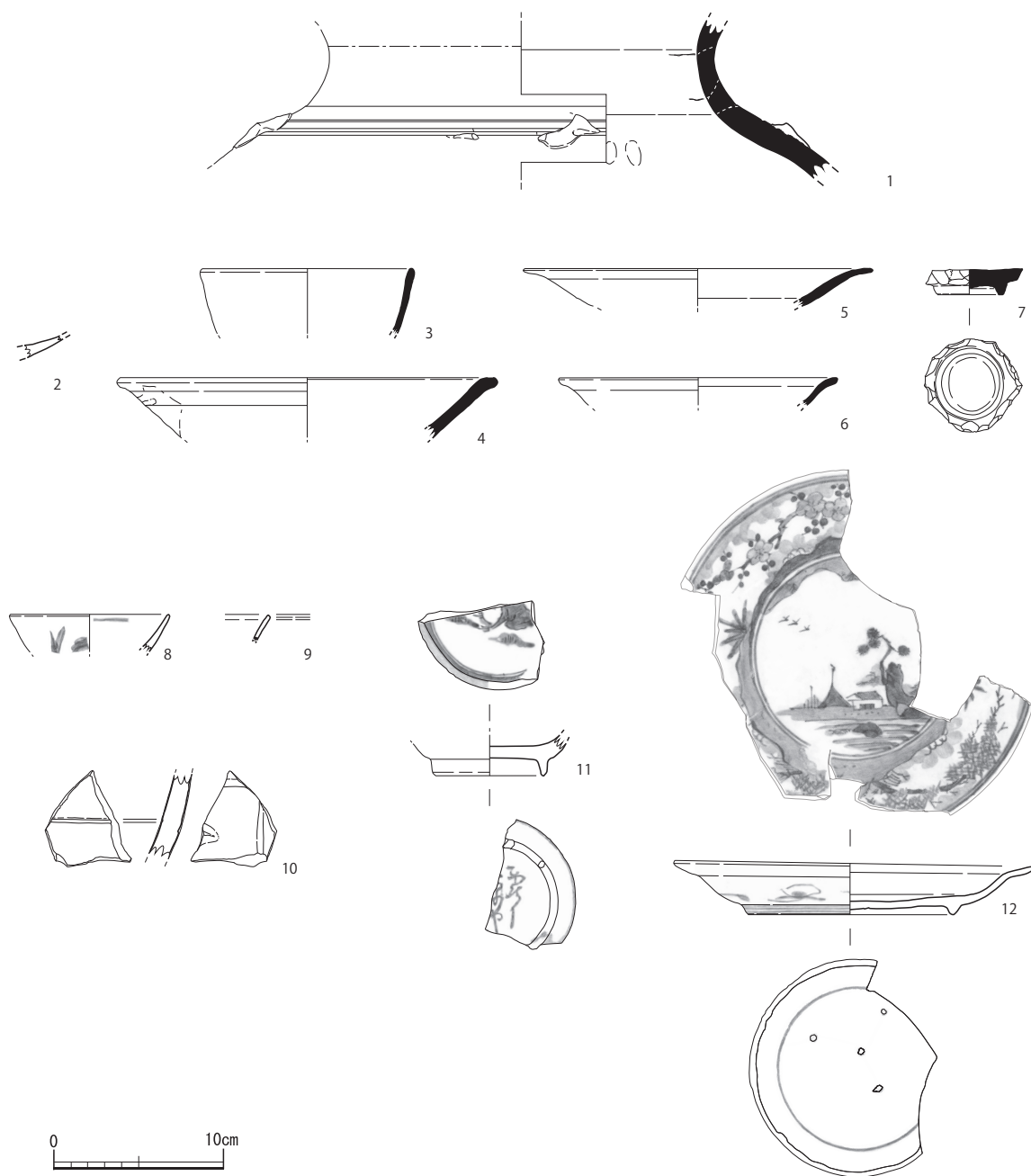
3. 16 世紀末頃

道路状遺構（SF210）が該当する。調査区西端部に位置し、中世大友府内町跡の第4南北街路に比定されるものである。同時期の遺構は他に検出されていない。

（2）近世

1. 18 世紀代

道路状遺構（SF100）をはじめ、当該期の可能性のある土坑が数基（SK139・164 など）存在する。19 世紀代の遺構と重複し、遺存状態が良好ではないものばかりで出土遺物も少なく詳細な時期を確定することはできない。道路状遺構（SF100）は調査区西端部に位置し、日向道に比定されるものである。



第 31 図 カクラン・SK092・SF100・SD132・SK157 出土遺物実測図 9 (1/4)

第1表 遺構出土遺物一覧表 ①

S番	遺構 番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
1	SK001	土坑	暗茶褐色砂質土	龍泉窯系青磁：碗(Ⅰ類 R003) 土師器：皿(ⅢC 京都系 R001)・坏(ⅢB R002) その他：焼土塊(R004)	土師器：小皿 須恵質土器：擂鉢 瓦器：碗	1→14 淡黄褐色ブロック土を一定量含む。	16C後半	M-7-g-12
2		攪乱	灰黄褐色土	タイ産陶器：四耳壺(ノイ川窯 R001)	国産磁器：皿・碗(肥前 筒形)・蓋(福岡×関西系)・碗(広東碗)・碗(肥前 焼継) 国産陶器：鉢(刷毛目唐津)・擂鉢(唐津)・土瓶(関西系)・甕(中世 焼締)・甕(中世 焼締)・甕(中世 焼締) 土師質土器：焙烙 瓦：軒平瓦	2→7 灰黄褐色砂質土(小礫混じる) 近代の町割り溝	昭和30～40年代	M-7-f-8,g-8
3	SD003	溝状遺構			国産磁器：碗(肥前 型紙摺り)・碗(肥前 丸碗)・徳利(肥前)・皿(内野山窯)	36→3	明治初期	M-7-f-11.12
4	SD004	溝状遺構			国産陶器：急須(関西系)・擂鉢(唐津)	36→4	19世紀	M-7-f-11
5	SK005	土坑			国産磁器：碗・鉢(色絵) 国産陶器：瓶・擂鉢(唐津) 瓦：丸瓦	66・157→5	昭和30～40年代	M-7-h-9.10
6	SK006	土坑			国産磁器：鉢(蛇目凹型高台) 国産陶器：擂鉢(土師質)・片口鉢 土師質土器：焙烙	灰褐色粘質土・炭化物混じる。	明治初頭以降	M-7-h-10
7	SD007	溝状遺構	暗灰褐色土		国産磁器：碗(肥前 丸碗)・碗(筒形)・皿(内野山窯) 国産陶器：擂鉢(備前)・甕(備前)	172→7	19世紀中頃以降	M-7-g-7
8		攪乱			国産磁器：碗 土師器：小皿(糸)・坏(糸) 土師質土器：火鉢 瓦器：碗 近現代遺物：土管・コンクリート	66→8	昭和30～40年代	M-7-g-9
9		攪乱			国産磁器：碗 国産陶器：猪口 近現代遺物：土管	39→9	昭和30～40年代	M-7-h-11.12
10		攪乱			国産磁器：碗 瓦類：丸瓦・平瓦		昭和30～40年代	M-7-h-10
11		攪乱			国産磁器：皿・碗(肥前 筒形)・碗(型紙摺り)・小碗(青磁 貫入あり)・皿(色絵) 国産陶器：小碗(萩焼)・擂鉢(唐津) 石製品：硯	102→11	昭和30～40年代	M-7-g-11
12		攪乱	暗灰褐色砂質土		国産磁器：花瓶・皿 国産陶器：花瓶・瓶・擂鉢(唐津)・擂鉢(高取上野)・急須	66→12→8 炭化物混じる。	昭和30～40年代	M-7-g-9.10
13		攪乱	暗灰褐色土		国産磁器：碗(肥前 丸碗) 国産陶器：不明 瓦類：平瓦	66・157→13	近代以降	M-7-h-9
14		攪乱	暗灰褐色粘質土		国産陶器：大皿(色絵) 瓦質土器：不明	1→14	近代以降	M-7-h-12,g-12
15		攪乱			国産磁器：皿・碗・皿(色絵) 近現代遺物：コンクリート	19→15	昭和30～40年代	M-7-i-12,h-12
16		攪乱			国産磁器：皿・碗 国産陶器：不明(焼締)		昭和30～40年代	M-7-g-12
17	SK017	土坑	暗茶褐色砂質土	国産磁器：碗(青白釉 焼継文字あり R001)	国産磁器：碗(型紙摺り)・碗(広東碗)・碗(青磁蛇目凹型高台筒形)・碗(外青磁)・碗(筒形) 国産陶器：碗(陶胎染付)・小碗(萩)・碗(京焼風) 土師質土器：大甕	65→17	19C中頃	M-7-i-10
18		攪乱			国産磁器：皿(色絵)・碗(赤絵)・皿(型紙摺り)	138→18	明治初～	M-7-i-11.12
19		攪乱			国産磁器：皿(波佐見) 国産陶器：不明(施釉 かき釉)・壺・擂鉢 近現代遺物：コンクリート	142・141・37・64・37→19	昭和30～40年代	M-7-h-12,i-12

第2表 遺構出土遺物一覧表 ②

S番	遺構 番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
20		攪乱			国産磁器：碗・皿(型紙摺り) 国産陶器：急須・猪口 土師質土器：焙烙 瓦質土器：蓋・火鉢		昭和30～40年代	M-7-g-11.h-11
21		攪乱			国産磁器：皿・皿(型紙摺り) 近現代遺物：コンクリート	26→21	昭和30～40年代	M-7-g-10
22		攪乱	1層：暗灰褐色粘 質土		中国磁器：碗(龍泉窯) 国産磁器：碗(波佐見)・皿(内野山 窯)・蓋碗(外青磁)・碗(色絵)・丸 碗・碗(外青磁) 瓦質土器：搗鉢 国産陶器：瓶(唐津 焼締)・不明 (楽焼?)・不明(龜山焼)・鉢(刷毛 目唐津)・搗鉢(唐津)・油壺(関西 系)・碗(陶胎染付) 土師質土器：焙烙・大甕 石製品：石臼	近・現代の埋土。客土に 弥生土器含む。	昭和30年代～	M-7-h-10.11. i-10.11
			2層：暗茶褐色粘 質土	国産陶器：不明(織部焼 R001) 弥生土器：甕(下城式 R002)・甕(下城式 底部 R003)	土師器：坏(16世紀代)・坏 弥生土器：甕(下城式)・壺			
23		攪乱			国産磁器：碗・急須	29→23	昭和30～40年代	M-7-h-11
24		攪乱			国産磁器：碗 土師質土器：甕	155→24	昭和30～40年代	M-7-g-11
25		欠番				欠番		
26		攪乱			国産磁器：碗 国産陶器：搗鉢・蓋 瓦：平瓦(「河」刻印) 近現代遺物：煉瓦	26→21	昭和30～40年代	M-7-g-10
27	SK027	土坑			国産磁器：碗(型紙摺り端反) 国産陶器：蓋(土瓶蓋)		明治初頭	M-7-g-11
28	SK028	土坑	暗茶褐色土		龍泉窯系青磁：不明 国産磁器：碗(青磁 貫入あり 近 世) 国産陶器：壺?(近世)	155→28	近世	M-7-g-11
29	SP029	ピット			国産磁器：不明(染付)・皿(染付)・ 不明(型紙摺り) 瓦質土器：火鉢 ガラス製品：不明	29→23	明治初頭	M-7-h-11
30		攪乱	暗茶褐色土		龍泉窯系青磁：皿(12世紀中頃) 国産磁器：碗(丸碗)・皿(染付)・碗 (広東碗)・碗・鉢(型紙摺り) タイ産陶器：四耳壺? 国産陶器：蓋		昭和30～40年代	M-7-i-10
31		攪乱			国産陶器：猪口 土器：不明		近代	M-7-h-10
32		攪乱			国産磁器：皿 国産陶器：搗鉢(唐津?) 瓦類：軒丸瓦	39→32	昭和30～40年代	M-7-h-10.11
33	SP033	ピット	暗茶褐色土		国産陶器：小壺		時期不明	M-7-h-11
34		攪乱	暗茶褐色土		国産磁器：碗(肥前) その他中国陶磁器：碗(素三彩中国 青花) 国産陶器：鉢(焼締)・不明	45・153・158・159→34	昭和30～40年代	M-7-h-10.11
35	SK035	土坑	暗茶褐色土					M-7-h-11
36	SX036	整地層			国産磁器：碗(型紙摺り)・碗(青 磁)・皿(型紙摺り)・皿(色絵染付) 国産陶器：搗鉢(唐津)・甕(備前)・ 土瓶 土師器：皿(京都系) 土師質土器：人形・焙烙 瓦質土器：鉢 金属器生産関連遺物：韃羽口 土製品：土壁 石製品：砥石 銅銭：寛永通宝	36→3・4・53 暗灰褐色土の整地層	明治初頭	M-7-f-10.11.12 g-10.11
37	SK037	土坑			国産磁器：碗(近世青磁)	37→19	近世	M-7-h-12

第3表 遺構出土遺物一覧表 ③

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
38		攪乱			国産磁器：灰入(赤絵)・碗(染付) 国産陶器：捏鉢 土師質土器：焙烙		明治以降	M-7-h-10
39		攪乱			国産磁器：皿・碗・急須	39→9	昭和30～40年代	M-7-h-11.12
40		攪乱	暗灰褐色土	国産磁器：碗(端反 焼継文字「二八」R002) 土師器：皿(施釉かわらけ R001)	中国陶磁：同安窯系青磁：碗 国産磁器：德利(染付)・鉢(型紙摺り蛇目凹型高台)・碗(色絵筒形)・碗 国産陶器：擂鉢(唐津)・德利・鉢(刷毛目唐津)・擂鉢(備前16世紀)・仏飯器 緑釉陶器：碗 土師質土器：火鉢 瓦質土器：火鉢・蓋 瓦類：平瓦(刻印) 石製品：不明	157→40 暗灰褐色粘質土 炭化物含む。	明治以降	M-7-H-9.10
41		欠番				欠番		
42		欠番				欠番		
43		欠番				欠番		
44		欠番				欠番		
45	SK045	土坑				45→34 暗茶褐色砂質土	近代	M-7-h-11
46	SK046	土坑			国産磁器：不明(染付)・皿(型紙摺り)・碗 国産陶器：碗(関西系)・擂鉢・鉢・燭台・擂鉢(備前16世紀前半) 瓦質土器：火鉢 瓦類：軒丸瓦	172→46	19C前半	M-7-g-5
47		攪乱			国産磁器：碗(型紙摺り)・碗(赤絵) 土師器：皿(京都系) 土師質土器：鉢・不明 須恵器：甕	172・58→47	昭和	M-7-g-5.f-5
48	SK048	土坑			国産磁器：碗(型紙摺り)・碗(色絵) 国産陶器：甕(常滑) 土師器：坏 瓦質土器：不明 その他：銀貨	172→48	明治以降	M-7-f-5
49		攪乱			国産磁器：皿・碗(型紙摺り) 国産陶器：壺(焼締)	172→49	昭和30～40年代	M-7-g-5
50		攪乱			国産磁器：皿・碗	172→50	昭和30～40年代	M-7-f-6.7.g-6.7
51	SK051	土坑			国産磁器：不明(染付)	172→51	明治初期以降	M-7-f-7
52	SK052	土坑			国産磁器：不明(染付)・皿(白磁蛇目釉剥ぎ) 土師質土器：不明	172→52	明治初期以降	M-7-g-7
53		攪乱	明灰褐色土		国産磁器：急須(赤絵)・小坏(型紙摺り)・皿 国産陶器：捏鉢 土師器：坏(坏a14世紀前半)・皿(皿C 京都系)・坏(坏a16世紀)・坏(坏B)・坏(坏B)・坏(坏B)・坏(坏B)・坏 土師質土器：不明 瓦質土器：不明	36→53	明治初頭	M-7-f-12
54	SK054	土坑(埋嚢)			国産陶器：瓶 土師器：大甕(内面に付着物あり) 瓦類：平瓦 近現代遺物：コンクリート 動植物遺体：獣骨	172→54	現代	M-7-g-5.6
55	SK055	土坑(埋嚢)			国産磁器：碗(端反)・碗(型紙摺り) 近現代遺物：セメント 銅製品：不明(青銅製品)	172→55	明治以降	M-7-g-6
56	SK056	土坑			国産磁器：不明(近世)・皿(内野山窯)・紅皿(「町」)・碗(筒形) 国産陶器：甕×瓶(唐津 焼締)	172→56	明治初期以降	M-7-g-6

第4表 遺構出土遺物一覧表 ④

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
57		攪乱			国産磁器：小坏・皿	172→57	昭和	M-7-g-6
58		攪乱	暗茶褐色土		国産磁器：鉢(肥前 焼継)・皿・碗 国産陶器：碗(筒形)・皿(絵唐津) 土師器：皿(皿C 京都系) 瓦質土器：捏鉢 弥生土器：壺(中期前半) 瓦類：平瓦(刻印)	172→58→47	昭和30年～40年代	M-7-g-5
59		攪乱	1層：暗茶褐色粘質土		国産磁器：碗(型紙摺り)・鉢 瓦質土器：鉢	172→59	明治初期	M-7-f-9
			2層：暗灰褐色粘質土		国産陶器：擂鉢(備前) 土師器：坏(坏B)・坏(坏B)・坏			
60		攪乱			国産磁器：碗(型紙摺り) 銅製品：火箸(青銅製)	172→60	明治初期	M-7-f-9.g-9
61		攪乱			国産磁器：皿(型紙摺り)・碗 緑釉陶器：鉢 土師質土器：火鉢・焙烙 瓦質土器：火鉢・捏鉢 瓦類：軒平瓦	172→61	明治初期	M-7-f-9
62		攪乱	暗茶褐色土		国産磁器：小坏(染付)・碗(染付)・丸碗(染付) 国産陶器：鉢×碗(刷毛目唐津)・碗(京焼風)・碗(京焼風)・不明 土師器：坏(坏B)・坏(坏a 12世紀) 土師質土器：中敷・火鉢(深鉢型) 瓦質土器：碗 瓦類：瓦	172→62→68	明治初期以降	M-7-F-8.9
63	SK063	土坑	茶褐色粘質土		国産磁器：碗(染付)	64→63→39・19	明治以降	M-7-i-12.h-12
64	SK064	土坑	暗茶褐色粘質土	土師器：坏(坏B R001)・坏(坏B R002)	土師器：坏・小皿	64→63 S-141の上層遺構	16C前半	M-7-h-12
65	SK065	土坑	暗茶褐色粘質土	国産磁器：・紅猪口(染付(小坏 R004)・碗(染付丸碗 R002)・碗(染付波佐見 R003)・碗(染付筒形 R005)・皿(染付 R006)・蓋(染付 R001)・灰入(青磁 R008)・瓶(染付 R007) 国産陶器：碗(関西系 R017)・碗(関西系 R018)・皿(R009)・鉢(R010)・鉢(萩 R0165)・急須(R011)・急須(R012)・急須(R013)※R011・R012・R013は同一個体。・壺(R014)・花瓶(肥前 R015)・擂鉢(R019) 石製品：砥石(R020)・手水鉢(凝灰岩製 R021)・五輪石(空風輪 凝灰岩製 R022)	その他中国陶磁器：花瓶(中国産) 国産磁器：盃(染付)・小坏(染付)・紅皿(白磁)・小坏×猪口(染付)・碗(染付)・碗(染付)・徳利(染付)・瓶(青磁)蓋・花入(染付) 国産陶器：小坏(関西系)・碗(陶胎染付)・碗(唐津)・碗(関西系 玉子手)・碗(関西系 玉子手)・皿(有田/波佐見・皿(関西系))・鉢・急須(唐津)・急須(唐津)・急須(唐津)・徳利・袋物(在地系)・擂鉢(備前)・瓶(刷毛目唐津)・不明(中世) 土師器：坏(16C) 石製品：砥石・砥石・砥石・五輪石 弥生土器：高坏(脚)・高坏(須玖Ⅱ式)	65→17 陶磁器類を多量に含む。	19C前半～中頃	M-7-i-11
66	SE066	井戸跡	1層：明茶黄色褐色土	土師質土器：碗(R001) 動・植物遺体：木片(R002)		66→157	16C前半	M-7-g-9.10.h-9.10
			2層：明灰黄褐色粘質土	国産陶器：擂鉢(備前 R005) 土師器：小皿(R001)・皿(皿C 京都系 R002)・坏(R003)・坏(R004)	土師器：坏(坏B)・皿(皿C 京都系)・坏(坏B)・坏(坏B)・坏(白色系) 土師質土器：甕 瓦質土器：鉢			
67		欠番				欠番		
68	SK068	土坑			国産磁器：小坏×猪口(染付)・紅皿(白磁) 国産陶器：小坏(関西系 貫入あり)・蓋・擂鉢(唐津)	172・62→68	明治初期以降	M-7-f-8
69		攪乱			国産磁器：皿		昭和	M-7-i-9
70		攪乱	暗茶褐色土		国産磁器：碗(型紙摺り)・碗・碗(赤絵)・碗 景德鎮窯系青花：碗(E類)・皿(B類) 国産陶器：擂鉢(唐津) 瓦類：平瓦	36→70	昭和	M-7-f-10.

第5表 遺構出土遺物一覧表 ⑤

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
71		攪乱			国産磁器：皿(波佐見)・皿 国産陶器：碗(刷毛目唐津)・甕(常滑) 弥生土器：不明 石製品：硯(線刻あり)		昭和30～40年代	M-7-i-6
72		トレンチ跡						M-7-h-7,i-7
73		攪乱			瓦類：瓦		現代	M-7-i-6
74		欠番				欠番		
75	SK075	土坑	暗茶褐色粘質土		国産磁器：不明(赤絵)・不明(染付) 国産陶器：瓶×徳利・播鉢・不明 土師器：坏(糸) 鉄製品：不明 その他：焼土塊	75→84・89 S-84の焼土遺構との関連は不明。	江戸	M-7-i-6
76	SK076	土坑	暗茶褐色砂質土			76→138	19C前半	M-7-i-11
77	SK077	土坑	暗茶褐色土		国産磁器：碗(波佐見)・皿(染付)・皿(白磁菊皿)・皿(内野山窯)・不明(面子 染付) 国産陶器：小坏・碗(陶胎染付)・面子・灰入(陶胎染付)・播鉢(唐津)・播鉢(備前)・播鉢・甕(中世)・大甕(備前) 土師質土器：大甕	90→77	19C前半	M-7-g-5
78	SK078	土坑			景德鎮窯系青花：皿(C群) 国産磁器：碗(型紙摺り)・皿(初期伊万里)・鉢(蛇目凹型高台) 国産陶器：皿(唐津折縁 砂目積み)・壺・播鉢(備前)・甕(17C初) 土師質土器：大甕	85・91・92→78→46	明治初頭	M-7-g-5
79	SK079	土坑	明茶褐色砂質土		国産磁器：不明(染付) 瓦質土器：不明		近世	M-7-f-5
80	SK080	土坑			国産磁器：碗(丸碗)・蓋(染付) 国産陶器：碗(関西系)	109→80	明治以降	M-7-g-6
81	SK081	土坑	暗茶褐色土		国産磁器：碗(染付)・皿(波佐見) 国産陶器：播鉢(唐津)・甕(唐津) 土師質土器：大甕	109・108→81	明治以降	M-7-g-6
82	SK082	土坑			国産陶器：皿	83→82	近世	M-7-g-6
83	SK083	土坑			国産磁器：不明(染付) 国産陶器：碗(陶胎染付)・甕(焼締) 土師質土器：甕	83→82	18C以降	M-7-g-6
84	SL084	炉カマド	灰白色砂質土			75→84→89	近世?	M-7-i-6
85	SK085	土坑	1層：明灰褐色土		景德鎮窯系青花：皿(C群) 国産磁器：碗(青磁)・碗(丸碗) 国産陶器：碗(肥前)・碗(関西系)・碗(関西系)・播鉢(肥前) 土師器：皿(京都系)・坏	86・87・91→85→78	明治	M-7-g-5,f-5
			2層：暗灰褐色土粘質土	国産磁器：碗(染付 R001) 国産陶器：碗(肥前(唐津) R002)・碗(肥前(唐津) R003)	国産陶器：碗(京焼風) 自然遺物：玉砂利			
86	SK086	土坑			土師器：坏×小皿	86→78・85 茶褐色粘質土	中世	M-7-g-5
87	SK087	土坑	暗茶褐色粘質土		国産磁器：徳利(染付)・不明(染付) 国産陶器：碗(唐津)・碗・大甕(備前)・不明(志野) 土師質土器：鍋 瓦類：平瓦	113・87→85	明治	M-7-g-5
88	SK088	土坑	暗灰褐色土			95→88	19C以降	M-7-g-5,f-5
89	SK089	土坑	灰褐色土		その他の陶磁器：鉢(漳州窯系赤絵) 国産陶器：面子・播鉢(備前)・甕(唐津 焼継) 土師器：不明 須恵質土器：鉢	84(焼土遺構)・75→89 第2層ややしまりありS-84との関連は不明	江戸時代	M-7-i-6
			2層：暗茶褐色砂質土	国産磁器：鉢(赤絵 R001) 国産陶器：碗(面子 R002) 土師質土器：中敷(R003)				

第6表 遺構出土遺物一覧表 ⑥

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
90	SK090	土坑			国産磁器：皿(波佐見) 国産陶器：鉢(刷毛目唐津)・播鉢(唐津) 土師質土器：大甕	90→77・170	19C前半～中頃	M-7-g-5
91	SK091	土坑	暗茶褐色土		国産磁器：碗(波佐見)・碗(丸碗)・碗(筒形) 国産陶器：碗(陶胎染付)・碗(唐津)・碗(銅緑釉)・播鉢(備前) 土師器：坏 瓦類：平瓦	92→91	19C前半～中頃	M-7-g-5
92	SK092	土坑	明茶褐色土	国産磁器：瓶(伊万里？ R001) 国産陶器：碗(唐津 R004)・碗(唐津 R005)・皿(唐津 R006)・皿(唐津 R002)・鉢(唐津 R003)	国産磁器：不明(染付) 国産陶器碗・碗・皿・鉢(萩焼)・大甕・不明(志野焼)・不明(瀬戸焼)・不明 瓦質土器：不明	92→91 S-100(近世道路状遺構)の上層遺構 近世段階の埋土の可能性あり	18C以降	M-7-g-5
93		欠番				欠番		
94	SX094	その他	暗茶褐色土		国産磁器：碗(伊万里 肥前系白磁)・碗(染付) 国産陶器：碗(唐津) 土師質土器：大甕	99→94	19C中頃	M-7-g-5
95	SK095	土坑	暗茶褐色土		景德鎮窯系青花：不明 龍泉窯系青磁：碗(Ⅱ類)・不明 白磁：碗(Ⅳ類) 国産磁器：碗(染付丸碗)・不明(白磁) 国産陶器：碗(瀬戸天目)・大甕(常滑)・不明 緑釉陶器：不明 土師器：小皿(糸) ガラス製品：不明・不明	96(中世道路側溝)→95 S-79.88の下層遺構	19C以降	M-7-g-5
96	SD096	溝状遺構	暗茶褐色砂質土	国産陶器：播鉢(備前 R002)・播鉢(備前 R003)・大甕(備前 R004) 土師器：坏(坏B R001) 瓦類：平瓦(R005) 動・植物遺体：骨(R007) 石製品：硯(赤間 R006)	国産陶器：播鉢・大甕(備前) 土師器：坏(坏B) 土師質土器：不明 瓦類：平瓦 自然遺物：白石	210→96→95 16世紀末の道路側溝 暗黄褐色ブロック土少量含む、ややしまる。水の流れなし。 S-95に切られるため、調査区南側の土層では確認できない。	16C末	M-7-g-5
97	SD097	溝状遺構				暗灰褐色ブロック土	近世	M-7-g-5
98		欠番				欠番		
99	SD099	溝状遺構	暗灰褐色粘質土	国産磁器：碗(染付 肥前 R001)・碗(染付 肥前 R002)・碗(染付 肥前 R003)・皿(白磁 菊皿 R005) 国産陶器：碗(唐津 R006)・碗(唐津 R007)・皿(染付 瀬戸美濃 R004)・鉢(唐津 R009)・花入(唐津 R008) 土師器：蓋(R010)	白磁：皿 国産磁器：碗(染付)・碗(染付)・碗(染付) 国産陶器：皿(瀬戸美濃)・碗・碗・不明(信楽?)・鉢(備前)・花入・播鉢(肥前)・壺・甕(常滑) 瓦類：平瓦	100・210→99 しまりあるシルト(暗茶褐色土で遺物取り上げ) S-100(路盤)に伴う、近世道路側溝	19C前半	M-7-g-5
100	SF100	路盤(道路状遺構)	明茶褐色砂質土	国産磁器：碗(染付 肥前 R001)・皿(白磁 R002)	国産磁器：碗(染付) 土師器：坏	100→99(道路側溝) 明黄褐色ブロック土を少量含む。(暗茶褐色土で遺物取り上げ)近世道路舗装面(路盤)と考えられる。	18C以降	M-7-g-5
101	SK101	土坑	暗茶褐色土	龍泉窯系青磁：盤(R001)	国産磁器：皿(白磁) 国産陶器：不明(備前焼)	91→101 暗茶褐色砂質土、炭化物を少量含む、しまりなし。 S-91を切るため、19世紀中頃以降の土坑と考えられる。	19C中頃以降	M-7-g-5
102	SK102	土坑			国産磁器：小碗(型紙摺り) 国産陶器：火鉢(備前) 土師器：小皿	102→11	明治初頭	M-7-g-11.12
103	SK103	土坑		土師器：坏(坏B R001)・坏(R002)	土師器：坏(坏B)・小皿(坏B)	暗茶褐色砂質土、黄褐色ブロック土を少量含む。	16C前半	M-7-g-12
104	SD104	溝状遺構			土師質土器：不明		近世～近代	M-7-i-11.12
105	SK105	土坑	暗茶褐色土		国産磁器：碗(型紙摺り)・徳利(染付) 国産陶器：碗(陶胎染付)蓋(土瓶蓋) 土師質土器：焜炉	115・171→105	明治初頭	M-7-g-10.11.11.10.11

第7表 遺構出土遺物一覧表 ⑦

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
106	SK106	土坑			国産磁器：皿(型紙摺り) 国産陶器：土瓶・猪口	155→106	明治初頭	M-7-g-10
107	SP107	ピット			国産磁器：鉢(蛇目凹型高台)	暗茶褐色粘質土	19C前半	M-7-i-10
108	SK108	土坑	暗茶褐色粘質土	国産磁器：皿(染付 R001) 国産陶器：鉢(刷毛目唐津 R002)		109・113→108→81炭化物及び淡黄褐色ブロック土を少量含む。(暗赤褐色土で遺物取り上げ)	明治以降	M-7-f-6.g-6
109	SK109	土坑	暗灰褐色粘質土	国産磁器：碗(波佐見 R002) 国産陶器：小碗(萩焼 R001)	国産磁器：碗：皿・不明(皿) 国産陶器：不明(志野焼)・碗(陶胎染付)・鉢(刷毛目唐津)・甕(唐津焼締)・碗(国産)	113.114→109→80・81・108	明治以降	M-7-g-6
110	SD110	溝状遺構				110→112 暗茶褐色土。間仕切の溝	16C代	M-7-g-5
111	SD111	溝状遺構				S-96・S-99の間にある細長い溝	16C以降	M-7-g-5
112	SD112	溝状遺構				110→112 S-96・S-99の間にある細長い溝	16C以降	M-7-g-5
113	SD113	溝状遺構			国産磁器：不明(白磁) 国産陶器：壺(刷毛目唐津)・不明	114→113→109・87	明治以降	M-7-g-6
114	SK114	土坑			国産磁器：碗(型紙摺り) 国産陶器：擂鉢(唐津)	114→109・113	明治以降	M-7-g-6
115	SK115	土坑	暗茶黄褐色砂質土	国産磁器：碗(染付 肥前 混入 R001)・碗(染付 肥前 混入 R002) 国産陶器：不明(陶胎染付 R003)擂鉢(備前 R007) 土師器：坏(坏B R004) 土師質土器：焙烙(R005) 瓦質土器：擂鉢(R008)・捏鉢(R006) 瓦類：軒平瓦(R009)	同安窯系青磁：碗(1-1-b類) 国産磁器：皿(染付)・碗(染付) 国産陶器：碗(陶胎染付) 土師器：坏(坏B)・袋物 白色研磨土器：碗 土師質土器：鉢 瓦質土器：擂鉢・捏鉢	115→105・171 焼土ブロックを少量含む。(暗茶褐色土で遺物取り上げ)	16C前半	M-7-g-10
116	SK116	土坑	茶褐色土		景德鎮窯系青花：皿 国産磁器：皿・碗(丸碗)・紅皿 瓦質土器：捏鉢・焜炉 瓦類：軒丸瓦	明茶褐色砂質土	昭和30～40年代	M-7-g-10.11. h-10.11
117		攪乱			国産磁器：不明・碗(染付筒形) 国産陶器：不明 近現代遺物：セメント	26→117	現代	M-7-g-10
118	SP118	ピット			国産磁器：碗(青磁)・不明(型紙摺り染付) 土師質土器：不明		明治初頭	M-7-g-10
119	SK119	土坑	暗茶褐色粘質土		国産磁器：碗(染付)・碗(丸碗)	156→119	昭和	M-7-g-5
120	SK120	土坑			国産磁器：碗(染付) 国産陶器：碗(唐津)	121・126→120	明治初頭	M-7-f-9.g-9
121	SK121	土坑			国産磁器：皿(型紙摺り)・碗(広東碗)・碗(染付)・蓋 土師器：耳皿(京都系)		明治初頭	M-7-g-9
122	SK122	土坑			国産磁器：碗 国産陶器：擂鉢(唐津)		明治初頭	M-7-g-5
123	SK123	土坑				124→123	明治以降	M-7-g-9
124	SX124	その他			国産磁器：鉢(型紙摺り 蛇目凹型高台)		明治初頭	M-7-g-9
125	SX125	その他			国産磁器：碗(丸碗 菊文)・碗(外青磁筒形) 国産陶器：甕(唐津 焼継)	125→121・12 暗灰褐色粘質土	19C前半～中頃	M-7-g-9.f-9
126	SX126	その他			国産磁器：不明(染付 焼継あり)・碗(筒形)・碗(丸碗)・皿(青磁染付) 国産陶器：碗(関西系)・碗(陶胎染付)・擂鉢(唐津) 土師質土器：甕	暗茶褐色126→127	19C前半～中頃	M-7-g-8.f-8
127	SK127	土坑			国産磁器：蓋(染付)・碗(波佐見)・鉢(白磁菊型) 国産陶器：甕(焼継ぎ)・不明(肥前) 土師器：皿(京都系) 土師質土器：甕 瓦質土器：捏鉢	125・126→127	19C前半～中頃	M-7-f-8

第8表 遺構出土遺物一覧表 ⑧

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
128		攪乱			国産磁器：徳利(染付)・小坏(色絵焼継)・碗(筒形) 国産陶器：播鉢(唐津)・大甕(備前)・壺(唐津 焼締) 土師質土器：大甕・焙烙 瓦質土器：焜炉・捏鉢 弥生土器：甕(下城式) 近現代遺物：セメント	129・131・132→128	現代	M-7-g-8
129	SK129	土坑			国産磁器：碗(端反)・皿(染付 コンニャク印判) 土師質土器：甕	131→129→128・132	現代	M-7-f-8
130		欠番				欠番		
131	SK131	土坑			国産磁器：皿・碗	現代遺物混じる	昭和	M-7-f-8
132	SD132	溝状遺構	暗黄灰褐色土	国産磁器：碗(端反 R001)・碗(端反 R002)・碗(端反 R003)・皿(染付 伊万里 焼継文字「東新町○○や」 R004)・皿(染付 R005)・瓶(青磁 R006) 国産陶器：鉢(関西系 R008)・蓋(布目 R009)・小坏(関西系 R007) 土師質土器：焙烙(R010) 瓦質土器：鉢(R011)	国産磁器：碗(肥前)・碗(肥前)・碗(肥前)・皿(伊万里 型紙摺り)・花瓶(青磁)・碗(波佐見)・碗(丸碗)・碗(丸碗)・碗(外青磁)・碗(染付)・碗(染付)・碗(染付)・碗 国産陶器：皿(在地)・製品(箸置き×蓋)・播鉢・鉢 瓦質土器：捏鉢・火鉢 瓦器：火鉢	129,131→132	19C前半～中頃	M-7-f-8.g-8.i-8
133	SX133	その他			国産磁器：碗(染付丸碗)・皿(内野山窯) 国産陶器：小碗	132→133	昭和	M-7-g-8.f-8
134	SD134	溝状遺構			国産磁器：碗(端反)・大皿(波佐見)・蓋(染付) 国産陶器：小坏(萩)	132→134	19C前半～中頃	M-7-g-8.f-8
135	SK135	土坑			国産磁器：碗(広東碗)・碗(端反) 国産陶器：不明・甕(備前) 石製品：砥石	135→33	19C前半～中頃	M-7-g-11.h-11
136	SK136	土坑			国産磁器：瓶(染付)・碗 国産陶器：甕(備前)	151→136	19C中頃以降	M-7-g-7
137	SK137	土坑			国産磁器：皿(波佐見)・甕(唐津 焼締)・碗(染付) 国産陶器：瓶・仏飯器・鉢・灰入・猪口 瓦質土器：焜炉	151→137	19C中頃以降	M-7-g-7
138	SK138	土坑	暗茶褐色粘質土	国産磁器：蓋(染付 R001)・猪口(染付 R002)・猪口(染付 R003)・紅皿×小碗(染付 R004)・紅皿×小碗(染付 R005)・紅皿×小碗(染付 R006)・碗(染付 丸碗 R007)・碗(染付 波佐見 R008)・碗(面子 染付 波佐見 R009)・碗(染付 丸碗 R010)・皿(染付 波佐見 R011)・鉢(染付 R012)・仏飯器(染付 R013)・鉢(染付 R014)・鉢×瓶(染付 R015)・碗(青磁染付 筒形 R016)・猪口(白磁 R017) 国産陶器：碗(陶胎染付 R018)・碗(陶胎染付 R019)・瓶(木瓜型 R020)・碗(福岡系 R021)・鉢(刷毛目唐津 R022)・播鉢(R023)・播鉢(R024)・播鉢(R025)・播鉢(R026) 瓦類：軒丸瓦(R027) 石製品：硯(砥石に転用 R028)	景德鎮窯系青花：皿 白磁：小碗 国産磁器：碗(染付丸碗)・碗(波佐見)・皿・仏飯器(染付)・皿(内野山窯)・蓋・瓶(染付)・鉢・猪口・皿(白磁 見込み釉剥ぎ 面子)・鉢(染付)・碗(染付)・瓶(染付)・小碗(染付)・小碗(染付)・碗(染付 くらわんか碗)・碗(染付 くらわんか碗)・碗(染付 打ち割り)・碗(染付 打ち割り)・碗(染付 くらわんか碗)・鉢/皿(染付)・皿(染付)・鉢(染付 暗灰褐色)・皿(染付 伊万里 大明年製)・碗(青磁染付 筒形) 国産陶器：碗(型押し)・鉢・播鉢・播鉢・播鉢(小型)・甕(唐津 焼締)・甕(刷毛目唐津)・甕(常滑)・皿(唐津)・大甕(肥前焼)・播鉢・播鉢(唐津)・灰入・碗(関西系)・碗(筒形 福岡系) 土師質土器：大甕 石製品：石臼	76→138 淡黄褐色ブロック土を少量含む。	19C前半～中頃	M-7-i-11
139	SK139	土坑		国産陶器：碗(R001)	国産磁器：蓋(染付)・碗(染付 焼継ぎあり)・急須(肥前)・碗(肥前丸碗) 国産陶器：碗/皿 その他の陶磁器：碗 土師質土器：不明	140→139 暗茶褐色砂質土、暗黄褐色砂質土をブロック状に含む。	18C後半	M-7-h-11
140	SK140	土坑			土師器：坏	暗茶褐色砂質土、明黄褐色土を少量含む。 140→139。	18C後半以前	M-7-g-11.h-11

第9表 遺構出土遺物一覧表 ⑨

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
141	SK141	土坑	1層：茶褐色土 2層：暗茶褐色砂質土		国産陶器：甕(常滑)	141→19・63・64。 S-142の上層遺構と考えられる。	16C代	M-7-h-12
142	SK142	土坑	暗茶褐色粘質土	磁器：皿(染付 R001) 動・植物遺存体：牛骨(R002)	景徳鎮窯系青花：碗 土器：不明 動・植物遺体：牛骨	142→19。S-141に比べし まり強い。	16C代	M-7-h-12
143	SP143	ピット			土師器：不明		16C代?	M-7-j-6
144		欠番				欠番		
145	SD145	溝状遺構	暗灰褐色粘質土	国産磁器：坏(染付 R002)・紅猪口(染付 R003)・紅猪口(染付 R004)・小坏(染付 R005)・蓋(染付 R006)・蓋(染付 R007)・小皿(染付 R008)・碗(端反 R009)・碗(染付 丸碗 R010)・碗(染付 丸碗 肥前 R011)・碗(染付 丸碗 肥前 R012)・碗(染付 丸碗 肥前 R013)・鉢(染付 肥前 R014)・碗(染付 筒形 R015)・皿(染付 波佐見 R016)・皿(染付 波佐見 R017)・瓶(染付 R018)・小坏(染付 R019)・小皿(染付 R020)・皿(染付 R021)・皿(染付 肥前 R022)・蓋(青磁染付 R023)・碗(青磁染付 筒形 R024)・碗(青磁 R025)・瓶(青磁 R026)・鉢(青磁 R027)・鉢(青磁 肥前 R028)・灰入(青磁 R029)・碗(白磁 R030)・猪口(白磁 R031)・猪口(白磁菊皿 R032)・皿(白磁 R033)・皿(内野山窯 R045) 国産陶器：皿(赤絵 R034)・皿(R035)・小坏(R036)・碗(京焼風 R037)・碗(京焼風 R038)・碗(肥前 R039)・碗(関西系 R040)・鉢(肥前 R041)・碗(陶胎染付 R042)・瓶(R043)・瓶(R044)・皿(唐津 R046)・不明(志野焼 R047)・坏(関西系 R048)・建水(在地系 R049)・花入(R050)・鉢(R051)・播鉢(備前 R052)・播鉢(R053)・播鉢(R054)・播鉢(R055)・播鉢(R056)・播鉢(R057) 土師質土器：小皿(R001)・焙烙(R058) 瓦類：軒平瓦(R059)	龍泉窯系青磁：皿 国産磁器：皿(白磁 菊皿)・鉢(染付 関西系播鉢)・碗(青磁染付 筒形)・皿(青磁 見込み釉剥ぎ)・小皿・小坏・碗(筒形)・皿・蓋・瓶・仏飯器・皿(波佐見)・不明・不明(色絵)・小皿(染付)・小坏(染付)・小坏(染付)・小碗(染付 小型のくらわんか碗)・蓋・蓋(染付 唐津)・小皿(染付 肥前)・碗(染付)・碗(染付)・碗(染付 肥前、くらわんか碗)・碗(染付 肥前)・碗(染付 肥前)・鉢(染付 肥前)・碗(染付 肥前、蛸唐草文)・皿(染付)・碗(染付)・袋物(染付)・小碗(青磁)・袋物(瓶か?)・皿(見込み釉剥ぎ)・皿(青磁 火入れ)・鉢(唐津?) 染付：蓋・皿(肥前)・皿(青磁染付)・小皿(外青磁)・碗(筒形碗、青磁)・皿 白磁：碗・小鉢・小皿(花卉皿) 国産陶器：小皿(関西系陶器)・皿?(在地系(福岡?))・小坏・碗(関西系陶器)・碗(唐津)・碗(関西系陶器)・碗(関西系陶器)・鉢(鉄釉・瀬戸美濃)・小碗(鉄釉・瀬戸美濃)・皿(内野山窯・墨書あり)・小皿(瀬戸美濃)・坏(関西系陶器)・鉢(植木鉢)・坏(肥前系)・播鉢・播鉢・播鉢・播鉢・播鉢・播鉢・碗(刷毛目唐津)・播鉢(備前)・壺(備前)・播鉢(唐津)・皿(唐津)・不明(絵唐津)・不明(福岡系)・花入・碗(肥前系)・碗(関西系) 土師器：皿(C系統)・坏 白色研磨土師器：碗 土師質土器：焙烙・大甕 瓦質土器：播鉢 瓦類：軒平瓦	145→152 暗黄褐色土を少量含む。 (暗灰黄褐色土で遺物取り上げ)陶磁器類及び小礫を含む。	19C前半～中頃	M-7-f-8、g-8
146	SD146	溝状遺構	明茶褐色砂質土 (暗茶褐色土)	国産磁器：蓋(染付 瀬戸美濃 R001)・瓶(染付 R002)・蓋(染付 R003)・碗(染付 丸碗 肥前 R004)・碗(染付 筒形 R005)・碗(染付 筒形 R006)・蓋(染付 R007)・小瓶(染付 R008)・小瓶(染付 肥前 R009)・小坏(染付 R010)・紅皿(白磁 R011)・紅皿(白磁 R012)・皿(染付 R013)・皿(染付 R014)・蓋(青磁染付 R015)・碗(青磁染付 筒形 R016)・ 国産陶器：蓋(京焼風R017)・碗(R018)・碗(関西系 R019)・小坏(京焼風 R020)・小坏(京焼風 R021)・鉢(瓦質 関西系 R022)・土瓶(瓦質 R023)・播鉢(R024)・播鉢(R025) 土師質土器：焙烙(R026) 瓦類：軒丸瓦(R027)	龍泉窯系青磁：皿 漳州窯系染付：皿 白磁：不明 国産磁器：小坏・小皿(伊万里、肥前系)・碗(肥前、見込み昆虫文(クモ))・筒形碗(肥前、型紙摺り(古い))・筒形碗(肥前、みかん)・蓋(肥前、焼成不良)・一輪挿(肥前)・袋物(肥前)・小坏・小坏(肥前)・紅皿(型押し、肥前)・小皿(伊万里、波状文)・皿(肥前)・小皿(伊万里、外青磁、五弁花文)・碗(肥前、外青磁) 陶器：蓋・碗・小碗(関西系陶器)・小碗(関西系色絵)・碗(関西系陶器)・小皿(鉄釉・関西系?)・播鉢(関西系)・播鉢・不明(青磁)・灰入(青磁)・皿(内野山窯)・紅皿・蓋・碗(丸碗)・碗(筒形)・碗(青磁染付)・瓶(染付)・小坏・皿(染付) 国産陶器：播鉢(唐津)・播鉢(備前)・播鉢(備前)・碗(陶胎染付)・鉢・鉢(刷毛目唐津)・土瓶・小碗(京焼風)・碗・碗 土師器：坏・坏 石製品：不明(チャート)	暗黄褐色ブロック土を少量含む。(暗茶褐色土で遺物取り上げ)	19C前半～中頃	M-7-g-8

第10表 遺構出土遺物一覧表 ⑩

S番	遺構 番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
147		欠番				欠番		
148		欠番				欠番		
149		欠番				欠番		
150	SD150	溝状遺構	1層：明灰褐色土		*暗灰褐色土と記載 国産磁器：碗(広東碗)・碗(端反)	2層20cm程の礫及び瓦・陶磁器類を含む。 S-145.146上層の埋土と思われる溝状遺構。	19C前半～中頃	M-7-f-8.g-8
			2層：暗茶褐色粘質土	国産磁器：碗(染付 焼継文字あり R001)・碗(染付 焼継文字あり R002) 石製品：石臼(凝灰岩製 R003)	国産磁器：碗(広東碗)・碗(端反)・不明(青磁) 国産陶器：小碗(萩焼)・小碗(関西系)・不明(志野焼)・皿(絵唐津)・皿(唐津)			
151	SX151	その他		国産磁器：人形(緑釉 虚無僧型 R001)	景德鎮窯系青花：碗 国産磁器：碗(染付)・碗(筒形)・蓋・紅皿 国産陶器：擂鉢(唐津)・碗(陶胎染付)・碗(肥前)・鉢(刷毛目唐津)・小碗(関西系)・大甕(備前)・皿(唐津)・甕	151→136・137・154 暗茶褐色粘質土。近世における埋土の可能性あり。	19C前半～中頃	M-7-f-7.g-7
152	SK152	土坑	明茶褐色砂質土(暗灰褐色土)	国産磁器：蓋(染付 R001)・蓋(染付 R002)・碗(染付丸碗 R003)・碗(染付波佐見 R004)・碗(染付波佐見 R005)・碗(染付 R006)・鉢(染付 蛇目凹型高台 R008)・皿(染付 R009)・皿(染付 R010)・皿(染付 波佐見 R011)・皿(染付型押し R012)・皿(白磁菊皿 R013)・皿(青磁 R023)・鉢(青磁 肥前 R024) 国産陶器：碗(R014)・碗(R015)・碗(面子 R016)・碗(刷毛目唐津 R017)・鉢(福岡系 R018)・壺(R019)・擂鉢(唐津 R020)・擂鉢(唐津 R022)・土師質土器：坏(灯明皿 R007)・焙烙(R021) 瓦類：軒丸瓦(R025) 石製品：石臼(凝灰岩製 打ち欠きあり R026)	国産磁器：鉢(青磁)・碗(波佐見)・皿・蓋・皿・皿(染付)・瓶・灰入(青磁)・蓋(染付)・蓋(肥前)・蓋(肥前)・碗(伊万里 湯福)・碗(肥前/波佐見)・碗(肥前)・碗(波佐見 底部に貫入)・皿(肥前 内面青磁)・皿(肥前)・皿(肥前)・皿(青磁 肥前)・角皿(肥前 青磁染付)・小碗(釉剥ぎ) 国産陶器：鉢(刷毛目唐津)・碗・碗(陶胎染付)・小碗(京焼風)・碗(肥前)・壺・瓶・大甕(備前)・灰入・不明・碗(関西系陶器)・碗(関西系陶器(玉子手))・碗(関西系陶器)・碗(唐津)・鉢(在地系(福岡))・壺(在地系(福岡))・擂鉢(関西系)・擂鉢土師器：皿(京都系) 瓦器：鉢(瓦質土器) 石製品：石臼	145→152 しまりはあるが粘質はない。(暗灰褐色土で遺物取り上げ)	19C前半～中頃	M-7-f-8.g-8
153	SD153	溝状遺構	暗茶褐色砂質土	国産磁器：皿(染付 R001)・鉢(染付 蛇目凹型高台 R002)・碗(染付 焼継 R003)・碗(染付 広東碗 R004)	国産磁器皿(型紙摺り)・皿(型紙摺り)・鉢(型紙摺り 蛇目凹型高台)・碗(広東碗)・皿(波佐見)・碗(染付 筒形)・蓋 瓦類：軒平瓦	159→153	明治初頭	M-7-h-11.
154	SD154	溝状遺構			土師質土器：大甕	151→154	19C中頃以降	M-7-f-7
155	SX155	その他	暗灰黄褐色土		国産陶器：不明 土師質土器：鍋	155→24・28	中世?	M-7-g-11
156	SK156	土坑	明茶褐色粘質土		国産陶器：鉢(刷毛目唐津) 土師器：坏 土師質土器：大甕	66→156→119 炭化物及び淡橙色のブロック土含む。	18C前半	M-7-g-9
157	SK157	土坑	暗茶褐色粘質土	国産磁器：皿(染付 肥前 R001)	国産磁器：碗(型紙摺り) 国産陶器：擂鉢(唐津)	157→5・40 粘質及びしまり強い	明治初頭	M-7-g-10.h-9
158	SK158	土坑	暗茶褐色土	国産磁器：碗(染付 丸碗 R001)・碗(染付 筒形 R002)・皿(染付 R003) 国産陶器：擂鉢(肥前 R004)	国産磁器：碗(丸碗)・皿 国産陶器：甕(肥前)・擂鉢(唐津) 須恵器：蓋(V期)	158→153 暗茶褐色砂質土	19C前半～中頃	M-7-h-10
159	SD159	溝状遺構		国産磁器：碗(染付 R001) 石製品：不明(凝灰岩製 R002)・不明(凝灰岩製 R003)		159→153 茶褐色砂質土	近世	M-7-h-10
160	SP160	ピット					時期不明	M-7-f-10
161		欠番				欠番		

第11表 遺構出土遺物一覧表 ⑪

S番	遺構 番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
162	SP162	ピット			国産磁器：碗(端反)		19C前半～中頃	M-7-f-10
163	SP163	ピット			国産磁器：碗(型紙摺り)		明治以降	M-7-f-10
164	SK164	土坑			国産磁器：不明(染付) 国産陶器：土瓶×急須・碗(陶胎染付)・碗(肥前) 土師器：小皿	S-126下層遺構	18C前半以降	M-7-f-8.9.g-8.9
165	SP165	ピット					時期不明	M-7-f-9
166	SP166	ピット					時期不明	M-7-g-9
167	SP167	ピット					時期不明	M-7-f-9
168		欠番				欠番		
169		欠番				欠番		
170	SK170	土坑			国産磁器：碗(染付)・碗(筒形) 国産陶器：土瓶 土師質土器：大甕	90→170	19C以降	M-7-g-5
171		攪乱	暗茶褐色粘質土		同安窯系青磁：碗(1-1-b類) 白磁：碗(IV類) 国産磁器：碗(染付 焼継文字あり)・碗(端反)・蓋(染付) 国産陶器：播鉢 土師器：坏・皿(C系統) 瓦質土器：捏鉢 瓦類：軒平瓦 近現代遺物：スレート	171→105 暗黄褐色ブロック土をわずかに含む。 S-115の上層遺構	近現代	M-7-g-10
172	SX172	整地層	暗茶褐色土		国産磁器：碗(型紙摺り)・碗(染付 焼継文字あり)・小坏(白磁)・小坏(染付)・碗(染付)・碗・不明(染付)・不明(型紙摺)・不明(型紙摺)・不明(型紙摺)・不明(型紙摺)・不明(銅版印刷) 国産陶器：小坏(萩)・皿(絵唐津)・皿(唐津 砂目積み)・碗	108-2-1区整地層	明治初頭	M-7-g-5.6.7.8.9 f-5.6.7.8.9
173		欠番						
174		欠番						
175		欠番						
176		欠番						
177		欠番						
178		欠番						
179		欠番						
180		欠番						
181		欠番						
182		欠番						
183		欠番						
184		欠番						
185		欠番						
186		欠番						

第12表 遺構出土遺物一覧表 ⑫

S番	遺構 番号	種別	土色	出土遺物一覧(R番号登録分)	出土遺物一覧	切り合い／備考	時 期	地 区
187		欠番						
188		欠番						
189		欠番						
190		欠番						
191		欠番						
192		欠番						
193		欠番						
194		欠番						
195		欠番						
196		欠番						
197		欠番						
198		欠番						
199		欠番						
200	SK200	土坑	暗茶褐色土	中国磁器：盤(青磁 R007) 国産陶器：擂鉢(R010) 土師器：坏(坏B R001)・坏(坏B R002)・ 坏(坏B 灯明皿 底部焼成後穿孔あり R003)・坏(R004)・坏(R005)・坏(坏B R 006) 瓦質土器：火鉢(R009) 瓦器：碗(和泉型碗c R008) 瓦類：軒丸瓦(R011) 自然遺物：玉砂利(R012) 動・植物遺体：骨(R014) 石製品：石臼(凝灰岩製 R013)	国産磁器：鉢(青磁) 国産陶器：甕(焼締)・甕(常滑)・擂 鉢 土師器：小皿(B系統)・坏(B系統)・ 灯明皿(B系統・穿孔)・坏(B系統)・ 坏(B系統)・坏(B系統)・坏(坏B 6 片)・坏(10片)・不明(5片) 須恵器：甕 須恵質土器：擂鉢 瓦質土器：碗・火鉢(印判)・不明 土師質土器：鍋・不明(22片)		16C前半	M-7-f.g-12
210	SF210	道路状 遺構	明黄褐色砂質土			210→99(近世道路側溝)粘 質はないがしまりあり	16C末	M-7-g.f-5
211	表土	表土			龍泉窯系青磁：碗 国産陶器：鉢(絵唐津)			

第13表 遺物観察表 ①

挿図 番号	遺構 番号	種別	器種	法量(cm)0は復元数値			色調 釉調	胎土	備考(器面調整等)	R 番号
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚				
第23図-1	S-65 暗茶褐色土	国産陶器	花瓶	5.6	8.0+ α	-			瀬戸	015
第23図-2	S-65 暗茶褐色土	国産磁器	小坏	(8.0)	5.0+ α	-			萩焼	016
第23図-3	S-65 暗茶褐色土	国産陶器	小坏	(7.4)	3.0+ α	-			関西系	017
第23図-4	S-65 暗茶褐色土	国産陶器	碗	-	1.3+ α	3.2			関西系	018
第23図-5	S-65 暗茶褐色土	国産陶器	播鉢	(34.0)	14.2+ α	-			内外面にうすく釉がかかる。唐津	019
第23図-6	S-65 暗茶褐色土	石製品	手水鉢	(47.2)	16.7+ α	-			凝灰岩製	021
第23図-7	S-65 暗茶褐色土	石製品	五輪塔	21.7	15.9	-			空風輪。凝灰岩製	022
第24図-1	S-138 暗茶褐色土	国産磁器	鉢	(24.6)	11.9	(14.6)			肥前	014
第24図-2	S-138 暗茶褐色土	国産陶器	鉢	-	15.3+ α	(11.8)			唐津	022
第24図-3	S-138 暗茶褐色土	石製品	硯	19.5	8.2	1.5			裏面は砥石として再利用、研ぎ面は平滑である	028
第25図-1	S-152 明茶褐色土	国産磁器	蓋	(10.0)	2.0	-			肥前	002
第25図-2	S-152 明茶褐色土	国産陶器	碗	(11.4)	7.7	4.0			唐津	017
第25図-3	S-152 明茶褐色土	国産陶器	壺	-	10.7+ α	7.0			鉄釉下地に灰白色施釉。福岡系	018
第25図-4	S-152 明茶褐色土	国産磁器	鉢	-	8.9+ α	-			内面施釉前に凹線を描く、貫入一定量認められる。肥前	024
第25図-5	S-152 明茶褐色土	瓦	軒丸瓦	7.3	14.4	1.5			内外面煤付着	025
第26図-1	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	皿	(27.2)	4.5+ α	-			口縁端部面取り成形。肥前	022
第26図-2	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	碗	(9.0)	5.9	3.2			くらわんか碗。肥前	012
第26図-3	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	碗	(10.0)	5.3	4.4			くらわんか碗。肥前	011
第26図-4	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	碗	-	4.9+ α	4.6			見込み釉剥ぎ。波佐見焼	013
第26図-5	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	鉢	-	3.8+ α	4.8			見込みに釉剥ぎ、砂目地残存。波佐見	014
第26図-6	S-145 暗灰褐色土	国産磁器	鉢	-	5.2+ α	-			施釉前に施文、波佐見焼	028
第26図-7	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	鉢	-	7.6+ α	8.0			内面に鉄釉。肥前	041
第26図-8	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	碗	(11.8)	7.7	3.4			玉子手碗。関西系陶器	040
第26図-9	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	碗	-	3.2+ α	3.4			京焼風陶器	038
第26図-10	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	皿	-	2.9+ α	4.4			高台裏に「コ」の墨書あり。内野山窯	045
第26図-11	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	坏	11.2	3.5	2.1			貫入が多くある、見込み釉剥ぎ。関西系陶器	048
第26図-12	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	建水	(11.8)	6.8	(5.5)			備前 焼締陶器	049
第26図-13	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	水差	-	1.6+ α	-			志野焼	047
第26図-14	S-145 暗灰褐色土	国産陶器	播鉢	(33.8)	9.3+ α	-			内面使用痕が認められる。関西系	052
第26図-15	S-145 暗灰褐色土	瓦	軒平瓦	9.6	9.7	3.0				059
第27図-1	S-146 明茶褐色土	国産磁器	蓋	(9.6)	2.5	3.6			瀬戸美濃	001
第27図-2	S-146 明茶褐色土	国産磁器	碗	(10.0)	5.1	4.2			肥前	004
第27図-3	S-146 明茶褐色土	国産磁器	小坏	5.2	1.6	1.2			胴部に明瞭にロク口痕が残る	010
第27図-4	S-146 明茶褐色土	国産磁器	小瓶	1.6	3.5+ α	-			型押し成形、焼成釉調の発色良好。肥前	008
第27図-5	S-146 明茶褐色土	国産磁器	小瓶	-	3.9+ α	2.8			型押し成形。肥前	009
第27図-6	S-146 明茶褐色土	国産陶器	碗	(10.4)	3.5+ α	-			口縁部に淡青色釉施釉。	018
第27図-7	S-146 明茶褐色土	国産陶器	碗	(8.8)	5.8	3.4			端反碗、貫入が多くある。関西系	019
第27図-8	S-146 明茶褐色土	瓦	軒丸瓦	9.0	9.0	1.4			菊花文	027
第28図-1	S-99 暗灰褐色土	国産磁器	碗	(10.8)	2.6+ α	-			肥前	001
第28図-2	S-99 暗灰褐色土	国産磁器	碗	(10.8)	2.9+ α	-			肥前	003
第28図-3	S-99 暗灰褐色土	国産磁器	碗	-	2.8+ α	-			肥前	002
第28図-4	S-99 暗灰褐色土	国産磁器	皿	-	1.8+ α	-			白磁の花弁皿。口唇部に鉄釉	005
第28図-5	S-99 暗灰褐色土	国産陶器	皿	-	2.9+ α	8.6			全体に釉薬は施釉していない、もしくは2次被熱したもの。瀬戸美濃	004
第28図-6	S-99 暗灰褐色土	国産陶器	鉢	-	4.0+ α	6.0			唐津	009

第14表 遺物観察表 ②

挿図 番号	遺構 番号	種別	器種	法量(cm)0は復元数値			色調 釉調	胎土	備考(器面調整等)	R 番号
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚				
第28図-7	S-99 暗灰褐色土	国産陶器	碗	-	4.3+ α	4.6			胴部内面に胎土目付着。唐津	007
第28図-8	S-99 暗灰褐色土	国産陶器	碗	-	2.6+ α	-			唐津	006
第28図-9	S-99 暗灰褐色土	国産陶器	花入れ	-	4.4+ α	-			型押し成形。唐津	008
第28図-10	S-99 暗灰褐色土	土師質土器	蓋	(23.2)	2.5	20.6	(内)灰黄色 (外)にぶい橙色	石英、長石、角閃石、白色粒子	底部回転系切り離しをナデ消す	010
第28図-11	S-66 明灰黄褐色土	土師器	皿	-	2.5+ α	-	(内・外)にぶい橙色	角閃石、白色粒子 黒色粒子	京都系。皿C類	002
第28図-12	S-66 暗茶黄褐色土	土師器	坏	(12.0)	2.4	(8.2)	(内・外)にぶい橙色	長石、角閃石 白色粒子	底部回転系切り離し	004
第28図-13	S-66 明灰黄褐色土	土師器	碗	-	1.9+ α	(6.4)	(内)淡灰黄色 (外)淡橙黄色	長石、雲母 黒色粒子	京都系。碗C類	001
第28図-14	S-66 明灰黄褐色土	土師器	小皿	(6.8)	1.0	(6.0)	(内・外)橙色	角閃石 白色粒子	底部回転系切り離し	001
第28図-15	S-66 明灰黄褐色土	土師器	坏	-	1.4+ α	-	(内・外)にぶい橙色	橙色粒子 白色粒子	底部回転系切り離し(摩滅で不明瞭)	003
第28図-16	S-66 明灰黄褐色土	国産陶器	播鉢	-	6.3+ α	(14.4)			内面に使用痕が残る。備前	005
第29図-1	S-1 暗茶褐色土	中国産磁器	碗	-	2.5+ α	-			龍泉窯系青磁。碗類	003
第29図-2	S-1 暗茶褐色土	土師器	皿	-	1.2+ α	-	(内・外)茶褐色	長石、赤色粒	皿C類	001
第29図-3	S-1 暗茶褐色土	土師器	坏	-	1.3+ α	5.6	(内)明赤褐色 (外)茶褐色	白色粒子	底部回転系切り離し。坏B	002
第29図-4	S-115 暗茶黄褐色土	国産磁器	碗	(11.4)	3.0+ α	-			肥前	002
第29図-5	S-115 暗茶黄褐色土	国産磁器	碗	-	1.8+ α	-			肥前	001
第29図-6	S-115 暗茶黄褐色土	土師質土器	焙烙	-	3.7+ α	-	(内)淡橙褐色 (外)にぶい黄褐色	白色粒子	外面全体に煤付着	005
第29図-7	S-115 暗茶黄褐色土	土師器	坏	-	1.2+ α	8.4	(内)明赤褐色 (外)茶褐色	長石、赤色粒子	坏B	004
第29図-8	S-115 暗茶黄褐色土	国産陶器	播鉢	-	3.8+ α	-			化粧土を施した後に擂り面の線引き、内面に使用痕が見られる。備前	007
第29図-9	S-115 暗茶黄褐色土	瓦質土器	播鉢	(28.8)	5.5+ α	-	(内・外)黒灰色	白色粒子		008
第29図-10	S-115 暗茶黄褐色土	瓦質土器	捏鉢	(37.8)	9.6+ α	-	(内)暗灰茶色 (外)暗灰褐色	角閃石、石英 白色粒子		006
第29図-11	S-115 暗茶黄褐色土	瓦	軒平瓦	-	3.0+ α	-				009
第30図-1	S-200 暗茶褐色土	中国産磁器	盤	-	3.2+ α	-			厚く施釉。龍泉窯青磁	007
第30図-2	S-200 暗茶褐色土	国産陶器	播鉢	-	3.6+ α	-			備前、摺目に使用痕が認められる	010
第30図-3	S-200 暗茶褐色土	瓦器	碗	-	1.0+ α	2.4	(内・外)灰黄色	精良、白色粒子	和泉型碗。碗C類	008
第30図-4	S-200 暗茶褐色土	瓦質土器	火鉢	-	2.8+ α	-		長石、白色粒子	口縁部にスタンプ	009
第30図-5	S-200 暗茶褐色土	瓦	軒丸瓦	8.3	12.1	1.5			ナデ、工具ナデ	011
第30図-6	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	(13.2)	3.0	6.8	(内・外)茶褐色	角閃石、石英 長石、赤色粒子	底部回転系切り離し、外面に黒斑あり、内面に列点記号あり(加工成形)。坏B	005
第30図-7	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	(13.0)	2.5	6.6	(内・外)にぶい黄褐色	角閃石 白色粒子	底部回転系切り離し、板状圧痕が残る。坏B	006
第30図-8	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	(14.8)	2.9	7.2	(内)橙色 (外)にぶい橙色	角閃石、長石 赤色粒子	底部回転系切り離し	004
第30図-9	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	(12.0)	2.9	5.6	(内)橙色 (外)にぶい橙色	角閃石、石英 赤色粒子	底部回転系切り離し。坏B	002
第30図-10	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	-	1.9+ α	6.8	(内・外)にぶい橙色	角閃石、石英	焼成後穿孔あり。灯明皿として転用	003
第30図-11	S-200 暗茶褐色土	土師器	坏	(9.0)	1.9	4.6	(内)橙色 (外)茶褐色	石英、長石 赤色粒子	底部回転系切り離し。坏B	001
第30図-12	S-200 暗茶褐色土	石製品	石臼	28.0	20.0	8.0			凝灰岩製	013
第30図-13	S-200 暗茶褐色土	石製品	玉砂利	3.5	2.5	0.7			変成岩	012
第31図-1	S-2 灰黄褐色土	タイ産陶器	四耳壺	-	9.3+ α	-		淡橙白色粒子	内面に指頭圧痕が残る回転ナデ。横形の耳を貼り付けた痕跡が残る、肩部に3条の沈線。ノイ川窯	001
第31図-2	S-92	国産磁器	瓶	-	1.3+ α	-			伊万里	001
第31図-3	S-92	国産陶器	碗	(12.6)	3.8+ α	-			唐津	005
第31図-4	S-92	国産陶器	鉢	(22.4)	3.5+ α	-			貫入が多くある。唐津	003
第31図-5	S-92	国産陶器	皿	(20.6)	2.2+ α	-			唐津	002
第31図-6	S-92	国産陶器	碗	(16.4)	1.6+ α	-			唐津	004
第31図-7	S-92	国産陶器	皿	5.7	5.5	1.5			転用品。周辺を打ち欠く。唐津	006
第31図-8	S-100 暗茶褐色土	国産磁器	碗	(9.4)	2.2+ α	-			肥前	001
第31図-9	S-100 暗茶褐色土	国産磁器	皿	-	1.7+ α	-			口縁端部面取り成形、一部釉剥ぎ	002
第31図-10	S-101 暗茶褐色土	中国産磁器	盤	-	5.2+ α	-			龍泉窯系青磁	001
第31図-11	S-132	国産磁器	皿	-	2.4+ α	(6.4)			高台裏に「東新町」の焼継文字あり。伊万里	004
第31図-12	S-157 暗茶褐色土	国産磁器	皿	(21.1)	3.2	(12.1)			肥前	001

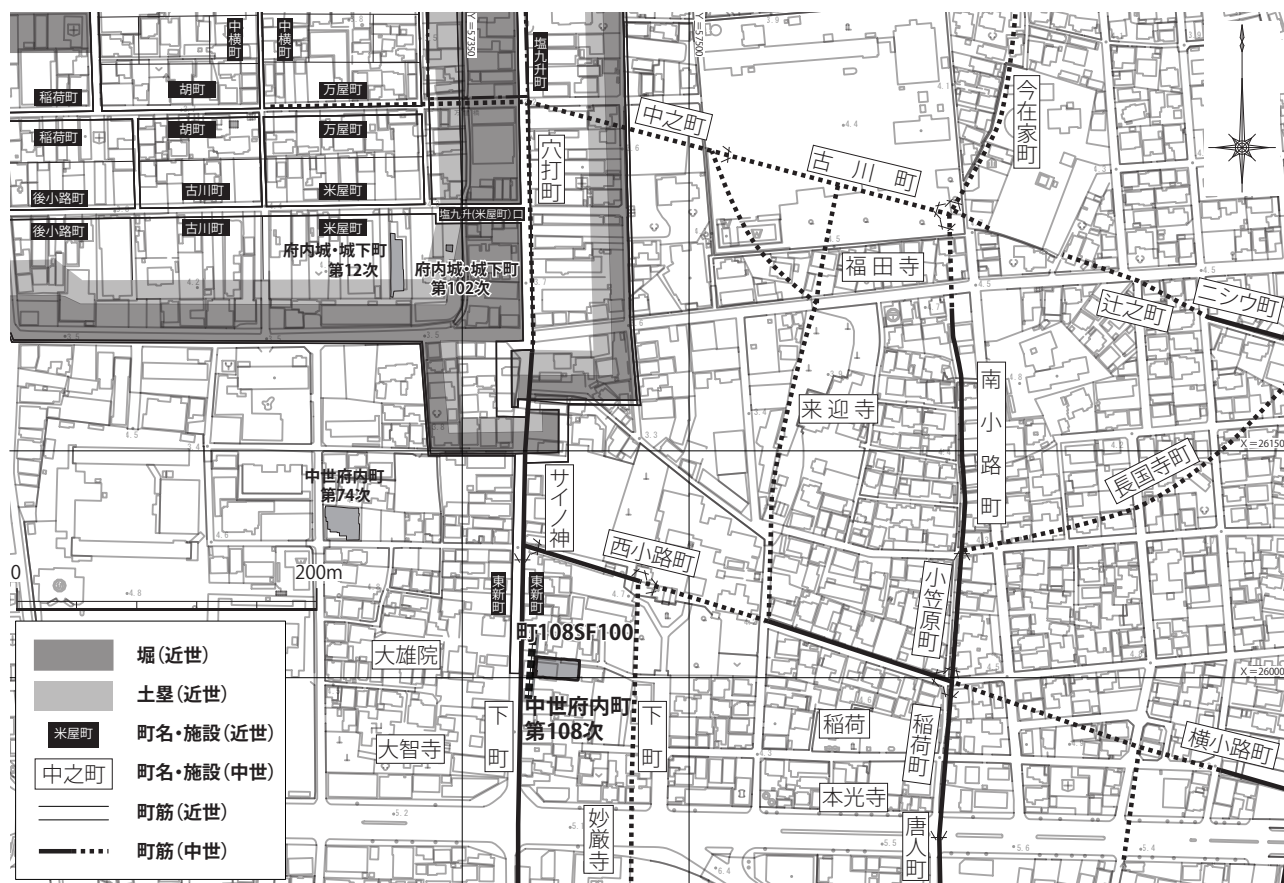
2. 19 世紀前半～中頃

道路状遺構（SF100）の側溝（SD099）をはじめ、溝状遺構（SD145・146）と土坑群（SK065・090・091・107・125・138・140・158）が該当する。道路状遺構が確実に存在する段階で、道路の約 10m 東側に同時期の溝状遺構（SD145・146）が配置される。土坑群の多くは溝状遺構より東側に分布しており、町屋の裏手に土坑群が形成されたものと想定される。

第 2 節 近世日向道と「東新町」推定地における遺構分布について（第 32 図）

本調査区の北側一帯は広く攪乱が及び、南側一帯には近代～昭和前半期までの土坑群が重複して分布していることから、江戸時代の遺構分布について明確にすることは困難である。しかしながら、府内城・城下町の塩九升口から南下する近世日向道に比定される道路の一部を検出し、その東側に 18 世紀～19 世紀中頃の遺構群の存在を確認することができた。溝状遺構（SD146）の上層で検出された SD132 からは焼継ぎされた肥前系磁器碗の底部に「東新町〇〇や」と朱書きされているものが出土している。当該地が近世の東新町の推定地であることを踏まえれば、この文字はこの碗の所有者を示すものであることから、これらの遺構群が府内城・城下町の東新町を構成するものであることを追認することができたと言える。

第Ⅱ章第 2 節で触れたように、東新町は府内城・城下町の塩九升口から南下する日向道沿いに形成された新町で、府内城絵図の中で最も古く、一番詳細で精巧な絵図とされる豊後府内城之絵図（正保城絵図）から 17 世紀中頃にはすでに存在した町屋である。今回の調査では、町の成立に係る所見は得られなかったものの、近世日向道が復元図のとおり、市街地の幹線道路に近接して発見されたことから、この幹線道路が江戸時代から継承された道路であることが実証されたことになる。また、近世日向道に沿って形成された東新町の町割りは明治期の



第 32 図 「東新町」推定地と検出された近世の道路

地籍図に短冊地割として認められ、今もなお当該地一帯に当時からの地割りが明瞭に残されている。
町の成立時期の検証と町屋の構造説明は今後の課題である。

第3節 中世大友府内町跡第4南北街路と 「下町」推定地における遺構分布について（第33図）

第4南北街路の存在は、すでに現道の拡幅工事に伴い行われた、中世大友府内町跡第27次調査（以下、町27次調査と称す。）において確認されており、15世紀末～16世紀初頭頃には敷設され、16世紀後半～末頃まで存続したことが判明している。第33図は第4南北街路跡の検出場所を繋ぎ推定した路線図である。「府内古図」を基に復元したものとほぼ合致するものの、町27－1次B調査区で検出された木戸跡と考えられる布掘り遺構の中心と、町27－4次調査区の道路推定中心線を基軸にすると、道路の主軸方向は若干東に傾く。しかしながら、今回の第108次調査区で検出された16世紀末頃の道路状遺構の主軸は、西側に振れる可能性が高く、僅かに蛇行する南北道路であると推測される。

第4南北街路に沿って形成された「下町」に推定される今回の調査区では、16世紀代の遺構は僅少であるものの、調査区の西端部で第4南北街路に比定される道路状遺構が確認され、道路端の約15m東側に井戸跡や土坑群が近接して分布する。現状ではこれらに明確な時期差はあるものの、先述のとおり道路状遺構の敷設時期が既往の調査成果から遡る可能性は高く、併存するものと推測される。

また、第1・第2南北街路とそれに面した町屋の調査成果から、町屋の奥行きは間口から約30mと推定されており（註14）、これを踏まえれば本調査区の東側に分布する井戸や土坑群は町屋の裏手に形成されたものと想定される。

第Ⅱ章第2節で触れたように、町27次調査区で検出された道路状遺構の下層には14世紀末～15世紀前半頃に比定される南北方向の溝状遺構や柱穴列が検出され、第4南北街路の成立時期がさらに遡る可能性は極めて高くなっており、近年では中世大友府内町の基軸となった道路の1つとして評価されている。

府内町の形成に先駆け13世紀以前から道路が存在した可能性も指摘されていることから、その形成時期と成立要因の解明は重要な課題である。

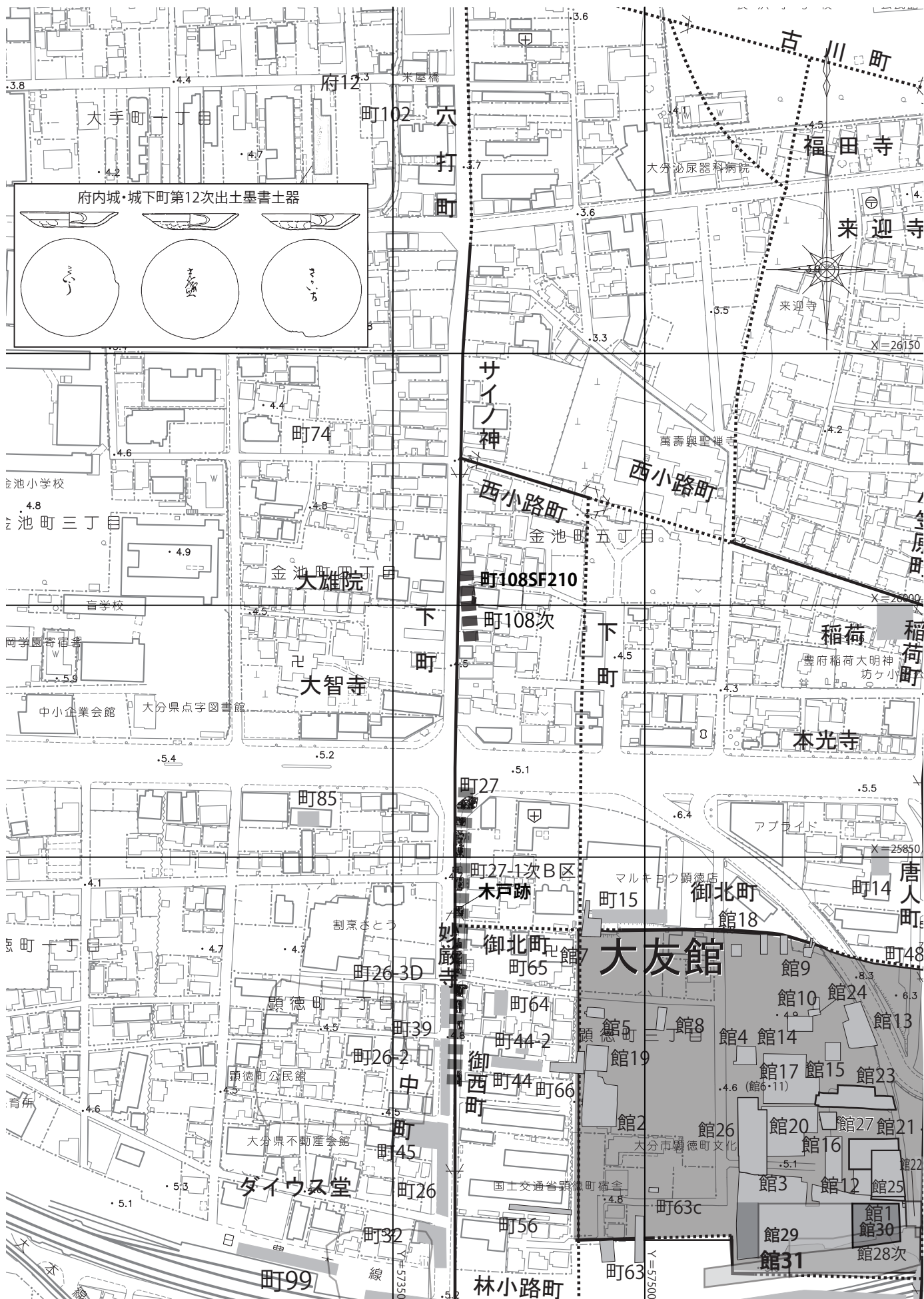
今後の検討にあたり、注目されるのが「府内古図」に描かれた沖ノ浜へ向かう道路である。これは、中世大友府内町の最北の東西道路から勢家津や沖ノ浜の港湾と結ぶ道路で、14世紀には整備が開始された可能性が指摘されている（註15）。推定ルートでは府内城・城下町を横断するもので、城下町の下層から道路状遺構は発見されていないものの、推定ルート沿いには中世前半期の遺構群が分布する（第2図）。

12世紀末～13世紀前半頃に比定される溝状遺構や土坑などが相当し、これらの遺構からは和泉型瓦器碗や京都系土師器皿、そして篠窯産須恵器鉢など広域流通品が一定量出土する。

また、第4南北街路推定地沿いにおいても類似した事象が認められ、12世紀代の遺構・遺物が点在する。この街路は上野台地を縦断し、古代官道の豊後道と日向道推定ルートの交差点と結節する可能性が指摘されており（註16）、中世前半期の幹線道路として機能していた可能性が示唆される。

引用・参考文献

- 註1 山村亜希2002「中世前期都市の空間構造と都市像—13世紀豊後国府を中心として—」『人文地理』第54号第6巻 人文地理学会
註2 玉永光洋2014「戦国都市 豊後府内 空間構造と府内再移転を中心に」『白杵史談』第103号 白杵史談会
註3 大分市教育委員2006『若宮八幡宮遺跡 第1次発掘調査』上野ヶ丘中学校の校舎建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
註4 註3と同じ。
註5 坂本嘉弘2008「中世都市豊後府内の変遷—考古学の視点から—」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院
註6 玉永光洋2015「第Ⅱ章 遺跡の立地と環境」『大友氏館跡1』大分市教育委員会より一部改変



第33図「下町」推定地と検出された第4南北街路

註7 中世大友府内町跡と大分川を挟み対岸に位置する下郡遺跡群では、古代の道路状遺構が現在のＪＲ豊肥線と重複して検出されている。これらの道路跡は自然堤防上の最高位に立地し、安定ルートの確保を最優先に行われる路線と古代の道路跡が合致することから意識的に選地されたものと考えられている。道路の計画決定に際し、自然堤防が大きく影響したものと判断される。

大分市教育委員会2005『下郡遺跡群 Ⅲ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2

註8 大分市教育委員会2007『大友府内11』中世大友府内町第74次調査報告 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

註9 木村幾多郎2001「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

註10 大分市歴史資料館1995『豊後府内城』第14回特別展「城のある風景」図録

註11 大分市史編さん委員会1987『大分市史』中 大分市

註12 註10と同じ。

註13 註10と同じ。

註14 大分市教育委員会2002『大友府内4』中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書

玉永光洋・坂本嘉弘2009「第2章 町並みの発見」『大友宗麟の戦国都市・豊後府内』シリーズ「遺跡を学ぶ」056

新泉社

註15 註6と同じ。

註16 註1と同じ。



108 次 -1 区第 1 面遺構掘削完了 (西より)



108 次 -1 区第 2 面遺構完掘状況 (西より)



108 次 -2-2 区第 2 面遺構掘削完了 (西より)



調査区西壁土層断面 (東より)



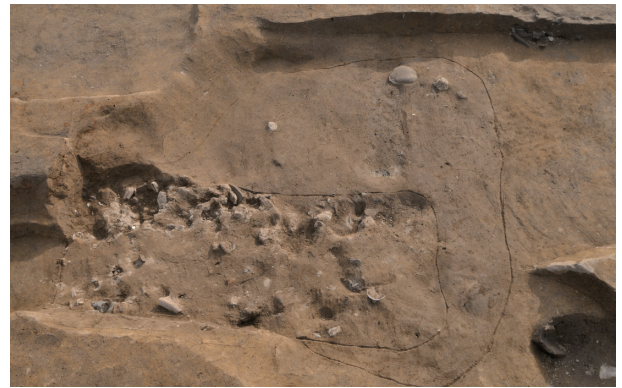
調査区南壁土層断面(北より)



調査区西壁土層断面(東より)



SK065 遺構完掘状況(南より)



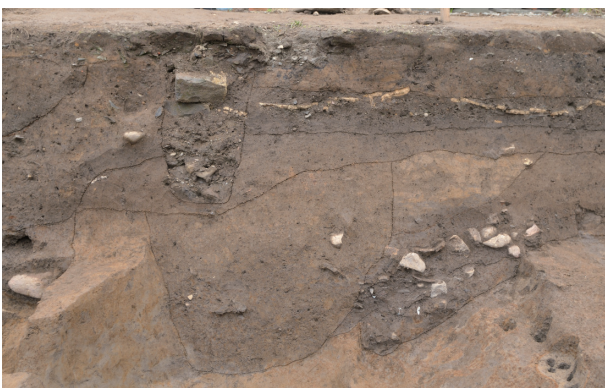
SK076 遺構検出状況(北より)



SK152 遺構完掘状況(北より)



SD145 遺構完掘状況(北より)



SD145 遺構南壁土層断面(北より)



SD146 遺構完掘状況(北より)



SD146 遺構南壁土層断面 (北より)



SF100・210 調査区南壁土層断面 (北より)



SD110・111・112 遺構完掘状況 (北より)



SE066 遺構完掘状況 (東より)



SE066 遺構土層断面 (南より)



SE066 井戸杵立ち上がり (東より)



SK001 遺構検出状況 (北より)



SK001 遺構完掘状況 (北より)



SK115 遺構完掘状況 (南より)



SK115 遺構土層断面 (東より)



SK200 遺構完掘状況 (北より)



SK200 遺構土層断面 (北より)



SK200 遺構東壁土層断面 (西より)



SF210 遺構完掘状況 (北より)



SD110・111・112 遺構検出状況 (東より)



SD112 遺構土層断面 (北より)



第2面2-1区遺構完掘状況(西より)



SD110 遺構完掘状況(東より)



SD113 土層断面(東より)



SD110 遺構掘削状況(東より)



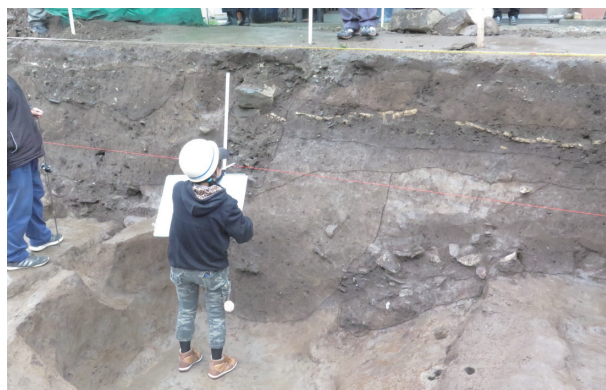
SD110 遺構土層西壁断面(東より)



道路状遺構(SF210)路盤掘削状況(北より)



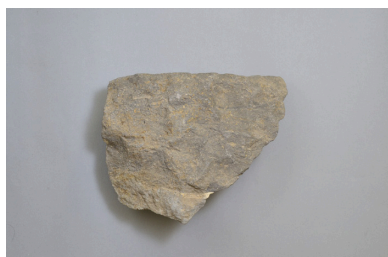
SF210に付帯する溝状遺構(SD110)掘削状況(東より)



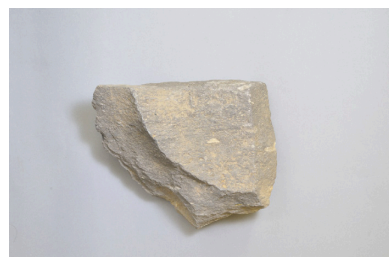
調査区南壁土層断面図作成状況(北より)



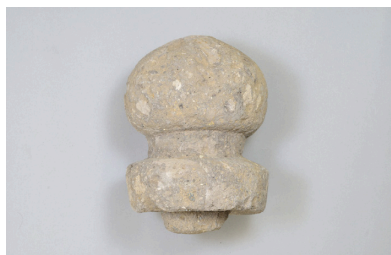
第 23 図 -1



第 23 図 -6



第 23 図 -6



第 23 図 -7



第 24 図 -1



第 24 図 -3



第 24 図 -3



第 26 図 -11



第 26 図 -11



第 26 図 -13



第 27 図 -3



第 27 図 -3



第 27 図 -4



第 27 図 -4



第 29 図 -9



第 29 図 -9



第 29 図 -10



第 29 図 -10



第 30 図 -1



第 30 図 -1



第 30 図 -5



第 30 図 -6



第 30 図 -6



第 30 図 -7



第 30 図 -12



第 30 図 -12



第 30 図 -13



第 31 図 -1



第 31 図 -1



第 31 図 -10



第 31 図 -10



第 31 図 -10



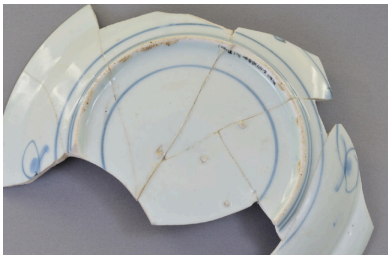
第 31 図 -11



第 31 図 -11



第 31 図 -12



第 31 図 -12

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおともふない							
書 名	大友府内 2 1							
副 書 名	中世大友府内町跡第 108 次調査 集合住宅建設に伴う発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第 137 集							
編 著 者 名	塩地 潤一 有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者 堀井 泰樹）							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒 870-8504 大分市荷揚町 2 番 31 号 TEL (097) 534-6111(代表) FAX (097) 536-0435							
発 行 年 月 日	西暦 2015 年 3 月 27 日							
ふりがな	ふ り が な	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
ちゅうせいおおともふないまちあと	おおいたしかないけまち	44201	201051	33° 13′ 58″	131° 36′ 57″	20141008～ 20141130	512	集合住宅 建設
中世大友府内町跡	大分市金池町							

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
中世大友府内町跡	都市遺跡	中世 近世	土坑・溝状遺構・道路状遺構	土師器、肥前陶磁器、関西系陶器、 軒平・軒丸瓦、硯 タイ産四耳壺（ノイ川窯）	

要 約	<p>調査地点は、中世において推定の第4南北街路、近世においては塩九升口より南下する日向道の推定地周辺にあたることから、中・近世の道路状遺構の確認及び、その道路状遺構に面した町屋敷の確認を主として調査を行った。</p> <p>調査の結果、近世においては、18世紀前半から19世紀中頃の遺構群が重複して検出された。「東新町」の焼継ぎ文字がある肥前染付皿が出土していることから、調査地が近世における「府内城下の復原図」にある「東新町」である可能性が示唆された。また、調査区側端部においては、道路側溝と見られる溝状遺構及び、路盤と推定される遺構が南北に展開する形で検出した。掘り込みを行った後に路盤を築造するという、府内に見られる道路状遺構の特徴を示していることから、府内城下町の城門へつながる日向道の一部と推定される。その他、染付筒形碗や内野山窯陶器などが出土した大型の溝状遺構も検出した。</p> <p>中世においては、近世道路状遺構の下層から全体的な掘り込みを行った後に、路盤となる整地土を搬入し、側溝を掘ったと考えられる道路状遺構が南北に展開する形で検出した。遺構の状況などから、第27次調査等で確認されている推定の第4南北街路の一部と推定される。その他、調査区東端部では16世紀前半と見られる土師器坏が出土した大型の土坑や、調査区中央部では井戸跡などが確認された。</p>
-----	--

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第137集

大友府内 21

中世大友府内町跡第 108 次調査

—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—

2015 年 3 月 27 日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町 2-31